
ここから始まったp a r t - 2

魔法戦隊三輪野助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ここから始まった part - 2

【Nコード】

N2323B

【作者名】

魔法戦隊三輪野助

【あらすじ】

ここから始まったの続編でコナンと蘭の最終決戦までの話です。そして今までの謎がいろいろと明らかになる。そのきっかけとなる数々の出来事が複数ある。作者の勝手な都合により長編になります。誤字脱字気づいた部分は暇な時には必ず修正します。見逃している部分があればメッセージなどで教えていただけると幸いです。

part - 2 / 序幕 (前書き)

コナン：シルバーブレット

蘭：組織のあの方

ベルモット&ジン&ウォッカ：組織のメンバーだった。

何十年か前は凶悪犯のグループの仲間だった。

キャンティ&コルン&ピスコ：あとから組織に入った

ピスコは博士の年の離れた兄

宮野厚司&エレナ：あの女という者に死者を蘇らせる薬を作らされた

その薬の開発中なくなった。

part - 2 / 序幕

今は時が経ち夕方

空手の部活は終わった。

いつもと同じ生活に戻った。

コナン君は探偵事務所に居る。

そして私と一緒に会話をしている。

お互いに昨日のことは何もなかったかのように・・・

お父さんも沖野ヨーコが主演しているドラマを見ている。

今は、平穏な時間――

私は夕飯の支度をする。

一応酔っぱらいお父さんの世話もする。

このまま時が刻まなければいいのに・・・

そう思っても時は過ぎていく。

これからいろんな波乱が身の回りで起きてくる。

さまざまなことが複雑に絡んでくる。

――私と新一との間に溝が深く広がる。

そしてだんだん私と新一の最終決戦までタイムリミットは近づいてくる。

最終決戦までの時間はもうちょっとしか残されていない……。

それまでの時間もさらなる難題が隠されている……。

それは未知なる真実

そのころは予想もしていないことがどつさり隠されている……。
謎はまだまだのこっている。

これから先については予想もできない。

さまざまなエピソードが重なっていくとも知らない……。

まだ謎はほとんどわからない……。

もうそろそろ謎が明かされるときがきた……！！

いよいよ真実へと動くときがはじまった。

謎が解き明かされたそのあとに待っている結末、それは――
組織との――いや、蘭との最終決戦
そう、ここからは、最終決戦までの長い道のりが用意されている

part - 2 / 序幕 (後書き)

三輪野助「みなさん、世界止めての続編です。
変な文章ですがよろしくお願いします。

まだコナンは出てきません。」

評価お願いします

m () m

part - 2 / 1 夕飯（前書き）

タイトル微妙ですみません

part - 2 / 1 夕飯

夕飯を食べている。

久しぶりに3人で……

それは、昨日からだ。

一昨日コナン君は、探偵事務所に居なかった。

その日彼は組織のアジトに潜入していたからだ。

私も自分の作った夕飯に手をつけなかった。

あの沖野ヨーコ好きなお父さんも見たかった番組を消して、夕飯も食わず、コナン君のこと心配していた。

一昨日は誰も夕飯に手をつけていなかった。

夕飯は寂しく片付けられた。

それが今日は普通にテーブルを囲んで、

3人で夕飯を食べている。

今までのこと何もなかったかのように……

残っているのは、

私達が戦った時の痛々しい傷跡。

ひしひしと痛む。

堕天使に刻まれた刻印のようだ．．
ずっと残っている。

新一の傷跡も罪人によつて一生消えないまま．．
新一も汚してしまった。

彼は本当に心の優しい持ち主なのに…

その優しさにウソ偽りがないのに．．

そんな新一にも傷をつけてしまった。

私の優しさなんて本物ではない…。

本当は罪人なんだから．．

私も新一、あなたのように

本当の優しさを持っていたらよかったのにね…。

でももう遅い！

私と新一はすでに敵どおしなんだから．．

私は彼とは、一歩違う道を歩んでしまったから．．

悔しいけど、敵どおし……

ねえ… 新一

この関係は運命なのかな？

教えてよ…。新一

「蘭ねえ…ちゃん蘭…ねえちゃん

どうしたの？」

誰…誰なの？

今の声は…

とっても優しい声

久しぶりに聞いた幼そうな声

少し懐かしい…

一体誰？

「蘭ねえちゃん!!」

えっ… コナン君の声

「ど、どうしたの？」

コナン君…」

「蘭ねえちゃんのほうこそどうしたの？」

さっきから怖い顔をしているけど…

何かあったの？

大丈夫・・・？」

「確かに蘭、ちょっと様子がおかしいぞ。
どうしたんだ！？」

「別に大丈夫よ・・・

コナン君も戻ってきたし、何も・・・心配なことはないよ・・・。」

微妙な途切れのある蘭の声

コナンは違和感があることに

気づいた。

コナンはご飯を食べるのを止めた。

そして動いたはしを止めた。

ちよつとの時間が経ってから

再びはしの先で小さな音をたてて

動かしている。

蘭もその仕草に気づいた。

お互いに自分たちの仕草や様子ばかり見て、

ちょっと気まずいような時間。

部屋の中の空気が重い。

一見楽しそうな夕飯の時間。

でも実はそれぞれ複雑な思いは残っていた。

やはりお互いに妙な仕草は隠せなかった。

「オイ… お前ら飯食わねえのか？」

「えっ あ、うん食べるよ。」

やはり声に途切れがある。

何か少し動揺しているようだ。

蘭のはしは小さく動く。

コナンも同じくはしの動きが小さい。

お互いに話したいことは

たくさんある。

でもなかなか言えない。

今日の夕飯の時間は

何も起こらない。

でも、みんな沈黙である。

「ねえ…コナン君

今の学校生活って楽しい？」

私は今の沈黙から逃れるために

少し話しかけてみた。

「うん… あいつらと遊んでいる時は楽しいけどね。

でもなんでそんなことを聞くの？

蘭ねえちゃん…急にどうしたの？」

「ううん…別に深い意味はないわ。

ただコナン君の学校の様子しりたかっただけよ。

私にとって帝丹小って懐かしいから…」

そう懐かしいわ…

あの頃はまだ罪人になっていなかったから…

あの頃に少し戻りたいなあって思ってしまったわ。

私ね、あとコナン君と少し話せたり、

一緒に夕飯を食べることがよかった。

ごく普通の会話だけど・・・

ごく普通の夕飯の時間だけど・・・
思いだすたび涙が出そうになる。

何気ない仕草も思いだすと切なくなる。

何気ない今すべてが、私にとって――悲しいような切ないような――
複雑な時間

そんな時間もだんだん過ぎていく・・・

これから先は戦いが待っているのだから・・・

part - 2 / 1 夕飯（後書き）

三輪野助

「タイトル微妙ですね…。」

しばらくごく普通日々ばかりだと思えます。」

コナン

「なるべく蘭と戦わずに蘭の心取り戻したいけどなあ…。」

三輪野助

「コナン！何言っているの

絶対に戦わせるのだから…。」

コナンたくさん危険な目に遭うからね…。」

コナン

「オレは不死身じゃねえよ！」

三輪野助

「いきなりめちゃくちゃ下手な文章です。」

評価お願いします

m () m

part - 2 / 2 降っている雪

今は冬。

寒くなってきた。

昼間はまだ暖かいのだが夜は寒い。

部屋にはストーブがつけられている。

暖かい空気と冷たい空気が混じっている。

私は夕飯を食べ終えた後食器などをキッチンに持っていった。
コナン君は席をたって自分の部屋のほうへ行こうとしている。

「あ…、まってコナン君」

「何・・・？ 蘭ねえちゃん」

「食器キッチンに運んでいい？」

「うん……いいよ。」

コナン君はボソッと一言言って自分の部屋へ行った。

その一言が私にとってせつない。

それはコナン君が私の傍からいなくなってしまったから・・・

なんかコナン君と離れた気がする。

そして、もう会えない予感がする。

ただコナン君は自分の部屋に戻っただけなのに・

もう、会えないなんておおげさね・・・。

考えすぎかなあ・・

蘭は深く悩んでいる

テーブルの上に置いてある食器を運ぶ。

食器を全部流し台に入れて、洗う。

蛇口を慎重に回す。

ポタポタと流れている水

水はとても冷たい。

冬だからさらに冷たさを感じる。

組織のような冷たさである。

手がしもやけになりそう

少し赤くなった蘭の手

腕の傷とともに手もヒリヒリとして

とても痛い。

痛みに耐えながら両手を使い食器を洗っている。

傷を負っていてもいつもどおりの慣れた手つきで皿やはしを洗剤でよく洗う。

洗剤が手について赤くなっている手はさらに痛い。

それでも食器を洗い続ける。

家庭の仕事をおろそかにせずいつもどおり普通に

食器を洗う蘭は描かれた絵になっているようだ。

小五郎はテレビをつけず

娘の蘭を見守っている。

今日は珍しく蘭に

『酒持ってきてくれ!!』とは言っていない。

小五郎は家事を行う蘭をただひたすら見ている。

腕の痛みに耐えながらも一つ一つの食器をこまめに洗っている。

棚に食器をしまっている。

使いにくい腕で丁寧に並べる。

食器の片付けが終わってから
自分の部屋へ戻った。

久しぶりに入った部屋はとても寒い。

ストーブもついていない

とても凍りつく。

しもやけっぱい手がさらに痛む。

寒さには耐えきれずストーブをつけた。

ストーブをつけると、

世界は一瞬で変わったような感じがする。

冷えきった部屋が暖まった。

暖かい風が私のほうへとくる。

何か安心したような感じがする。

とても暖かい部屋へ変わっていく。

窓ガラスには冷たい水滴がついている。

風に揺られてたくさんの小さな白いものが溶けて窓ガラスにくっついてくる。

私は窓の前をじっくりと見て
その白いものの正体を知ろうとした。

白いものは風で窓ガラスにも水滴がつくけど、

地べたにも垂直に降っている。

それは簡単に溶けてしまう雪

今は、白銀の世界を作る途中

- - 溶けて - - 溶けて

そしてまた積もっていく。

その繰り返しが続いている。

雪は常に循環している。

だんだん白くなっていく雪

もうじき真っ白な世界が作られていくのである・・・

part - 2 / 2 降っている雪（後書き）

三輪野助「こりゃあとんでもねー下手すぎ！！なんて絶叫している魔法戦隊三輪野助です」

コナン「本当下手だなあ……。」

三輪野助「私もそう思う。みなさん評価お願いします。
ちなみにできたら『白い雪』も読んでください！」

part - 2 / 3 雪とシルバートレット（前書き）

設定は冬です

part - 2 / 3 雪とシルバートレット

――降り続ける雪

私は雪を窓から眺めている。

あまりにもきれいなので窓を開けて雪を見ている。

風に揺られている雪は蘭の顔にあたる。――とてもきれいに降っている。

蘭の部屋はストーブがついて、とても暖かい。
窓の傍は雪のせいか空気が冷たくって寒い。

雪は積もってきた

探偵事務所の付近では人々が歩いている。

車も走っている。

人々が歩いたあと・・・
車のタイヤのあと・・・
しっかりと残っている。

その痕跡を隠すかのように雪は降り続ける。
私は降り続ける雪にひかれている。

美しい雪の風景に引き込まれる感じだ……。

雪をもっと近くで見たい。

組織に入る幼い頃のように雪で遊んでみたい。

雪は私の黒く染まった心を白くしてくれそうだもの・

こんなに雪に好奇心をもったのは久しぶりだ！

雪の白さにほれてしまう・・・

外に行きたい。

そして純白な雪をみたい。

本当は、新一と・・・みたいけど……

私と新一は敵同士

一緒に雪を見るなんてできない・・・。

蘭はコートを着用して、マフラーを首に巻いた。

近くにある手袋も着用した。

つけっぱなしのストーブを消した。

暖かい空気が消えていく。

そして部屋はだんだん寒くなる……。

一通り準備が終わってから外に出た。

ハァー……

蘭はひと息ついた。

その息はとても白い。

雪と同じぐらいに白い。

外から下から見上げて窓の中にある部屋を見ている。

部屋はものさびしさを感じる。

丁寧に片付けられているせいか部屋の中が小さく感じる……。

外と私の部屋の境界線になる窓は、

風がたたいている。

霰も風と同時に吹いている。

風が吹いてきた瞬間、窓をたたく音は大きい。

音がいろいろまじっていて聞き取りにくい……

途切れ途切れに大きな音がした。

私は窓をたたく音が気になってしょうがない。

寒い風が私のほうへ吹いている。

風は私の身の周りを包む。

風は寒すぎる。

風だけじゃなくたくさんの霰も同時に吹いている。

顔に霰が当たる。

冷たすぎる・・・

蘭は霰のせいで濡れた顔をふいてからうつむいた。

新一は外にいないから・・・

今、私は1人ぼっちだから……

白銀の世界に1人だけ置いてかれたら不安になる・・・

白銀の世界は限らない。

あまりにも広すぎて迷ってしまう・・・

新一は雪を見にくるのかなあ・・・？

くる・・・わけないよね……雪を見に行こうなんて約束もしていないのに……

約束していないのに突然私の目の前に現れているなんてありえないよね……

以心伝心なんてできるわけないのにさ・・・

私がつさに思ったこと（雪を見ること）を

新一が考えているわけないよね・・・

バ、バカね……。何期待しているのよ。

新一いや、コナン君なら雪を見にくるだろうなんて適当なこと・・・

コナン君が雪を見にくるなんてこと私の単なる直感なのに・・・

彼なら雪を見にくるだろうと予想していただけ。

新一は私を見捨てたのかもしれない・・・

私は彼を裏切ったのだから……。

それが原因で新一は私のこと嫌いになったの？

新一・・・あなたは私が組織のあの方だと知ったときからあなたの考えていることすべてわからない。

教えてよ・・・新一

あなたのこと全然わからない。

どうすればいいの？

私は今1人ぼっちなの・・・

暗い白銀の世界でいろんなことを迷っているの・・・

新一は敵だけど・・・今だけは一緒に雪を見てほしい。

風が揺れ動く。

ドアを閉める音がした。

ドアを閉めたのは誰なのか気になった。

私は探偵事務所の玄関口を覗いた。

ドアを閉めた人は暗くて見にくい。

でも誰かわかった。

――その人物はとても小さな偽りだらけの少年だった。
彼は階段をコツコツと降りた。

（コナン君、新一・・・？）

こんなところに来る誰が来るのだろうか？

そう思っていた矢先に宿敵にあたるコナンが自分の目の前へと近づいて来る。

何か言い出すのか少々不安になっていた。

階段を降りた瞬間、新一は一言つぶやいた。

「よう、蘭・・・」

私のおもっていた彼は目の前に現れた。

part - 2 / 3 雪とシルバートレット（後書き）

三輪野助「あああ・・話がわけわからない」

コナン「（ダメだからなあこの作者は

今回相当ダメなんだろなあ…）」

三輪野助「どうか評価お願いします。（――＊）o」

part - 2 / 4 雪そして、大切な人

コナン君が来た。

そう、私の目の前に・・・

彼らしくポケットに手をつ突っ込んでいる。

格好つけている。

子供っぽい素振りを見せず

高校生探偵『工藤新一』の雰囲気を漂わせながら現れた・・・

彼はすっかり大人のように・・・

私のことすべて見透かしたように

私を見つめる。

風が吹いた。

私たちの周りに強くふく

雪も同時に私たちの周りを包む。

――とても寒い。

ちょっと気まずい。

それと驚いた……。

脳裏に新一のことが焼き付いていた時に

ちょうどすごいタイミングに新一が来た。

大人びた彼

新一も変わってきたような気がする。

「どうした・・・？」

蘭」

「別に何でもないよ……」。

新一こそどうしてここに来たの・・・？」

「蘭がいないから、探しに来たんだよ。」

それと蘭のことだから

雪を見たがるだろうなあと思ってな。

それで雪を見に行っているだろうと思ったんだ・・・。」

新一は私が雪を見たがっていることを

知っている。

私の考えていることが

見透かされているみたいだ。

「今日は急に雪降ったなあ…」

とんでもなく寒いぜ。」

手袋で手をこする

慣れない小さな手をこすりながら

手を温めている。

「雪つてさ、本当にきれいだよね・・・」

「ん・・・？」

「だって雪は白色じゃない・・・」

白ってとってもいい色なもの・・・

一番明るい色だし、

清い心を表すような色でもあって

素敵な色じゃない・・・

そんな素晴らしい色が限りなく続く白銀の世界

私にとって最高の景色だと思っただ…。」

上を向いて話す蘭

横から見ると輝いて見えた。

オレにも少し蘭の気持ちわかるような気がする。

暗黒な居場所で、その暗黒な組織のボス、として

組織をまとめていくのは大変だっただろう・・・

組織の一員も冷酷で冷淡なヤツらばかり・・・

人を殺すことをなんとも思っていない

殺人鬼の集まり

そんなヤツらをまとめていく

蘭も心を痛めただろう・・・

時には自分の心を

黒く染めなければいけないだろう・・・

つらいのは当然だ。

黒く染まってしまうのだから・・・

だから蘭は組織とは真逆な

白い雪の世界が恋しいんだ・・・。

白い雪は一面に積もっているから・・・。

白だけの世界

蘭はそんな世界が好き

自分たち組織とは違って安らげる世界だから・・・

蘭も落ち着いているみてえだ。

オレはほっとした。

「ねえ…新一

新一は雪は好き？」

蘭は白いマフラーをつけ直し

微笑んでオレに尋ねた。

「ああ……いいと思うぜ。」

雪はさらさらできれいじゃねえか。」

新一は一言ボソツと言って

後ろを振り向いた。

新一の後ろ姿

それはいつもどおりどっか寂しそうな姿・・・

今はコナン君としての寂しいような

雰囲気漂ってくる。

「このままずっと白い雪の世界だったらいいのにね……」。

白銀な世界に包まれたかったのに……

雪は早く溶けてしまう……

いずれは消えてしまう世界なんだね……。」「

蘭の悲しそうな表情

彼女の瞳から涙が出そう……

いつか溶けてしまう雪

私の前から消えてしまうから……

私は今の時間を大切にしている。

貴重な雪を見る時間

私は白銀の世界の変化一瞬たりとも見逃さない。

貴重な今の時間、

この雪を新一と見る時間

私は新一と一緒に雪を見ることが嬉しいのである。
このまま一緒に雪を見たい・・・

part - 2 / 4 雪そして、大切な人（後書き）

見苦しかったらすみません。
なかなか対決しないです

今後の参考として評価と感想お願いします

part - 2 / 5 傷を負った大切な人ゝ輝かしい涙（前書き）

話めちやくちやですみません

part - 2 / 5 傷を負った大切な人へ輝かしい涙

ーーーーとても寒い

手をこすりながら目の前の雪の景色に感動している。

手は温かいが足は冷える。

足は雪に埋もれて冷たすぎる。

長靴の中に雪が入る

雪が溶けて水になるから靴下が濡れた。

あれから数時間しか経っていないのに

雪はたくさん積もってしまった。

強く降り続ける雪

ーーーーもう止まらないほどの雪

いつの間にか私の足が埋まってしまっほど雪は積もっていた。

足はちょっと赤い。

そして、ちょっと痛い

しもやけになったような感じた。

手も痛い。

手袋をつけていても
手は冷たい。

キズがついた腕も寒さのせいか

ものすごく痛む。

包帯で巻き付けられているけど、

痛みを感じる。

キズがよみがえる・・・。

私はしもやけになっている手で

腕を支える。

「蘭・・・大丈夫か？」

傷口をおさえているいるみてえだけど・・・

三日前のキズは痛むのか？」

「大丈夫よ・・・。

私が自分で拳銃で撃ったキズだから気にしていないよ・・・。

あの時、新一に撃たれた麻酔銃の針を抜こうとして

自分の腕を撃つなんてばかげたことを

やってしまったからキズが痛んだだけよ。」

蘭は痛みをこらえている。

とても痛そうだ。

「本当に大丈夫か・・・？」

「私なら大丈夫よ…。」

新一こそ大丈夫なの？

肩のキズはどうなの？」

私が思わず肩を撃ってしまったから・・・

「ああ…オレなら大丈夫だ。

まだいてえけどな……。」

つつつ痛えな……。」

新一も肩が痛そう……

「本当に大丈夫なの？」

「まあな……大丈夫だから気にしないでいいよ……。」

新一はその一言だけ言って私に背を向けた。

私のせいで、新一は傷ついた・・・

私が拳銃で彼を撃ってしまったから

彼にも傷がついてしまったんだ・・・

新一に傷なんてつけない・・・

本当はこれ以上新一を傷つけるなんて嫌

でも私たちが戦うのも運命だから・・・

しかしその運命は私が幼い頃から決まっていた。

私と新一じゃつりあわない・・・

この世で最も大切な存在なのに・・・

どんなにつらいときも新一が助けてくれれば

それだけで嬉しかった。

新一はあまりにも優しすぎる。

そんな新一を私はつらい思いをさせていた。

新一は私のほうを振り向いてくれない。

私が彼を裏切ったのだから・・・

新一と私はそっぽを向けている。

今新一には私は見えていない。

本当は新一に見捨てられたのかもしれない。

そんなこと考えたくもない・・・

でも彼は振り向いてくれない・・・。

（私が組織のあの方だと知ったから見捨てたのかな・・・？）そんなことを考えてショックそうな表情をする。

その瞬間あまりのショックで硬直する。

蘭は密かに隠して握りしめていた拳銃を落とした・・・。

その拳銃を落としたときの音は派手だった。

自分が所持している拳銃は雪の上

雪には拳銃の跡しっかり残っている。

蘭はうつむいて涙を流した。

蘭の涙のしずくは星のように輝いている・・・。

一瞬の輝きだったが

白い雪と同じぐらいきれいなしずくだった。

しずくは白い雪に一滴だけ落ちた。

part - 2 / 5 傷を負った大切な人へ輝かしい涙（後書き）

下手、ワケわからない＆つまらなくてすみません。

話がめちゃくちゃ長いのでこんな話もあります。

この話に出てくるだいたいキャラは決まっていますが出してほしいキャラがあったら感想で書いてください。

それと評価もお願いします。（――＊）。

オレは蘭の方向には振り向かなかった・・・

ーそれは、蘭の悲しそうな表情を見たくないから・・・

泣いているところなんて見たくない。

ー前から決めていた。

”たとえオレの存在が蘭の中から消えたとしてももう二度と蘭を泣かせたくない。”

蘭の涙なんて見たくもない。

しかもオレのせいで

泣いている蘭を見たくない

だからオレは蘭のほうは振り向かなかった・・・

それとも一つ

痛々しい傷を負った蘭の姿を見たくなかったから・・・

オレは逃げているのだろうか・・・

蘭のさびしいような

悲しそうな表情を見ることを恐れているのだろうか・・・

きれいな雪を目の前にして泣いている蘭

オレは傷ついた蘭を見ることができない。

でもそれは今の蘭を受けとめることができないから・・・

本当は蘭が組織のあの方だなんて信じられない。

ましてや組織に貢献しているとも思えない。

オレは蘭を信じている。

でも逃げているよな？

今の蘭の状態を受けとめることができないからって・・・。

だからっていつまでも逃げている

蘭は変わらないまま

しっかりと蘭のこと理解するべきだよな・・・

、蘭のことをわかってやる。、

そんなことに今ごろ気付くなんて

遅いよなあ……………。

それまでは蘭のつらそうな表情を見ることから逃げていた。

「逃げたって何も変わらない」

たった今、そのことに気付くなんて

情けねえなあ……………。

しっかりと蘭を見なきゃいけないな。

オレは蘭の方向へ向きかえした。

「なあ……蘭」

「新一、何……？」

「蘭が組織のあの方である理由はなんなんだ？」

「……………」

蘭は黙っている

オレには言いたくないのだろうか……

なんで蘭が組織のあの方なのか疑問があるのに……

「ベルモットたちのために……」

「え……今なんて言った？」

「なんでもないわ。新一・・・

今の言葉は聞き逃して!!」

どういうことだ？

今確か、

‘ベルモットたちのために’

って言ったよなあ？

なんなんだ？

（ベルモットたちのためって・・・

どういうことが全然意味が分からねえ。

蘭とベルモットたちとの関係がよく分からねえ）
オレはこれ以上は蘭に尋問せめをしなかった。

ただぼーとして降っている雪を見ていた。

蘭には泣いていたあとが残っている。

泣いていることを隠すように涙を拭いている。あれから数時間経つても見えている・・・

蘭と一緒に—————

白い雪でうめつくされた白銀の世界を・・・

part - 2 / 6 白銀の世界（後書き）

なかなか進まなくてすみません…
文章もめちゃくちゃです

評価お願いします

part - 2 / 7 蘭の気持ち（前書き）

コナンは蘭のそばに
いるけどでできません
蘭の心情中心です

part - 2 / 7 蘭の気持ち

白い雪

とってもきれい

黒い心が白く染まるような気がする。

でも今は新一も私も

悲しそうな瞳で雪を眺める。

今私たちの瞳には本当のきれいな雪は見えていない・・・

新一には言えない。

私があの方である理由だけは・・・

絶対に言えない…

理由を言ったら新一は

必ず私のことを心配する。

新一はお人好しだから・・・

私が本当につらいときだっていつも心配して

助けてくれるんだから・・・

自分のことのように必死になる。

たとえ命がけでも私のことを助けてくれる。

新一は優しすぎる

そんな彼を私のことに関わらせたくない。

特に組織のことでは新一には知ってほしくないから・・・

ねえ…新一

私があの方だとわかったとき

あなたは私のことをどんな風に思った・・・？

あるときからあなたが私を見る目が変わった。

私を裏切り者のように見ているように思う・・・

それは私のせいだからしょうがない。

私が組織のあの方なんかじゃなければ、

新一は私のことを冷めたような目では見なかっただろう。

いくら新一が優しくても

本当は私のこと

裏切り者のように思っているだろう。

だってつい最近もあなたを傷ついたし、

今までだって志保ちゃんも含めて、

新一を傷つけていた…。

組織という存在さえなければ、

A P T X 4 8 6 9 なんて薬は開発されなかった。

新一も幼児化しなくてもすんだのに…。

彼もコナン君になりたくてなったわけじゃないのに…。

組織を私が作ったがために……彼は…

幼児化なんてしてしまった…。

新一が探偵事務所にきたときから不安だった。

、幼児化する薬を開発した組織を作った私は恨まれている、

そのことについて頭を抱え、悩んだこともある。

私を裏切り者のように見えていると思う…。

それは私のせいだからしょうがない。

私が組織のあの方なんかじゃなければ、

新一は私のことを冷めたような目では見なかっただろう。

最近私を冷めたような目で見ていないか

とても不安

また2日前のように

新一が遠くに行ってしまう

そんな予感がする。

本当はジンたちに

A P T X 4 8 6 9 を飲まされる前、

トロピカルランドの帰りから

新一は私から遠ざかっていったのかもしれない・・・

私たち、あのころから

距離が遠くなっていたのかもしれない・・・

誰か、教えて……

私と新一は結ばれる運命なの・・・？

それとも正と死がかかっている戦いを永遠に

戦い続ける運命なの・・・？

私たちに定められた宿命はどっちなの？

誰か私たちの運命を教えて……

風が揺れ動いた。

雪も風に揺られる。

私の心と同時に……

ガチャン……

強めにドアが開いた。

強い風のせいで

ドアが開く音が大きい。

振り向くとドアが開いたのは、

探偵事務所のほうからだった。

「コナン、蘭何しているんだ。」

いつもと同じ聞き覚えのある声

聞きなれた声

振り向いたそこには

思いにもよらない人物がいた。

私のお父さんが

名探偵：毛利小五郎が、

灯りのついていない玄関前で

立っている。

part - 2 / 7 蘭の気持ち（後書き）

話がめちゃめちゃ下手です。

展開もうまく進みません。

評価お願いします

m () m

part - 2 / 8 真面目な小五郎（前書き）

話が良くわからない状態です

part - 2 / 8 真面目な小五郎

お父さんが暗闇の中で立っている。

いつもと違って真面目な表情で

私たちの前に降り立った。

ぬけた行動をするお父さんはどこにも

いなかった。

「オイ……蘭そんなどこにいねえで家に戻るぞ……。」

「えっ……あ、うん。」

お父さんは一言つぶやいた。

その後は、背を向け

黙って事務所へ入った。

お父さんは、私が何か悩んでいることを見透かしている……

私たちのことを何でも知っている

あの真面目な表情

すべてを知りつくしているようでとても怖い。

お父さんは真面目なとき

とても冴えているから・・・

事件を解くときだって新一よりも

中身の深い推理をする。

お父さんは私の黒くなってしまった心の底まで

知りつくしているのかもしれない・・・

お父さんも新一と同じく人一倍、心配性だから・・・

新一と同じく事情を聞けば

組織のことに関わってしまう気がする。

私のために自分を犠牲にまでなるかもしれない・・・

今までだって私を助けてくれたのだから・・・

一昨日だってコナン君のこと心配でたまらなかった……。

居候のコナン君にも執着心を持つようになった。

お父さんは素直じゃないから、そっけない言葉を言っし、

思いやりのない言葉を言うことがある。

言葉だつて良くない。

でもその言葉は口だけで、本当は

その裏には思いやりのあるメッセージが隠されている。

それは言葉では表現できない。

何気なくお父さんは

私のこともコナン君のことにも心配してくれる。

あまりにも周囲を心配していて必要以上に

私たちのことを知っているようで

それが怖くてしょうがない。

「オイ、蘭……家に入らねえのか？」

わざわざ気にして

私の名前を呼んでくれたお父さん

相変わらずそっけない一言だけど、

細かいところまで気にかけてくれる優しさ

心もとてもあたたまる一言

いつの間にかコナン君も私の家の入っていた。

私はお父さんの後ろ姿だけを見ている・・・

その間にもコナン君は明るくて暖かい部屋の中

私だけが取り残された。

周りは暗い・・・

冷たく溶けた雪が水のようになって冷たい。気温も低いから、

マフラーに手袋にコートを着用していても

寒さを感じる。

お父さんたちが家にいることを気づいたときは、

不安だった。

私が知らない間に気持ちにたいする変化は膨らんでいた……。

「蘭ねえちゃん、・・・家の中に入らないの？」

コナン君が心配

何気ない気づかい

何気なく幼い声で心配してくれる。

新一に心配をかけさせたくない。

私は慌て玄関前にいって

暗い世界から、

私は走って家の方向へ行った。

明かりがついている部屋の方向へ戻る。

そこにはいつもどおりお酒を大量に飲んでいるお父さんがいた。

テレビをつけて沖野ヨコが出てくる番組を見ている。

いつものお父さんに戻っていた。

part - 2 / 8 真面目な小五郎（後書き）

読んでくださってありがとうございます

話が進みません。

評価お願いします

○（――＊）○

part - 2 / 9 寝る前

部屋は暖かい。

冷え切った心を温めてくれる。

私は時計を見た。

もうすっかり次の日になっていた。

次の日もまた学校

もうそろそろ寝る時間

その前にテレビを目の前に酔っ払っている

お父さんの世話をする。

このお父さんはさっきの

真面目な表情をしたお父さんとは違って

いつものちよつと怠けたお父さんだった。

私はいつもどおりお酒を取り上げた。

「わ・・・ちよつと蘭何するんだ！！」

お酒を返せ・・・」

「何言っているの・・・お酒は禁止よ・・・

一生飲ませるつもりはないわ・・・。

まったく・・・お酒を飲んで酔っ払っているから、

お母さんに逃げられるのよ・・・」

蘭は怖い顔をして小五郎を睨みつけた。

「何言っているんだ。

お酒はオレの必需品だ。」

ブチっ・・・

さらに怒り始めた蘭

指をボキボキ折っている。

「へえ……そう。お酒が必需品ねえ……。」

お酒の飲みすぎは、

アルコール性の病気になるのよ・・・

前もお酒の飲みすぎで病気になって

病院に行ったじゃない。

そんなに病院行きたいのかしら。」

蘭から陰悪なオーラが発している。

指を一本一本ボキボキと大きな音を鳴らして、

小五郎に見せつける。

「さあ……お酒を渡しなさい！」

蘭の視線が怖い小五郎は、

素直にお酒を全部渡した。

「はい……お酒これがすべてです。」

びびっている。

お父さんはしぶしぶお酒を渡した。

私はびびった表情だったお父さんに苦笑い

お父さんは一分も経たない間にぐっすりと寝た。

さすが……眠りの小五郎って言われているだけあって

寝るのも早い。

ある意味関心するわね……。

今日は何にもないよね…。

お父さんからお酒を取り上げたし、

あとはもう寝るだけ・・・

それにしても今日は

長い1日だったね…。

本当は1日は24時間しかないけれど、

今日はそれ以上時間があつたように感じた。

私は自分の部屋に戻った。

コナン君も自分の部屋に戻った。

その間の時間、私たちは

一言もしゃべらなかつた・・・

『おやすみ』とも言わず、無言で部屋に入った。

コナンはベッドに入ったらすぐキョロキョロし始めた。

なんだ・・・？

オレにたいして発している妙な気配は・・・？

どこからか気配を感じる。

しかしその気配はオレも知っている…。

オレが前に感じたものと一緒

しかしその気配らしいものは

蘭からではない・・・

誰か別の人の気配

この感じ前にもどこかで感じた。

オレが知っている人物

さらに妙な気配が強くなった。

探偵事務所に何かが突撃する。

このまままっすぐに直面に何かが近づいている。

その何かはオレの部屋の方

向けられている。

近づいてくる物体は隕石ではない。

しかし身に危険を感じた…………。

オレはすばやくベッドの下に隠れた。

数秒後

パリーン・・・

その物体はコナンの部屋の窓ガラスを突き破った。

ガラスを割ったと同時に大きな音を発した。

ガラスは粉々に砕け散り、

ガラスの破片は周りに散らばった。

part - 2 / 9 寝る前（後書き）

相変わらずめっちゃめっちゃ下手&ワケわからないです。ちなみに前にも病院に行っただってというのは24巻の新出先生が出てきたあの事件のことです。

ワケのわからない話ですいません…

評価お願いします

m () () m

part - 2 / 10 影（前書き）

ワケわからない話です。本当にすみません……………。

part - 2 / 10 影

ガラスがパリーンと割れた。

とても大きな音が響いた。

派手にガラスの破片が落ちている。

オレは危険だから身をひそめながら、

ガラスの破片を調べる。

それを見てわかったことは、

黒い痕跡が残っていた。

微妙に小さな穴が開いていた。

オレがまばたきしている間に

例のものはまた近づいてくる・・・

遠くからただどこかすれた音が聞こえる。

それはかわいた音

一瞬だけ、響きわたる。

連続で聞こえる。

まるで花火のような一瞬だけ派手な音を出す。

火花のような光がかすかに見える・・・

オレは火花の光に追われる・・・

その光は次から次へと別の位置からオレをねらう。

光は拳銃で撃つときに放たれる火花

しかしオレをねらう者の正体はわからない・・・

ただ感じたことのある強い気配

オレをねらう者は影のような存在

正体がまったくわからないが

オレは影のことを知っている・・・

何かを感じた。

オレはしばらくベッドの下に潜り込んでいる。

次から次へと拳銃で撃ってオレをねらう影

影の目的はわからない

考えられるのは、

オレは目的に利用されている・・・。

もしくは自分の目的にオレがいると都合が悪いから・・・

おそらくオレをねらう理由そんなところだろう・・・

影がオレをねらう理由はわからねえけど

こいつはかなりあなどれない。

正体もわからないし、

性別すらわからない・・・

謎に包まれた拳銃を撃ち続ける者は

妙な笑みを浮かばせる・・・

ベッドの下なら撃つてこないと安心した。

しかし予想外なことに

下の角度に撃たれた・・・

オレは一瞬あつけにとらえたような顔をしていた……。

間一髪で光からよけた。

床にしっかりと焦げたような痕跡がついた。

黒い痕跡が染み付いた。

オレはこれ以上自分の部屋にいて危険を感じた。

速いスピードで自分の部屋から出た。

なんとか廊下に逃げた。

しかしほっと一息ついている間にも

拳銃を撃ち続ける。

魔法のように火花の一本線は

オレの目の前で部屋のドアを突き抜けた。

オレはとんでもなく驚いた・・・

遠距離から撃って窓ガラスを粉々に割ってあとも

火薬の一本線は

部屋のドアを突き抜けるのだから・・・

ありえない・・・

火薬の一本線が廊下までつながるワケがない。

でも一本線はつながって部屋のドアをぶち破っている。

大きな穴の開いた部屋のドア

ドアに穴が開いているのを見るたびに

あっけにとらえ口をポカーンと開けている。

あっけにとらえたオレは一瞬我を忘れていた。

思い出すとすぐにダッシュで探偵事務所を出ていった。

外に出た。

外は白銀の世界

そこは一面に雪が積もっている。

雪はきれい・・・

今自分が、影の存在に狙われていることも

わすれるような気持ちになる・・・

しかし汚れている火薬の一本線が垂直に

撃たれていく・・・

火薬のせいで雪は徐々に汚れていく。

オレは走りにくい雪の上を必死に走り続ける。

part - 2 / 10 影（後書き）

本当に×2すいません
なぜかワケのわからない話になってしまいました・

日々投稿するたび話がめっちゃめっちゃ下手になってしまいます

申し訳ないです。

作者がバカ&文章力がまったくないもので・・・本当に申し訳ないです

評価お願いします

o (_ _ *) o m (_ _) m

part - 2 / 1 1 影とコナンく 蘭の気持ち (前書き)

サブタイトルが微妙です

part - 2 / 11 影とコナンと蘭の気持ち

オレは今雪の上

影に隠れた人物はオレに次から次へと撃っている。

探偵事務所の近くにあったスケボーにのって

影から逃げた。

街中でオレを殺すためだけに

しつこく撃ち続ける・・・。

ヤツがオレをねらうたび、感じる。

影に隠れたヤツの気配

オレは覚えがある。

何か・・・何かが頭によぎる。

オレはスケボーで走りつつける。

ヤツはオレを追いかける

オレはさらにスピードをあげ、逃げ切る。

脳裏には影の近くにいる蘭が焼きつく・・・

よくわからないけど

影と蘭が微妙に重なる。

今、一番気になるのは蘭が何をしているのか・・・

なんとなく蘭の様子が気になった。

さらに謎が深まった。

蘭の様子が知りてえ・・・

だが影は街中でオレを殺すため追いかける。

オレは今、自分のことで必死だ。

次から次へと響くかわいた音

オレの邪魔をする・・・。

何かを考える余裕もないくらい撃つスピードははやい

しかも正確にオレの方向へ狙っている・・・。

恐ろしいほど忠実に・・・

蘭、お前は今どうしているんだ。

なんで蘭が影の人物と重なり合うんだよ……

くくくくくくくくくくくくくくくく

蘭は上を見上げている。

さっきの窓ガラスが割れた音

途切れ途切れのかわいた音

遠距離で派手に窓ガラスを割るなんて

普通の威力ではないわ…

かなりの実力者のようね…

拳銃を使いこなしているというレベルなんかじゃない

もっとーもっと

すごい威力

まさかーあの人なんじゃ…

影に包まれた人物

あの人は遠距離からでも

ねらった標的を忠実に殺すことができる。

かすかに聞こえるかわいた音

さつき新一いや、コナン君の部屋で

射撃でもしたのね……。

あの人は手ごわい……

新一、あなたはあの人の魔の手から抜け出せるかしら……

今は、夜中の2時30分

時間だけが過ぎていく。

次の日になっても私たちの時間は変わらないまま……

ふとんの中にもぐっていても寒さを感じる。

足が雪にうまつたときに感じた……

雪の冷たさ

とっても冷たい……

最初は‘冷たさ’を感じなかったけど

だんだんと足が冷えてくる。

赤みのかかった足の指

痛みを感じる。

両足ともに指が赤くてもやけになつたみたい

腕の傷も痛む。

自分で撃ってしまった情けない傷

見苦しい

刻印のように刻まれて傷をみるたび

心まで苦しくなる

新一、今あなたはどこ？

また私の前から去っていくの・・・？

私の心を不安定にするの・・・？

私の心の中にすむ天使と悪魔が騒ぎ始めた・・・

新一を心配する私

新一に対して敵意を抱いてしまった私

私の心は半分ずつ

本当の私はどっちなんだろう

私だと言えるのかどっちの自分なんだろう・・・？

正直わからない

天がくだした私の運命はどっち？

ベルモットは言っていた。

‘エンジェルは微笑みをかけてくれなかった’

エンジェルは私には微笑みをかけてくれるのかな・・・？

微妙に動き出してこの心に・・

私の心の中での決着はつかない。

ただの苛立ちだけ

私は部屋を出て廊下をキョロキョロと見た。

廊下に立ち寄ったときに

予想はしていたが大きな穴がくつきり残った。

ドアの真ん中を通過してした。

ドアには驚くほどすごい穴が開いている

part - 2 / 11 影とコナンく蘭の気持ち（後書き）

文章が下手&話がめっちゃくちゃです
すいません

どうか見捨てないでください

評価お願いします

m ((m

part - 2 / 1 2 コナンの危機（前書き）

本当にわけわからない話ですいません

part - 2 / 1 2 コナンの危機

今は、夜中

蘭は廊下

コナンの部屋の前に立っている。

ものすごい威力で穴があいたドアを見て

妙な違和感を感じた．．

壁に残る黒い痕跡

火薬のようなにおい

穴のあいたドアから見えるものは、

きれいに降り積もる白い雪

遠くから見ると真っ白な雪

そこは白銀の世界のよう

しかし雪を近くで見ると

火薬のせいで染みついて汚れている。

火薬は影の存在が銃撃していることで

次から次へと増え続ける

火薬のけむりで雪が汚れていく

そして影によって新一は、傷ついていく

新一の身な危険を感じる。

影が今日来るなんて思いもしなかった・・・

この世で一番会いたくない人物

影のような存在に再び会うのだろうか・・・

イヤな予感がする。

何かがこれから起こりそうな予感

新一は無事なんだろうか・・・

私も知らないけど知っている影のような存在

前にどこかで会ったことがある。

たしか・・・あの事件で・・・

あの事件をきっかけに新一や組織が

動き始めた．．

新一．．．

あなたは影から逃げられるのかしら．．．

深い闇に潜むあやしげな存在の手に堕ちて

生き延びることができのかしら．．．

窓をじっくり見る。

今だけは窓の外の白銀の世界の中にいる新一を

心から心配する。

蘭はコナンの部屋へ入った。

窓に近づいて白い雪の景色を見て、

新一と重^{コナン}ね合わせる。

コナンは今雪の上

次々とおってくる火薬

けむりが周りに増えていく。

くくコナンのほうは

影による銃撃で苦戦

くっ・・・まずいな

次から次へと銃撃してくる

このままじゃ街中で

銃撃をしてしまう。

下手すると一般人に危害が及ぶ。

やべーな・・・

相手は正体不明の遠くにいる人物

行動範囲がわからねえ

影がいる距離からじゃあ

何もできねえ・・・

博士が開発したこのスケボーで逃げることしかできねえ・・・

ヤツはずっと撃ち続ける。

しかしオレの近くをだいたい正確に撃っている。

影にオレが逃げるルートもよまれている。

影の思いど通りに踊らされている・・・

情けねえ……………

見えないヤツにオレはうまいこと動かされている

何者なんだ・・・？

影に潜む存在は・・・

影はある高層ビルにいる

暗くて見えねえ・・・

この幼児化した姿では

見えたのは影の服装だけだった。

全身真っ黒な色で染められた格好

もうちょっとで影の正体がわかりそう

あとちょっとで影の姿が見えそう

また気配を感じた・・・

いつもと同じ気配

高い位置に潜んでいる。

オレは周りを見渡した

近くに歩道橋

ヤツを正確に見るために

スケボーを止めて歩道橋の階段をのぼった。

高い位置からだと言が見える気がする。

目を凝らして影の位置を追いかけて続けた。

その間に影は再び銃撃する。

しかもオレの近くで・・・

本当にスレスレで一瞬・・・殺されと思った

おそろおそろ後ろを振り向いてみた。

歩道橋の手すりに黒い痕跡が残る。

今オレは、絶対絶命

次々と銃撃が繰り返される

後ろをじっくりと見る

下で普通に車が走っている。

下をながめれば気が遠くなるほど

高さを感じる。

オレは歩道橋で逃げ続けるのか、

それとも歩道橋から飛び降りるのか

オレに残された可能性は

この2つ

オレが選ぶのは・・・

part - 2 / 12 コナンの危機（後書き）

話が全然わかりませんよね……

すいません

文章力の低さには反省しています

出してほしいキャラも感想など言ってくださっても構いません

もう今崖っぷちな魔法戦隊三輪野助です

評価等よろしく願いますm（　）（　）m

part - 2 / 13 歩道橋（前書き）

分かりにくかったらすいません……

part - 2 / 13 歩道橋

歩道橋から飛び降りるのか、

歩道橋で逃げ続けるのか

どっちにするばいいんだ・・・？

それに相手が見えない影のようなヤツだから、

麻酔銃やキック増強シューズの使用不可

今、歩道橋から飛び降りて車の上に着地すれば

オレは助かる。

しかもヤツがいる高層ビルから下の角度に

撃つても歩道橋が死角になるから

オレがいる位置にはあたらないはず

今こうしている間にも

ヤツは銃撃をし続ける。

余計なことを考えている余裕なんてねえ……

とりあえず歩道橋から降りよう

オレは決断した。

手すりをつかんで一気にジャンプして飛び降りた

見事に飛び降りる。

街中に車が通りかかる。

通りすがりの車の運転手

鼻歌まじりで運転する

楽しそうに運転。

まさかコナンが飛び降りてくるとも

知らないで……………

すぐに通りかかった車の上に着地

ちなみに車の運転手は急に車の上に何かのっている気がする

運転しづらいみたい

「あわわ・・・なんだ！？車の上に何かのつたようなの……………？」

動揺する運転手

まあ運転手はさておき、

コナンは車の上

動いている車に揺られながらも、

影の魔の手から逃げ続けている。

車がカーブしたと同時に

握りしめているスケボーにのってセットした。

スケボーで車の上から飛んで道路を走る。

速いスピードで道路を駆けめぐる。

街中で走り続けるコナン

いつもの運動能力で大胆に動く。

車が近づいてくる。

ちょっと危ねえな……

よけるか……？

オレは車とは逆方向へ動く。

車の運転手には見覚えがあるなあ……

誰だったかなあ？

オレがほか事を考えている間に

車は止まりだした

「すみません…大丈夫ですか？」

ん・・・まてよ

この声は？

「あの…すみません……………ってコナン君」

オレの名を呼ぶ者

気になったので声の方向へ向く。

「えっ、高木刑事・・・
かど、どうしたの？」

「コナン君、何で君がここに・・・？」

微妙につぶやいた高木刑事の声

高木刑事は、車のエンジンを切って

車から降りた。

part - 2 / 13 歩道橋（後書き）

飛び降りたのです。

わかりにくかったらすいません……

影の存在は、コナン君の知っている人物です。

まだまだいろんな謎が残っています

評価お願いします

m (_ _) m

part - 2 / 14 意外な再会〜変わっていた刑事

雪はまだ降り続ける。

久しぶりの再開

今は、なぜかシリアスモード

よくわからないけど

お互いに暗めなモードに入っている。

意外なところで出会った…。

高木刑事がなぜここに…

高木刑事にはオレの何かを見透かされている気がする。

真面目な表情をしている高木刑事

いつものちょっと未熟な部分がある高木刑事は、

ここには存在していない・・・。

半人前の頃とは違う。

半人前の頃は、オレらにも明るくふるまっていた。

しかし今、オレの目の前に存在する高木刑事は、

一つまた大人に成長していた。

未熟ながらも仕事を頑張り続け、

時には和みのある半人前の高木刑事から

いつの間にかすべてを知ったかのように

オレに話しかける一人前の高木刑事に変わっていた。

オレが行動するたび高木刑事は、

自分を変化していく。

ささいな出来事から心を変えていく・・・

最初のうちは彼の心の変化に気づかなかった

いつも冴えなくて優しいお兄さんの感じがオレにとっては、

当たり前のようだったから・・・

でも本当は彼は変わっていた

――徐々に――変化をしていく心の中

おそらく高木刑事、

彼自身気づかないうちに

心の中――そして自分の考えが違ってきた。

オレと会うたび微妙に違っていた

高木刑事を知ることができなかった。

冴えない頃の高木刑事を変えたのは、

東京タワー＆帝丹高校に設置された爆弾で世間を騒がせたあの事件から・・・

そう、今回も同じ

あの爆弾事件で東京タワーにきたときと雰囲気と同じ

オレと高木刑事が東京タワーに入ったときから、

現在の流れは変わってきた。

高木刑事は、言った。

『君は一体何者なんだい！？』って

オレのことなんでもわかってるかの口調で……………

あのときから、高木刑事には

オレの心の奥まで見透かされているようで、

妙に恐ろしかった。

確かに江戸川コナンは小学生なんて言っているわりには
妙に推理をするのはおかしい・・・

しかも難事件を解決していくのもおかしいと思うのはわかる。

あの事件で東京タワーに設置されていた爆弾を

小学生が1人で処理したなど想像もできないだろう…。
オレに関しては不審な点、疑問は山ほどあるだろう。

普通の小学生らしい行動はしていないからな・・・

確かに中身は小学生ではない。

でも言いたくはねえけど、

見た目はどっからどう見ても小学生

誰が見ても小学生

組織の所属するジンにA P T X 4 8 6 9を飲まされて

幼児化したなんて現実からかけ離れた夢物語、

普通誰も信じねえだろうからな…。

オレを普通に‘小学生’だと思うだろうな…。

しかし高木刑事がオレを見る視線は、

小学生を見ている時とは雰囲気が違う。

真面目な雰囲気が漂っている。

オレを知りつくしたかのようだ。

雪はさらに降る。

とくにオレと高木刑事の周りに．．

さらさらな雪が地面に落ちる。

オレは高木刑事に話す言葉が一つもでこない。

何か言いたいけど、言葉に出せない．．．

「あのさ、コナン君」

いきなり高木刑事が沈黙な雰囲気を崩した。

そのちよつとした一言は

沈黙を打ち破った。

「何．．．？高木刑事．．．」

「コナン君、君は今まで何をしていたんだい？

また事件に関わっていたのか．．．？

こんな遅く時間にスケボーにのっているってことは

事件の調査でもしていたのか・・・？

それとも追跡かい・・・？」

「ま、まあ……そういうことなんだけど、

ちょっと違うような・・・」

「ん・・・なんだい？」

「別になんでもない。」

「それにしても小学生がこんな時間に

外に出たらいけないじゃないか。

しょうがないから僕が探偵事務所まで送っててやるよ。」

コナンは高木刑事の車に乗った。

雪は車の窓をたたく。

ちなみに影は消えた。

さすがに銃撃も高層ビルから

死角の道路をねらうのは無理があるから

今回はあきらめたみたいだ。

彼らの後ろに隠れて様子を見ている人物

2人が車に乗ったのを
確認した後、

うつむいて一言言った。

「ベルモット……」

part - 2 / 14 意外な再会へ変わっていた刑事（後書き）

最後は（意味不）な言葉をつぶやいていますが、これから関係する
ので・・・

ずいぶんと話がこんがらがってすいません

どうか評価お願いします

m ((m

part - 2 / 15 心見透かし刑事（前書き）

めちやくちゃんな話ですみません

part - 2 / 15 心見透かし刑事

――車の中

高木刑事は黙って運転

だんだん歩道橋が遠く見える。

小さく見える。

探偵事務所に近づいている。

今日の高木刑事は、

やけに静かすぎる。

いつもはちょっとは話してくれたりしたのに……

今日の高木刑事はどうしたんだよ・・・

妙におとなしいんだよ……

何もしゃべらないまま

時間だけが過ぎていくだけじゃねえか・・・

白い雪が降っているなあ…。

昨日降ってきた初雪

この米花町^{まち}を白く染めていくような雪だ。

真っ白にとてもきれい

なんで雪はこんなにきれいなんだ・・・？

風が車の窓をたたく。

風は霰も一緒に運ぶ。

霰は、窓ガラスに水滴としてくつつく。

オレは暇つぶしに窓から景色をながめる。

景色をながめても周りは雪だけ

今の雪を見るたび、

どうしても思い出してしまう。

真っ白な雪のように

心が清らかな蘭のことを・・・

今、蘭は冷酷な組織のあの方^{ボス}だけど、

本当の蘭は

冷酷なんかじゃない。

どんな理由があつて

組織のあの方になったのかはわからない・・・

でも本当の蘭は、

清らかな心の持ち主だ。

最初は白い心の蘭

何かをきっかけに冷酷な組織のあの方になった……。

最初は真つ白な心を持っていたのなら

いつかはもとの蘭に戻るよなあ・・・

今、蘭のことはともかく

気になるのは高木刑事

彼はとても静か

車を運転し続ける

信号で車を止め、待っている間は、

キョロキョロしている。

たまに後ろを振り向く。

何かいいたげな表情でオレに訴えかける

オレも高木刑事に何か言いたいような気がする。

しかし、言葉では表せない。

高木刑事はオレに何を

言いたいんだろうか・・・

風がさらに強まる。

雪はさらに激しく降り出す

窓ガラスは白くなっている！！！！

オレは景色を見るのを止め、

きちんと自分の席に座った。

「なあ・・・コナン君・・・」

高木刑事は再び話しかけた。

「高木刑事、どうしたの・・・？」

「さっきどんな事件に巻き込まれていたんだい？」

すごい血相で道路を走っていたけどさ、

何かあったのかい・・・？」

さっきあったことを

高木刑事に言ってもいいんだろうか？

最近妙にオレのこと何でも知ってそうな高木刑事

さっきあったことを言ってもいいよな？

オレは自分の中で

さっきの、銃撃について、話すと決めた

「じ、実は……

誰かがどっかの高層ビルから

ボクを狙うために銃撃を行っているんだ。

この原因は探偵事務所、しかもボクの部屋のガラスが割れたことから始まった。

ベッドに入った瞬間、

恐ろしいような・・・

前にも感じたことのある・・・妙な威圧感を」

「妙な違和感って・・・

なぜ突然銃撃してくるんだ？

しかもなぜ探偵事務所に銃撃をしたんだろうか・・・？」

「ボクを狙ったためだよ……」。

しかもボクを狙っているヤツは影の隠れたようなヤツなんだ。

簡単に言うと正体不明なヤツがボクを狙っている。

一体何が目的かはわからない・・・

なぜボクを狙っているのかわからない・・・」

おそらくオレを狙った人物は蘭に関係するのだと

思うが、高木刑事にはそこまで詳しく説明しなかった。

「で、今はコナン君は誰かに狙われているってことだね。」

「そうなんだ……。しかもボクを狙った人物は

遠距離で簡単に銃撃するほどの腕前だ。

部屋のドアまで撃たれた跡がある。

しかもドアに穴も開いた……。

ボクが部屋から出て廊下に行った瞬間、ドアが撃たれた・・・

そのとき、ギリギリボクには弾があたりなかった

それからは外に出てヤツから逃げ回っていた。

ヤツは高層ビルから何発もー何発も撃ち続ける

ボクはただ、狙撃を避けるために

博士に作ってもらったスケボーでひたすら

逃げ回っていただけ・・・

高層ビルからヤツを見ようとして、

歩道橋にのぼったときも、

ずっと撃ち続けた。

またギリギリのところで弾があたりなかった・・・

一応、ボクは歩道橋から飛びおりて

ヤツに銃撃されることから避けた・・・

ヤツがいる高層ビルからだ

歩道橋が死角になって下の角度から

狙撃は不可能って踏んでね……………」

「コナン君が狙われているのか・・・」

目暮警部たちにもコナン君を狙った人物のこと調べさせてもらうか。

「

それはダメだよ……………」

「えっ、何かがダメなんだい？」

「ヤツのことを調べて深く関わりすぎると

目暮警部や高木刑事に危害を加える可能性があるから・・・

ボクのことやヤツに警部たちが狙われるなんてことに

なあってほしくないんだ。

この件についてはボク1人で解決するよ……。

あ、もう探偵事務所に着いた。

高木刑事・・・じゃあね……………」

車のエンジンを止めた。

すぐに車から降りた。

その時の高木刑事はコナンのことで心配そうだ

コナン君、君はいつもいろんな事を

1人で抱え込んでいる。

誰かを、傷つけまいと思って

必ず1人で解決しようとする

その君の優しさが余計に心配したくなるんだよ…

余計に気になるんだ

コナン君のさびしそうな後ろ姿

見る側もつらい。

オレは家に帰って少し休憩

家に向かうために車のエンジンをかける

運転する前にちょっとコナン君のことを考えていた。

それから気を取り戻し自分の家へと向かった。

part - 2 / 15 心見透かし刑事（後書き）

すみません…

どうにも言いたいことが伝わらないような文章で・・・

高木刑事はまた出しますね…

彼の口調がいまいちな気がします

影に隠れた人物はきつとみんなも知っていますね

コナンも知っていますから・・・

学生は忙しいです。

私は今中2なんです

なんとか1日に一話のペースで更新したいですね

評価お願いします

m () m

part - 2 / 16 新たなスタートよ、ここから始まる

いつの間にか朝になった

今日もまた雪が降っている。

窓からずっと雪を見ている。

今日は何か別のことが起こる予感がする

昨日のように蘭に関係することが起こる気がする。

謎は謎を深めている

ジグゾーパズルのように一つの真実がさらにバラバラになる。

昨日という1日の間にもさらに謎は深まった

この謎を組み立てるのは難しいようだ

第一、蘭があの方である理由すらオレは知らねえからなあ……

蘭が好き好んで組織のあの方になったとは思えねえからなあ……

蘭は起きているみてえだな……

おっちゃんは相変わらず寝ているみてえだけどな

昨日オレの部屋の窓ガラスが割れた時

すげー大きな音がしたっていうのにおっちゃん気づかずに安気に寝ていたからな……

ハハハ……さすがは眠りの小五郎って言われているだけあって
寝てばかりじゃねえか

1日の平均で寝ている時間のほうが多いじゃねえか・・・

まあ、おっちゃんの寝ているのはいつものことだし、
気にすることはねえな…

さてと、蘭の様子はどうだ・・・

それにしても蘭と昨日オレを狙っていたヤツ
なんで重なり合ったように感じたんだ？

それと影に隠れた者の気配に覚えのあるような気がする。

なぜあの気配に覚えがあるんだろう・・・

でも確かに覚えはある・・・
なんでだろう？

蘭とも重なり合うあの人物は何者なんだろう？

「新・・・」

寂しそうな声

後ろを振り向くと蘭がいた。

「蘭あのさ、・・・」

「ん・・・何？」

「か、影・・・」

「えっ……。」

「影に隠れたヤツの・・・」

その瞬間小五郎が部屋のドアを
大きな音を立てて派手に開けた。

ドアを開けた音でコナンの言おうとしていた言葉が途切れてしまっ
た。

「蘭、腹減った……。飯作ってくれ」

いきなりおっちゃんが現れてびっくりしたなあ……

蘭に言いたいことがおっちゃんが来ちまって言えねえじゃねえか。

まあ影の正体や蘭との関係については今は知らなくてもいいよな・・・

蘭についての謎が知りたいがために焦りすぎるとあぶねえな・・・

ここは冷静に調べたほうが良さそうだな……

今回は長期戦になりそうだ・・・

しかも謎はまだこれだけじゃない気がするんだ・・・。

また何か違うことが起こる気がする……。

蘭は朝食の用意

簡単にパンと玉子焼き程度

テーブルを囲んでいつもどおり食事を取った。

簡単な食事を取ったあとコーヒーを飲んで一息ついた。

オレと蘭は学校に行く準備

そしておっちゃんは探偵事務所の中に入って

飲みほしたビールの空き缶を捨てた。

ネクタイを締め上げて今日の準備をして依頼人を待ち構えている。

オレたちも学校に行く準備を終えて探偵事務所から出ていった。

今の姿じゃ不自然に見えないランドセルを背負いながら……
蘭と歩く。

周りから見れば姉弟（していゝきょうだい）のように見える。
本当は幼なじみの同級生だけだな…。

蘭は歩かず足を止めた。

寒さに耐えながら園子を待つ。

手袋で手をこすりあう。

それでも寒い

「蘭……!」

しばらくするといつもどおりの園子の声が聞こえてきた。

園子から走って蘭のもとに来た。

「蘭、おはよー」

「うん、園子おはよー」

互いにあいさつをして止めていた足を再び動かした。

目の先に見える学校へ行くために・

part - 2 / 16 新たなスタートよ、ここから始まる（後書き）

ワケのわからない話で大変申し訳ないです

文章力がないもんですみません

話がちやごちな気がしますね

次回は、新しい展開かな？

評価お願いします

m () m

今は、登校中

蘭は園子としゃべっている

オレは2人のとなりでしゃべっているのを聞いている

「ねえねえ、蘭・・・」

今日転校生がくること知ってるう？」

「ううん、知らないけど・・・帝丹高校に転校生がくるの？
名前とか知っているの？」

「名前はわからないわ……。
ただ分かっていることは女子高生らしいよ。」

「ふーん・・・」

転校生かあ……

帝丹高校に転校生って本堂瑛祐以来だなあ……。

たしか本堂瑛祐ってキールに自分の姉を殺されたんだっけ？
今度の転校生も本堂瑛祐みたいに何か重要なキーワードを持っている
かもしれないねえな……。

何か蘭に関わる重要な手がかりを持っているような気がする

それは考えすぎか・・・

「ねえ、コナン君」

「えっ…何？蘭ねえちゃん・・・」

「転校生ってどんな子が気になる？」

「別に気にならないけど・・・。」

「あ、そう。私たち学校こっちだからここで別れるね。
じゃあね……。」

オレは蘭たちと別れたあと逆方向に歩いた。

近くの石を蹴りながら

小学校へ向かった。

ふと後ろを見た。

蘭と園子の周りにはぎわっている

他の生徒もしゃべりながら校門に入る

・・・帝丹高校

教室では転校生の話題でクラス中がざわめいている。

特に園子が一番ざわついている。

みんな、園子中心に瑛祐の周りを囲む。

「えっ…転校生来るんですか？
転校生って僕以来ですね。」

「そうよ。多分瑛祐君みたいにドジっこではないと思うけどね。」

「ひどいですよ……。」

僕はドジっこじゃなくただ単に運が悪いだけですよ。
神様に嫌われているんです……。」

「はいはい…前にそんなこと言っていたわね……。」

「例えばパンを焼いたとき、トーストをひっくり返したら100パーセントバターについているほうが下になるんです……。」

「それも前に聞いたわね……。」

しかもトーストをひっくり返したら、バターについているパンが下になるのは当たり前でしょ……？

「そういえば転校生って久しぶりだね……」

「どんな子なんだろう……。」

「蘭の新たなライバルだったりして……」

新一君のことが好きだと言いかもしれないわね……。」

「バカね…それはないわよ。」

ガラッ

教室のドアが開いた音

「皆さん、席についてください！」

高まる先生の声

みんな急いで自分の席に着いた。

「皆さん、今日は転校生が来ます。
名前は、えっと」

後ろを向いて黒板に転校生の名前を書く。

チヨークで書かれた名前は
‘ 金森悠衣 ’

「転校生、教室に入ってきてください。」

転校生は先生の言葉に反応してドアを開ける。

コツコツとスリッパの音を鳴らす。

すぐにみんなのほうを向き、自己紹介をし始める。

「〇〇からきた金森悠衣です。
よろしく願います。」

大きな声で明るく自己アピールをする少女
やや茶髪で小さな三つ編みをしている
愛くるしい顔つきが特徴

みんなを魅了するぐらい美の顔を持つ少女

彼女のあまりの可愛さに興奮してクラスみんなはざわついた。

「えっと、金森さんの席は……………」

コツコツ

先生の声を無視してとつと開いている席に座った。

先生の長い話を聞いている間にホームルームが終わった。

休み時間みんなは彼女の席を囲んでいろいろとしゃべりかける。

「ねえねえ、金森さん前の学校はどんな感じ？」

「うん、楽しかったよ。」

一言つぶやいてから蘭の席のほうをちらつと見る。

彼女は席を立ち上がり蘭の席のほうへ行った。

コツコツとスリッパの音が響く。

彼女は蘭に近づいて

「はじめまして・・・毛利蘭さん。」

明るく笑顔であいさつをする。

転校生はオリキャラです。

名前は金森悠衣かなもりゆいと言います

これからバンバン出します

文章はめちゃくちゃ下手ですみません

いつもめちゃくちゃ下手です。

とんでもないぐらい下手ですけどどうか評価お願いします

m ((m

part - 2 / 18 普通で謎な転校生!?

「はじめまして、毛利蘭さん……。」

この一言が妙な感じがした。

何気ない笑みに違和感がある

彼女の深い瞳に吸い込まれそう……

一体何なんだろうか？

この妙な感じは……

この子何かあるような気がする。

「あ、あの……か、金森さんよろしくね。」

「『悠衣』でいいわよ。

あなたのことも『蘭』って呼んでいい？」

「ええ……いいけど。」

「じゃあ、私も『悠衣』って呼んでいい？

ちなみに私の名前は鈴木園子。

園子って呼んでもいいわよ……。」

「ええ……もちろん

悠衣って呼んでもいいよ。

よろしくね……蘭、園子。」

悠衣は優しく微笑んだ

でも私にはその心の奥にさらなる深いものがあるような気がしてた

まらなかった

青い空をバツクに笑みを浮かべる悠衣は印象的だった。
今日の空は青すぎる

曇り空が一つもないぐらい

悠衣には明るい空が似合っている

「ねえねえ蘭、あのさ学校案内してくれない？
ごめんね・・・この学校慣れないもんだから」

「うん、いいよ。一時間目終わってからでもいい？」

「いいよ。じゃあ一時間目が終わって休み時間になってから案内ね。」

「

キンコンカーンコン

約束して間もなくチャイムが鳴った

生徒は慌ただしく自分の席に戻り着席

一瞬安心しきつたところですぐに筆記道具の準備

先生が来るのを待つように予習をする。

ガラッ

ギシギシと音を立てながらドアが開く。

先生が落ちそうな教材を抱えながら教室へ入る

音もなく教壇の前に行く。

教壇に教科書を置いてからチョークで黒板に字を書く

カタカタと聞こえるチョークの音

チョークで書かれたことをそのままノートに書く

一時間目はそれだけで時間が過ぎていく

キンコーンカーンコーン

再びチャイムが教室中に響きわたる

授業の終わりを告げる合図

それとともに先生が生徒に起立を求める

先生の合図とともに学級委員が

「起立」

と大声を張り上げてみんなが立つように誘導する

みんなはガタガタと大きな音を響きかせて椅子を引く。

椅子を引いたと同時に『礼』と言いお辞儀をする

あいさつ後は、みんなばらばらに別れてそれぞれたむろっている

蘭たちも窓側でおしゃべり

「じゃあ悠衣、行こ。」

「うん…」

「どこに行くんですか？」

「校舎内を回っているだけよ

学校の校舎や庭などの案内に行くの。」

「そう、ですか……。ではいつてらしゃい」

蘭と悠衣が主に校舎内を歩きまわる。

園子もとりあえずついてきた。

瑛祐は、怪しげな彼女を遠くから見て不信感を抱いたように顔つきが変わった。

睨みつけるように彼女の後ろ姿を見届ける

大切にしている写真をポケットから取り出し
本当の姉のことを思い出す。

‘お姉ちゃん’

小さな声で一言つぶやいた

‘金森悠衣’何かありそうだなあ

なんとなく雰囲気的に何かありそうだ

はつきり敵や組織の情報を知っているとは言いつけないがなにか怪しい。

とりあえず僕は彼女を探り入れると考えた

彼女を陰しそうな顔で見る

窓側には、苛立ちを隠し拳を握り締めたままの瑛祐がいた。

part - 2 / 18 普通で謎な転校生！？（後書き）

話がめちゃめちゃですみません
文章力がなさすぎてすみません

下手すぎます

見捨てずに評価お願いします

○（――＊）○

part - 2 / 19 渡り廊下での彼女の心の動き

- - - 休み時間

蘭たちは校舎内をまわっている。
渡り廊下から見える一面の景色
すべての自然が青々としている
太陽の光で眩しい
そして暖かい

今が冬だとは思えないほど暖かい
昨日の雪は溶けていく
空がだんだん青くなる

悠衣の明るい笑みのように……
見た目、明るい子のようにだ。

しかし彼女の心の奥底はわからない。悠衣の何気ない仕草、一瞬一瞬に違う微笑み
普通は見逃してしまうことだけど私の瞳には1つ1つの行動が異様なほど焼きつく。
短時間でも変化を伴っている

「ねえねえ……悠衣の前の学校ってどういうところなの？」

「別に普通の学校だよ……。
今度は私から質問するわ。
園子は蘭と親友なの？」

「うん…そうだよ」

蘭とは幼い頃から仲良しだからね。
長年の付き合いっていうものだね……………」

「ふーん……」

「それと幼なじみと言えば、新一君、も同じだね。」

「新一君？」

「うん、工藤新一、今や名探偵として世間を騒がせている高校生探偵のことよ。」

悠衣の動きが一瞬止まった。

「探偵」っていう言葉を聞いた瞬間しわをよせたような顔に変わっていた。

震えが止まらないほど、心は揺れ動いていた。

「探偵……」

思わずつぶやいたちよつとした一言

渡り廊下から身を乗り出してあちこちに散らばっている雪を眺めながら、何かを思いつめたように言った言葉

高校生探偵だなんて、別に珍しいわけでもない。
でも悠衣は「探偵」という一言に敏感に心が動いた。

彼女の中には「探偵」というちよつとした言葉に
関係性を感じたのだろうか……

一見暖かい風、冬にしては天候が晴れ晴れとしている

昨日の雪は幻のように溶けていく。

寒い朝のときも過ぎていく

悠衣がこの学校にきたときから、この地に足を踏み入れてから天候は異常気象のように変わり果てた

まるで彼女が私たちの決戦の始まりを告げにきたかのように・・・

世界が変わった……。

雪は溶けていく

彼女が現れたと同時に・・・

手すりにもたれかけて溶けかけの雪を自分と同じ境遇にでも遭ったかのように眺める

“雪も私のように、変化を伴って自らを溶かそうとしているのだね……。”

そんなメッセージを雪に伝えたそうな悠衣・・・

しかし雪は言葉など持っていない

”メッセージ”など返してはくれない

ただ自然に降り積もる雪を見下ろしているだけ

さつきから手は手すりに硬直したまま

校舎案内のことなどすっかり忘れて微妙に溶けていく雪の変化を観察時間は過ぎていく。

「悠衣、他の所は行かないの？もう授業始まっちゃうよ。」

「えっ…ちょっと待って」

悠衣は2人を追いかけるように渡り廊下を走った。

まさか、後ろで瑛祐が今までの3人の様子を見ていたとも知らないで・・・

part - 2 / 19 渡り廊下での彼女の心の動き（後書き）

話がつまらなくてすみません。

蘭があの方である話と関係がないような気もしますが、いろいろとこの先のことを考えて書きました

このオリキャラの描写しつかりと書きたいけど書けないです。

わけのわからない話ですすみません

文章力がなくてすみません

part - 2 / 20 下校の前々（前書き）

話とはびますけど下校時間の話です

あの続きからだと言が長くなるので一旦下校にします

いろいろと矛盾点がありますのでそれを早く書きたいですから学校の話は、ちょっととびます

part - 2 / 20 下校の前に

- - - 下校

今は校門前

園子は部活でまだ門に來ない蘭を待つ

- - ついでに瑛祐や悠衣も待っている

校舎に取り付けてある時計を見ていつ来るのかと待ち続ける。

部活の練習と片付けで大変だとはいえあまりにも来るのが遅いと心配になる。

いくら蘭が方向音痴でもいつも通っている学校の校門まで間違えるわけがない。

何か不吉な予感がする

時計の針が徐々に刻む

下校の合図を示す音楽が流れる

慌て校門から出る複数の生徒

みんなは、学校から去っていく

蘭たちはまだ來ないのだろうか・・・

溶けかけの雪をちらつと見た。

朝よりも雪は溶けていた

グラウンドに残っていた雪もなくなり、

水たまりのようになっていた

水たまりのせいででこぼこになったグラウンドを慎重に歩く眼鏡の少年が近づいてきた

とても歩きにくいグラウンドを必死に歩み続け転ばないようにしている瑛祐君

彼はドジっこであるが今日はグラウンドで滑って転ぶってことはなかったようだ。

私は瑛祐君が校門から出るのを待っていた。

「すみません…。遅くなってしまいました。」

彼は息をきらす

走ったため、微妙にずれた眼鏡をもとの目の位置に戻すそれから、私のほうを振り向く

「ねえねえ…蘭と悠衣は見なかった？」

「いえ、見ていませんが……
2人と一緒に帰るのですか……？」

「そうよ。蘭と悠衣とは一緒に帰る約束をしたから……。」

「それにしてももう金森さんと仲良しになったみたいですね…。」

「“仲良しになったみたい”じゃなくて
もう仲は良くなったわよ。」

それに今日は校舎案内の間に悠衣とはよくしゃべったからね…。」

「ふーん・・・そうだったんですか・・・」

そう言いつつ妙に強がったような表情に変わっていた
瑛祐君は悠衣の話を聞いてから表情が変わった。

まさか、彼女は……

調べたくはないが組織に関係性があるのだろうか・・・

それは考えすぎだとは思うが……

なんか彼女の雰囲気妙な感じがする

なぜかは、わからないけど最初に教室に入ってきたときから
違和感を感じた。

“金森悠衣”あの人はちよつと怪しい
もうちよつと調べておく必要はあるみたいだ。

瑛祐は、上を見上げながら考えことをしていた。

「どうしたの？瑛祐君・・・
さっきから怖い顔をしているみたいだけど大丈夫？
何かあったの？」

「いえ、別になにもないけど・・・
2人はまだ来ないのでか・・・？」

「蘭なら今そこを走っているからもうすぐ来ると思うよ。」
園子が一言言ってから間もないうちに蘭がすぐに来た

「園子、遅くなってごめん……。」

部活の片付けで忙しくて……ごめん。」

「別に謝らなくてもいいわよ。

それより、悠衣は見た？」

「ううん…見かけなかったわ……」

約束したのにどこに行ったんだろう……

探したけどいなかったわ。」

「悠衣はどこにいるんだろうね…もう一回探してみる？」

「うん!!」

「じゃあもう一度校舎に入って悠衣を探そう……」

瑛祐君も行くよ!!」

「あ、はい……」

僕は校舎を少し見た。

教室には、背を向けてうつむいている彼女が教壇に座っている。

part - 2 / 20 下校の前に (後書き)

まだまだ続くみたいですね…。

いろいろと矛盾点があるのでそれをなんとかしたいですね…。
時間がないです。

評価お願いします

part - 2 / 2 1 疑惑（前書き）

わかりにくかったらすいません

part - 2 / 2 1 疑惑

校門の前には蘭、園子、瑛祐

「ねえ…みんなで悠衣を探そう・・・
暗くならないうちに探したほうがいいんじゃない・・・
手分けしよう。」

蘭が右側の校舎で瑛祐君は左側の校舎を主に探す。
そして私は外を全体を探すわ・・・」

「そう、わかったわ・・・。
園子は外で待っていてね・・・。」

さっそく悠衣を探しに行きましょ・・・
ほら、瑛祐君も行くよ。」

「あ、はい・・・。」

蘭と瑛祐は走る。

瑛祐は、ぐちゃぐちゃになっているグラウンドで滑って転けた。

幸い頭はうたなかつたけど・・・

「瑛祐君、大丈夫？」

さりげなくハンカチを渡す蘭

「大丈夫です。」

服についた土を全部はらう。

「じゃあ・・・瑛祐君こっちの校舎だから、とりあえず分かれよう。」

」

「はい……。」

2人は逆の方向に行つて探しに行った……

「あれ……？2人ともどうしたの？」

校舎の方に行こうとしているみたいだけど……」
明るくて響きが高い声が聞こえる。

蘭と瑛祐は声が聞こえる方向へ一斉に振り向いた。

なんとそこにはみんなが探していた美少女が立ちはだかっていた。それは今日転校したばかりの“悠衣”が妙な笑みを浮かべながら、私たちを見ている。

なぜかクスクスと笑う。

「悠衣、今までどこにいたの？
みんな悠衣を探していたけど……」

「ごめん……蘭。」

転校したばかりだから、靴箱がどこかわからなくて……
校舎内を歩き回っていたの……
なかなか靴箱が見つからなかったのよ」

「ふーん。そう……」

とりあえず悠衣も見つかったから園子と瑛祐君と帰ろう!!」

「うん。」

「ほら、瑛祐君も行くよ！」

「あ、はい…。」

一応2人を追いかける瑛祐

心の奥底ではまだ悠衣を疑いの目で見ている。

一旦深呼吸して彼女から一瞬たりとも目をはなさずマークする。

ますます怪しく感じる“金森悠衣”

さっき彼女が言ったことも不信感を感じる。

なぜならば彼女は、“靴箱が見つからなかったから遅くなった”というウソをついたから…。

僕は、校舎内のある教室で彼女が窓際で背を向けて座っていたのをこの目でしっかりと見た。

何が目的で教室の窓際に座っていたのかは分からない…。

靴箱を探していたなんてウソをつからなければならぬのかも分からない…。

けれどなぜウソをつく必要があったのだろうか？

何か僕たちに知られたくない何かがあるのだろうか？

ますます彼女が怪しく見えてくる…。

「ほら、どうしたの？瑛祐君行くよ。」

「あ、ちよつと…。」

再び校門まで2人を追いかける瑛祐

校門では園子が待っていた。

「蘭、悠衣を見つけたのね…」

良かった・・・見つけて・・・

悠衣が見つかったことだし帰りましょ…」

「うん…。」

帰り道みんなでしゃべりながら歩いていた。

それを遮るかのように悠衣が一言つぶやいた。

「ベルモット・・・」

悲しそうな瞳をして

「どうしたの？悠衣・・・」

「えっ、何でもないわ…」

私角を曲がったところが家だから・・・

ここでわかれるわね……。

蘭、園子じゃあね。」

悠衣は慌て自分の家の方へ帰った。

悠衣がつぶやいた一言

『ベルモット・・・』

って小さな声でつぶやいていた・・・

確かに“ベルモット”って聞こえた

なぜ、悠衣がベルモットのことを知っているの？

悠衣、あなたまさか・・・

蘭はとっても険しい表情に変わっていた。

「蘭までどうしたの？

なんか怖い顔をして・・・」

「何でもないわ・・・。」

風は暖かい風から冷たい風へと変わった。

ただ一つわかったこと

それは悠衣は組織そして私にも関係すること

part - 2 / 2 1 疑惑（後書き）

すみません今回はわかりにくいと思います。
評価お願いします

part - 2 / 22 知らない間に傷つけていた（前書き）

いつもより長いです

わかりにくかったらすみません

part - 2 / 22 知らない間に傷つけていた

たった今つぶやいた一言で確信した。

悠衣は、組織に関係するのだと・・・

悠衣の目的ははっきりとは分からないけど・・・

多分“あの事”が原因だと思う。

あのベルモットが関係するあの時の事

しかし、あの時の事よく覚えてはいない・・・
頭にもやがかる。

具体的な“あの事”が思い出せない

それは一体なんだったのだろうか・・・？

悠衣は、もう私の目の前から去った。

向こうの角へすみやかに帰った

彼女が最後に見せた表情は悲しそうなだった。

悠衣は悲しんでいるのだろうか？

どれほどつらいことを重ねてきたのだろうか？

悠衣、あなたには何があったの？

これから何か起こるような気がする。

何か嫌な予感がする。

風が嵐のように吹き荒れる。

あまりの寒さで心まで寒くなりそう
冷たさに慣れてしまいそう

いくら手袋で手をこすりあっても風の冷たさには抵抗できない

さらに風が強まる

木々から葉が複数散らばる。

散らばった葉はそのまま地面に落ちる。

この時期夕日が沈むのもはやい。
もう今この時間でちよつと暗い。

茜色に染まる夕日

背後からは、カラスの鳴き声

辺りを見渡すと歩いている人がいない。

カラスが群れる光景を目にしながらしんみりとした空気の家まで向かう。

気づいたら瑛祐君もいなくなった。

四方八方キョロキョロしながら探していても

どこにも瑛祐君の姿は見当たらない

まさか・・・瑛祐君、悠衣の偵察に行っているんじゃない……

瑛祐君大丈夫かな？

悠衣は得体の知れない人物

組織のあの方である私やもと組織の一員のベルモットと関係ある人

物なのよ……。

何があるのかさえも分からない

謎に包まれているのよ……

本当に大丈夫かしら？

あまり友達の悠衣のことを悪く疑うようには言えないが
でも悠衣は組織のことに関わりはあると思う。

普通は

『ベルモット』

なんて言葉をつぶやいたりしないはず

でも私は絶対にその一言つぶやいたのを聞いた。
どうしても印象に残るだった一言の言葉
組織に関係していないと絶対につぶやかない言葉

ましてや組織の一員のコードネームをわかっているのが不思議だ。

この一言が私たちの運命を変えていく

再び嵐のような強い風が私たちの周りで吹き荒れる。

木々からも大量の葉っぱがきれいに落ちる。

嵐の向こう側でたった1人の子を探り入れるために冷たい風に覆わ
れた瑛祐君の心配をしてしまう。

瑛祐君の様子を見ているとどうしても心配になってしまう……

瑛祐君がわざわざ組織の件に関わらなくてもいいのに…

でも彼は姉が殺された以来、組織の存在を気にしている

組織に関わることはとっても危険だけど、自ら探りを入れる

なぜ彼がこんな危険なことに関わらなくてはいけないの？組織なんてなければ瑛祐君に危険なことはなかったはず・・・

その組織を作ったのはあの方である私自身

理由はどうあれ私が冷酷な組織を作ってしまったの・・・

組織の秘密を知ったものは全てこの世から排除、亡骸としてのこされたまま

悠衣は組織に何らかの関わりがあるのは間違いない

その悠衣の秘密を知ってしまった瑛祐君も排除される

私のせいで瑛祐君は危機に陥るかもしれない・・・

組織の誰が犯罪を犯そうと組織を作ったのは私

すべて私の責任なのよ……

瑛祐君大丈夫かなあ？

私に何か嫌な予感を感じる・・・

風が強まり、嵐のように吹きわたる

だんだん冷たくなっている風

そして、だんだん激しく吹き私たちの周りを包む

「蘭、どうしたの・・・？」

さつきからしわをよせて怖い顔になっていたよ……。
大丈夫？」

「うん、大丈夫よ……。」

ただ、ちよつと・・・・・・・・・・」

「ただ、ちよつと・・・・・・・・つて？」

この前から追い詰められたみたいな表情をしていたけど本当に大丈夫？

蘭何か苦労しているの？

何かつらいことがあるなら、言つてね。」

「園子大丈夫よ…別になんでもないわ。

そつたいした苦労はしていないわ……。」

私は園子に笑顔を見せた。

しかし本当の笑顔ではない。

無理している自分

本当は、心の奥までズキズキして痛い……

新一を裏切ってしまった上に瑛祐君まで組織のことに関わらせてしまった……

私が組織を作ってしまったから・・・

あんな冷酷だけの組織を作らなければ良かったなんて後悔してしまう時がある

でも遅い……………

もうすでに組織の一員は瑛祐君の姉を殺した上に新一を幼児化させてしまったから

二日前は自ら哀ちゃんを裏切った・・・

これで新一と哀ちゃん2人とも裏切ってしまった

でも気づかなかった

知らない間に瑛祐君までも傷つけていたことに・・・
2人と違って直接傷つけたわけではない。

――だから傷つけていることに今まで気づかなかった

瑛祐君の姉を殺したのも組織の一員・・・

確かに私は殺していないけど、組織の一員が犯してしまったことは私の責任なの・・・

私が冷酷な組織なんて作らなければキールが瑛祐君の姉を殺すなんてことはなかったのに・・・

全て――全て私のせいで
人々は傷つけていく。

こうしている間に瑛祐君まで傷つけていたなんて知らなかった
よく考えればたくさんの人々に迷惑をかけている

なんでこんなことにもつと早く気づかなかったんだろう・・・

今まで私のせいでみんながつらい思いしていたっていうのに・・・
私は優雅に新一や瑛祐君たちのことを他人事のようにあざ笑っているような態度をとっていた。

私のせいでつらい思いをしている人たちのことを考えてやれなかったなあ……………

瑛祐君ごめんなさい。

私はあなたにも迷惑をかけていたの
悠衣だって最初から組織に関係していたわけじゃない
私が組織を作ってから変わってしまった。

悠衣の目的は私にさえわからない

わかることは悠衣がつぶやいた『ベルモット』が目的の手がかりになること

なぜ“ベルモット”ってつぶやいたのが、キーワードになる

そして私もかすかに覚えている

“悠衣”と“ベルモット”のあの時の事を

しっかりと思い出せない。

その時にいた場所もうつすらとしか思い出せない

ただわかることは、2人で一緒に行動していたことだけ

何かが引つかかる…………。

今、瑛祐君と悠衣はどうしているのだろうか？

そして新一も、私の知らないところで何をしているのだろうか……

私は彼らの様子が気になって動かしていた足を一旦止めた。

それと同時に嵐のような風が私の周りに吹きわたる

私は三メートルぐらい向こうの電信柱を集中して見ていた。

遠くの電信柱の向こう側にいる瑛祐君と悠衣の様子がきになった。

“あの2人は何をしているのだろうか……”

「蘭、今度はどうしたの？」

急に立ち止まったけど、あんな遠くの電信柱に何かあるの？」

「ううん、別に何もないわ。ただなんとなく立ち止まっただけよ。ごめん。園子さっきから立ち止まってばかりで……

今日はちよつと気分が悪いんだ。」

「えっ、どうして？」

「ちよつとね……」

立ち止まっただけでなかなか家に帰れなくてごめんね
もう私の家だからこの辺で……

じゃあね……。園子——！」

私は園子に向かって手を振って無理やり園子との時間を終わらせた

探偵事務所へ向かう。

昨日のガラスが割れた件はどうなったのだろうか・・・

ガラスのこともなんとなく気になった。

そういえば昨日ガラスを割った影のようなあの人はどこに消えたのだろうか

闇に消えてしまったままのあの人は

行方がわからなくなったしまったわね

すぐに探偵事務所に到着した。

探偵事務所の前にはパトカーがしっかりと置いてあった。

探偵事務所の前にはお父さんと、目暮警部や高木刑事そして新一いや、コナン君がいた。

part - 2 / 22 知らない間に傷つけていた（後書き）

今回は三千文字超えました

正直疲れました

この作者は文章が長ければ長いほどまとまりがなく駄文になります
今回は何故か長くなりました

どうかバカ作者魔法戦隊三輪野助というものに評価をください

今回はひどい気がします・・・

どうか見捨てないでください

part - 2 / 23 ガラス事件の捜査（前書き）

久しぶりにコナンをだしました
ちなみに目暮警部もだしました

口調に不安が・・・

高木刑事再び登場

part - 2 / 23 ガラス事件の捜査

探偵事務所の前にパトカーが止まっている

警部たちが警察手帳を持っているみたいだけど事件の調査かなあ？

昨日のガラスが割れた事件についてかな……

よく様子を見たほうがいいみたいだね。

探偵事務所に近づいてみた。

ガラスの破片があちこちに散らばっている

かなり細かい破片などもバラバラに砕け散っているみたいだ。

「で、毛利君ガラスが割れたのは昨日か今日かどっちなんだね……？」

「さあ……いつ割れたのかはわかりません。

私が今日の朝起きた頃に偶然外の景色を見たんです。

そのときに探偵事務所の前にガラスの破片が散らばっている光景を目にしたんですよ。

私が起きた頃にはガラスは粉々に散らばった状態になっていたんです」

「じゃあ昨日はまだガラスは割れてなかったのかね？」

「はい、昨日のことはあまりよく覚えていませんがガラスは割れていませんでした。

もし探偵事務所の前にガラスが割れていたら蘭とコナンがケガをするはずですよ。」

「えっ、コナン君と蘭君がケガをするはずってどういうことだね？
詳しく説明を聞かせてもらおうか……！」

「昨日、コナンと蘭は探偵事務所の前で雪を見ていたんです
ほら昨日の間だけ雪が降っていたでしょ？」

2人とも雪を見ていたんです。

ちょうどガラスの破片が落ちているところで……。

もし昨日の雪を見ていたあの時間にガラスが割れてきたら探偵事務所の前で

雪を見ていたコナンと蘭はガラスの破片が刺さってケガしますよ……。

とりあえず昨日にはまだガラスは割れてなかったってことですよ……。

「

「なるほど……昨日の間にはまだガラスは割れてなかったんだな。

今日の朝起きた頃にはガラスが割れていたということは

夜中にガラスは割られたことになるな……。

しかも大量にガラスの破片が割られていることから

誰かが故意でガラスを割ったってことがわかるな……。」

「あとはこのガラスを割ったのは誰かってことが問題っすね……。」

「疑問に思いましたけど

夜中にガラスが割れたとき、大きな音がしますよね？」

誰かそのときに音に気づいたりしませんでしたか？」

急に高木刑事が話に割り込んだ。

みんな一斉に高木刑事の方向へ振り向いた。

「あつ、いえ別に大きな音なんて聞いてませんし、知りませんよねえ コナン君」

「うん、ガラスの割れた音だけでは聞いていないよ……。ガラスが割れた音の他にも、別の音も聞いたけどね……」

「別の音？何なんだい？別の音って……何のことだい？」

「あつ、うつん何でもないや……。言ってみただけ……」

「まったく言ってみただけってなあ今は事件の調査中だぞ……」

小五郎はぶつぶつ独り言を言っている。
さつきより風が弱まった

警部たちはガラスが割れた事件の捜査中
何気にオレも捜査に加わった

ガラスの破片一つ一つ注意しながら調べている
ガラスのところでどこかに撃たれた痕跡が残っている

ガラスを派手に割った人物は昨日の謎のヤツだ……
しかしヤツは正体不明の影そのもの

（まずはヤツの正体を暴かなければいけねえな……
なんかオレはヤツを知っているような気がする。
ヤツの気配を感じた

どうやらその謎も解いたほうがいけねえみてえだな・・・

それともう一つ蘭とヤツが重なり合ったことについても調べねえとな…。

今日蘭のクラスに来た転校生も何か重要な手がかりになるかもしれないえ

昨日の事件からかなり宙ぶらりんな手がかりがあるみてえだ調べておく必要があるな…。）

風は再び強まった。

蘭のことをすべて解るには時間がかかりそうだ・・・

それでも絶対に最後まで蘭を信じてすべての真実を解く。

この事件すべてが解明されるまでオレは絶対にあきらめない自分の中で何回も何回も誓った。

part - 2 / 23 ガラス事件の捜査（後書き）

今回は会話ばかりでした。

状況が分かりにくい気が・・・

バランスよくいきませんね

評価お願いします

m ((m

part - 2 / 24 ガラス一枚のように組み合わせられない事件

コナン君、いえ新一は今私のことをどう思っているの？

どんな思いで事件の捜査を行っているの・・・？

なぜか私の周りにはたくさんの謎が深まっていく

悠衣も何か重要なことを知っているかもしれない。

あちこちに広がり落ちているガラスの破片

大きな破片もあるが目には見えないくらい小さな破片もある
それを一つ一つを組み合わせればパズルになるピースのよう

はつきりと見えない破片も何かこの事件を物語っている

微妙に強まる嵐のような風も私たちのすべてを語り始めているようだ

今踏んでいるかもしれない小さな破片がなければガラス一枚は組み
合わさらない・・・

今、私たちの状況はなかなか破片がそろわないガラス一枚と同じ

現在、苦勞していることの一つは些細な事柄が見つけれられない

そう、例えば私たちが敵同士だと知る前から何か重要な手がかりが
隠されていたのかもしれない・・・

なぜそのときに些細なことにも気がつかなかったんだろう・・・？
今じゃどこかへ消え失せたピース

もう行方はわからなくなった・・・
未完成なパズルになったまま

一つの謎を残したままだと解決したことにはならない
すべてが解決に導かれないと事件は終わらない・・・。

見逃してしまった点などはもとはに戻らない
しかし今からでも、自分の力で手がかり（ピース）を見つけ出せる
かもしれない

新一、今あなたはガラスを割った犯人を見つけ出すほかにもすべて
を解くために捜査を行っているんだよね・・・

また今も謎が深まっていく
なかなか一つには解決^{ゴール}へと導かれない

私はお父さんや目暮警部たちそして新一が捜査を行っているところ
を黙ってみることしかできない・・・

もとはと言えば私が組織を作ったことから今回の事件まで繋がって
しまったのに・・・

（事件が起きたのは私が一番の原因になっているのに・・・。）

私は何もできない……………

日々過ぎるとともに罪を重ねていってしまう

罪は重々しく感じる

ついさつき気づいたけど瑛祐君にだって迷惑かけていた・・・

私の存在がみんなを苦しめている

私が組織のあの方であることからすべてが変わってしまった。

かすかに聞こえるみんなの声

微妙に聞こえる。

たまに吹く強い風のせいで途切れて聞こえる

- - 何を話しているのか

わからない・・・

みんなの声が遠ざかっていく気がする

みんなが遠く感じる。

よくわからないけどみんなが私の前から消えていくように感じる

「ら・ん・ねえちゃん・・・蘭ねえちゃん！」

目の前で自分のことを呼ぶ声

幼く変わってしまった偽りの声

迷いがあった自分をふきとばすように目が覚めた。

「何・・・？コナン君！！」

「蘭ねえちゃん、事件のことなら心配しなくてもいいよ。
必ず解決させるからさ。」

「うん……………」

か細い声で返事をした。

新一、あなたには今までの膨大な謎を解くことができるのかしら
今、謎は深まっている

この状況でもあなたは真実を見抜くのが楽しみにしているわ。

時はもうすぐ近づいてくる気がする

最終決戦まで・・・

part - 2 / 24 ガラス一枚のように組み合わせられない事件（後書き）

今回はちょっと無理がありますね……

逆に台詞が少なくて困りました

文章的に不自然な終わり方をしているかもしれません

昨日はユニセフの街頭募金で疲れました

どうか評価お願いします

評価をくださったら必ず返信しますので…

part - 2 / 25 謎は余計に広がっていく(前書き)

なかなか話が進まない気が……

part - 2 / 25 謎は余計に広がっていく

砕け散ったガラスの破片

事件を物語る一つの手がかり

- 宙ぶらりんの手がかりばかりで複雑になっていく

今、一番気になったのは蘭のクラスに入ってきた転校生

その人物が誰なのか・・・？

そして、何者なのか？知りたい・・・

今日はやけに嫌な予感がする。

何かとんでもない謎を呼んでいく気がする

よくわからねえけど今までとは違う“何か”がすべてを狂わせる

新しい転校生は誰なんだ？

余計に疑問が増していく

（新しい転校生のことは蘭に聞いてみるか・・・）

「蘭ねえちゃん、今日学校に来た転校生ってどんな人？」

「えっ、どうしたの Conan 君・・・いきなり今日学校に来た転校生のこと聞くけど」

「ほら、蘭ねえちゃん登校前歩いている途中に園子ねえちゃんが言っていたじゃない！！」

『今日、私たちのクラスに転校生が来る』って……
もう転校生って教室に入ってきたんだよね？
どんな人が転校生か教えて」

「ああ、今日ホームルームに転校生が来たわよ。
名前は“金森悠衣”ちゃんっていうのよ。
瑛祐君以来の転校生ですぐに仲良くなったわ。」

「ふーん。で、その人ってどんな感じの人だったの？」

「悠衣はとっても明るい子よ。
でも、ちょっと……」

「ちょっと……何？」

「あつ、うつん……何でもないわ。
気にしなくてもいいわよ。」

（ちょっと……何かの秘密、重要なことを知っているような気がする。）

何か私たちに関係するかもしれない。

悠衣の動きはよくわからない……

そう、謎に包まれている……

まだ新一には悠衣のことは言えないわね……

私も正直悠衣のあの時のこと覚えていない。

記憶は封印されたまま……

思い出せない……。）

蘭は頭を抱え込んで複雑に絡まる謎を考える。

その様子に違和感を感じたのはコナンだけ

（蘭のヤツ、どうしたんだ・・・？
さつきから何か様子が変だ・・・！！
一体何があったんだろうか・・・）

- 進む事件の捜査も目を開けて見られない蘭

一生懸命頭を抱え悩み込んでいる蘭に誰も気付かない。
唯一蘭の異変に気がついたコナンさえも痛々しい蘭に話しかけるこ
となんてできない。

コナンは頭を抱えこむ蘭のことを後ろを振り向きながら、心配もし
て捜査のほうへ加わった。

ガラスに残っている痕跡を照合している

「おじさん、何かわかったことはあるの？」

「いや、全然わからねえな・・・
今日は調子が悪くてなって・・・コナンお前、何普通に事件の捜
査に入っているんだよ。」

小五郎は言葉と同時にいつものようにコナンを一発殴った。
強力に殴られた一発はさすがに痛い。

コナンの頭には大きなたんこぶができた。

「いつてえ・・・」

子供のような高い声

子供っぽくふるまうコナン

その裏にはいろんな考えが複雑に広がる。

蘭は後ろを振り向いて瑛祐と悠衣の心配していた。

（今、2人とも何をしているのかな…？
大丈夫かなあ……………）

夜風が周りにふく

三メートル離れた角で1人うつむいて立っている悠衣
顔を隠したまま歯を食いしばり、目の前にある空き缶を睨みつけて
いる

悠衣は涙目でうつむきながら空き缶を蹴る

角の向こうにいる険しい表情の瑛祐は悠衣を監視していた。
瑛祐はさらに彼女の行動に不信感を抱く

part - 2 / 25 謎は余計に広がっていく(後書き)

更新遅れて申し訳ないです

迷宮に夢中になっていたんです。

終わった瞬間がなんか悲しいです

また見たくなりました。

余談にしまいすいません

えつと話はいろいろとまとまっていなくて申し訳ないです。

なかなか新しい展開に入ることが難しいです

今日まで学校です

早く冬休みになってほしいです

どうか評価をよろしくお願いします

絶対に返信します

今日は昨日よりは遅れません

part - 2 / 26 徐々に動き出した（前書き）

まだまだ同じ話です

part - 2 / 26 徐々に動き出した

雪はまだかすかに残っている

警察と小五郎（紛れ込んでコナン）は寒い中、事件の捜査
今も強い風が吹きわたる

あれから約三時間経った。

まだ事件の解き具合は変わっていない。

「高木君、毛利君何か手がかりは見つかったかね？」

「いや、それが全く見つかりません。

ただ散らばっているガラスの破片に少し妙な痕跡があります。」
ちよっと困った表情で警察手帳を見る高木刑事

そこにすかさずコナンが割り込む

「その妙な痕跡って拳銃で撃たれた跡じゃないの。」

「またお前か・・・毎回毎回犯行現場にチヨロチヨロと・・・
コナン、お前何を根拠に言っているんだ！」

「だってこのガラスの破片って黒ずんでいるよ。
拳銃で撃った箇所って焦げたような跡が付着するでしょ？」

これって焦げた跡じゃない？」

「確かに破片には焦げたような跡が残っていますね・・・」

犯人は拳銃でガラスをめがけて撃ったようですね…。

だとすると犯人は高い位置から拳銃で撃ったことになりそうですね…」

「どういうことだね？高木君」

「ほら、割れたガラスは探偵事務所の二階のコナン君の部屋の窓ガラスですよ。」

下から拳銃で撃てば上にめがけて二階の窓ガラスを撃つことになり、ますから多少角度がずれることがあります。

それにもう一つわかった点あります」

警察手帳のページをめくり書き込む

「何だね…？わかった点っていうのは…」

「犯人はこの近くの高層ビルから銃撃しているってことです。おそらく探偵事務所二階と平行な位置からの銃撃だと思われます。

銃撃を行った高層ビルは探偵事務所二階と平行に位置になっている屋上だと思います。

ビルの中からの銃撃だと現場に撃った時の焦げ跡が不自然に残り、ますし、いつ誰が来るかわかりませんから…。

撃つ位置が屋上からだ、と、あまり人は屋上に来ないから銃撃はしやすいと思います。

それにもし誰かが屋上に上がっていても階段をのぼる時に足音が聞こえますから途中で銃撃を止めることもできます。」

「だが、屋上と探偵事務所二階と平行な高層ビルたくさんあるじゃないか？」

「あつ、それは……」

言葉に詰まった高木刑事

目線をそらして何か言葉を考える。

「500ヤード離れた地点のビル」

みんな一斉にコナンに注目する。

みんなの捜査の様子を見続ける蘭はコナンの言葉に異様なほど反応する。

「えっ、コナン君何？」

「500ヤード離れた地点にある高層ビルで犯人は撃ったんだよ。」

「500ヤードだと？何いい加減なこと言っているんだよ！そんな遠くから撃てるわけねえだろ。」

また小五郎はコナンを一発殴る

「まあまあ、毛利君コナン君の言っていることが手がかりになるかもしれないから聞いてやったらどうだ」

「いや、このボウズはいつつもいい加減なことばかり言っているんすよ！！」

「たく．．500ヤード離れた地点から銃撃なんて無理に決まっているだろ！！」

「わかったか。ボウズ」

「でも、ボク昨日撃つ瞬間見ていたけどその時の光は500ヤード先の高い位置から銃撃されていたよ…。

昨日はつきりと見たから…。」

「でも、そんなの幻覚じゃねえのか？」

「幻覚なんかじゃない！

一回だけじゃなく二回も三回も光は飛び交っていたよ。

ボクちゃんと見たから…。」

ちよつと興奮したように必死に大声で叫ぶ

そんなコナンに対して蘭はあたふたする

「ちよつとコナン君何言っているのよ…。」

「なるほど…：500ヤード離れた位置から撃つとはそうとう銃撃は腕前みたいだな…。」

もしも犯人がコナン君の言うように500ヤード離れた位置から撃つたんならかなり恐ろしく厄介な相手だなあ…。

しかしここから500ヤード先の高層ビルっていったら…。」

建物に向かって指を指す

ごく普通の高層ビル

「一つ疑問に思ったが銃撃がコナン君の部屋であつたみたいけどその部屋にいたコナン君はよく無事で助かったなあ…。

あんな派手にガラスが割れるほど犯人が銃撃をしたらコナン君もまきぞいになるところだったのに…。」

「うん、ボク運がいいから……。」

（本当はあの時逃げ回って苦労したんだぜ……まったく今日は疲れたぜ。

それにしてもどうにも例の転校生の名前が引つかかるなあ……

どうしてだろう……

なんか妙な違和感が頭によぎる

ってそれはおいといて500ヤード先のあの高層ビルを調べる必要があるみたいだなあ……）

風はまだ強く吹く

急に警部がみんなの前に出る

「とりあえずあの高層ビルに行く必要はあるみたいだな！！
何か事件の犯人を示す手があるかもしれないから……

行くぞ……。毛利君、高木君」

警部の合図とともに2人は高層ビルに向かう準備をする。

それからビルに向かって走りつづける

後ろからはコナンと蘭が走る。

蘭は瑛祐が道にいるか確認

さすがにもう瑛祐も家に帰った。

しかし今まで瑛祐を何気に傷ついたことは心に残ったまま……
心配で心配でしょうがない気持ちがいっぱい

そんな複雑な気持ちの中高層ビルまで小五郎たちを追いかけるよう

に走った。

part - 2 / 26 徐々に動き出した（後書き）

なかなか新展開にはいれません。

まあどこかに区切りはつけますが・・・

いろいろ複雑で矛盾点が多いですけど辻褄が合うように頑張ります

わかりにくかったらすみません

必ず評価返信しますので評価お願いします

m (| |) m

part - 2 / 27 複雑に絡む思い

やっとたどり着いた。

ちよつと古びた高層ビル

一見どこにでもあるような何の変哲もないただの建物

そこに新たな謎が隠されているとは普通に予想できない

ここにたどり着いたときほっとした気分になる

――一息をつく

それからすぐに建物の屋上まで走りながら向かう

手はやけに冷える

指までしびれる感覚

思うとおりに動かない不器用な指二、三本でドアのノブをしっかりと握る

痛々しい指に力を込めてドアを開けて謎解きの屋上へと入った。
みんな一斉に屋上に入った。

辺りを見渡せば殺風景
何もないさびしい屋上

オレはやや古びたフェンスの方へ行く
そのフェンスに重心をかけるように移動させる。

顔の角度はやや上向き・・・
足をクロスしたように組む
ため息がつきたくなる。

なかなか終わらない大事件

- 事件の真実がわからない自分の未熟さを感じる

もう警察はこの事件の真実を追い求めるために捜査を開始している。
警察の姿を見て自分も“そろそろ捜査を手伝わなければならねえな”
と気持ちに切り替わった。

ほんの少しの休憩を終わらせてから警部たちとともに捜査のほうへ
加わった。

現場には気になるものは何もない。
所々焦げ跡が残っていてフェンスが黄ばんだ状態
中には黒ずんだ点がちょびつとあった。

今、わかることは犯人はこの位置から銃撃を行ったこと
そして、たくさん撃つたことがわかった。

「コナン君、何かわかったかい？」

「あつ、高木刑事・・・
まだあまりわからないけど」

高木刑事はしゃがみこんで耳打ちするぐらいの小さなトーンでしゃべりかける

「あのさ、昨日道路上でスケボーで走っていたけどコナン君が犯人に狙われていたからだろ？」

部屋のガラスが割れてからその誰かわからない謎の犯人から逃げ続けていたんだろ？

つまりコナン君は誰かわからないけど狙われているんだろ？
力になるから教えてくれ。」

「(need not to know)」

「えっ、どういうことなんだい？」

「高木刑事は知らなくていいよ。」

昨日の事件のヤツとは1人でけりつけるから気にしないでいいよ。」

「でもコナン君

そんな1人で何か抱えなくても・・・」

「いいんだ。それで納得しているんだから・・・」

コナンはさらりと一言言ってから事件の捜査に専念する

(コナン君・・・本当にいいのか？いつも自分のことはすべて自分で抱え込んでいる

誰にも弱みを見せない

誰にも危険なことにあわせまいと自分1人で行動するコナン君

つらくないのか？

何のことで苦悩しているのかはわからないが苦しんでいる状態だということとは表情を見ればわかる

今のコナン君は苦しみを植えつけられたような感じた・・・

あれからまた時は過ぎ今は、12時になった。

また次の日がくる。

今回のガラスを割った事件は犯人はわからないまま

ただ屋上で撃ったっていう情報しか分からなかった

あの謎の人物、これから関わっていくような気がする
何か重要な手がかりを持っているのかもしれない・・・

まだまだ謎はいろいろ残ったまま
いつか必ずすべての謎を解き明かす

part - 2 / 27 複雑に絡む思い（後書き）

話がわかりにくい気がします

なんかちよつといろいろと視点が変わるのが不安です

なんかいろいろと矛盾点が残っているので辻褄の合うようにしたいです

この小説に評価お願いします

part - 2 / 28 本当の始まりはここから

「高木君、何か手がかりは見つかったか？」

「いえ、全然わかりません……。ただ数ヶ所黒ずんだ点がありますね。」

撃ったあとの痕跡でしょう……。

これだけでは犯人は特定出来ません。」
自分の警察手帳をじっくりと見る。

「毛利君、今は何時だね？」

「えっと、2時40分ぐらいです。」
慌て腕時計の時間を見る

「もうそんな時間か……。時が刻むのは早いな……。」

ここは一旦切り上げるぞ
次は早朝に捜査開始だ！

一刻も早く犯人を見つけ出さないとまた何か起こすかもしれないから……。」

現場に置いた手袋や証拠品などをまとめて持ち帰り屋上から出ていく準備をした。

1人寂しそうにうつむく蘭はみんなより先に屋上から去った。
一つ一つの階段をコツコツと途切れ途切れの靴の音を鳴らしながら降りた

その途切れ途切れの音には何か哀しげなものが感じとれる

途中で止めた足

うつむいてしゃがみこんだ。

「私はこれからどうすればいいかしら……。」

か細い声でもう今何も見えないかのように一言つぶやいた。
今、心は疲れ切っている……

蘭に引き続きみんながドアを開ける

みんなが階段を降りると同時に蘭は立ち上がった。

警部たち3人の後ろについてくるコナン

下を向いて考え込んでいる

（“金森悠衣”か……

何か引つかかるなあ

この名前、何かあるような気がする

一体何なんだ？この妙な違和感は？

“金森悠衣”調べておく必要はあるみたいだ）

階段を降りるたびに疑惑は増していく

たまに隣りで階段を降りる蘭の方をちらつと見る。

うつむいて歩く蘭

悲しそうな顔を隠すように歩く

（蘭……どうしたんだ？

一体何があったんだ？

何悲しそうにしているんだ？

悲しそうな表情で自然に出る涙をこらえて無理しているな・・・
そしていつもいつも悲しそうにしている・・・

なぜだ？なぜ悲しそうにしているんだ？

余計に心配になるじゃねえか・・・

それにしても“金森悠衣”何か知っているような気がする

「ねえ、蘭ねえちゃん・・・」

「えっ、何？コナン君・・・」

「さっきの転校生の名前ってどっという名前なの？
教えてよ。」

「“金森悠衣”って名前よ。」

コナンは焦りだしたその金森悠衣って名前に素早く反応した

「“金森悠衣”？それって本当なの？」

「当たり前じゃないの。」

そんなことでウソ言っただうするのよ

ほら、コナン君ビルから出るよ……。」

蘭はコナンに顔を見せずに高層ビルの外へでいった
涙がでそう

空気は震えるくらい冷たい

でも決してコナンには今の自分の姿のままは見せなかった。

（“金森悠衣”新一も聞き覚えのある名前みたいね…

私もどこかで“金森悠衣”っていう名前聞いたことあるような気がする

どこで聞いたのだろうか・・・）

今は、現場の高層ビルから去った。

そしてそのまま家へ歩いて帰った。

警部たちは速やかに車で帰っていった

私たちは警部を見送った。

それから安心して探偵事務所に入った

これからは夜明け

そして次の日のスタートが切られる

この間にも近づいている最終決戦まで……

ここから謎解きの舞台は幕開けになった。
未知なる謎を解くときがきた

part - 2 / 28 本当の始まりはここから（後書き）

話わかりにくいかもしれません。

情景描写が書けないような気がします

また文章が乱れがあるような気がします

どうか駄文ですが評価お願いします

part - 2 / 29 二重に重なる思い、それぞれに対する思い

美しい朝日が昇る

今日は真つ赤な太陽がこの街を照らす

昨日と今日は事件が起こったり事件の捜査やらで寝ていない
2日間連続一時も眠っていないため、寝不足で少々だるい

気持ちが落ち着かない

小五郎は家に帰ったと同時に床で眠りについた

コナンと蘭は部屋にこもり外のさまざまな景色をバックにしてそれ
ぞれの状況を考えている
うつむき加減でしゃがみこむ

複雑に絡まる自他の感情を精一杯に出して気持ちを出す2人
急速した運命の歯車
関係ある者全てに駆け回っていく
自分でさえはつきりとしていない複雑な思い

暖かい太陽に照らされながら17年間を仲間とともに過ごしてきた
光のような自分の考え
感情にのみこまれ邪悪へと心境が移り変わった複数の顔を持つ魔女
に影響されて十年間闇の中でうずくまっていた自分の考え

それぞれの正反対な気持ち交互にぶつかり合うように揺れ動く

私はどうすればいいの？

そんな事を言っても誰も答えてくれない

誰かに自分の気持ちを打ち明けたい

でもみんなに私が組織のあの方だなんて言えるわけがない

私はまだ自分の愚かな罪を犯した事を悩み続ける

私が組織という犯罪者の集まりを作ってしまった事を後悔している

私のせいでいろんな人を傷つけていた

二日前には、私の真実を哀ちゃんに語り自ら裏切ってしまった

私は哀ちゃんの気持ちも知らずに一方的に自分の言いたかった真実を語ってしまった

あの時、何故私は哀ちゃんの気持ちを察してやらなかったのかしら
哀ちゃんを一人ぼっちにさせてしまった

私の起こした行動は余計に哀ちゃんを苦しめているだけ

なんで私は哀ちゃんを傷つけていたことに気付かなかったんだろう・
・・

哀ちゃんは必死になって私が部屋から出ることを拒んだ。

泣きそうな顔を隠して自分の本音を全て伝えた
でも私が、無理やり哀ちゃんの前から去った

なぜあのとき、哀ちゃんの状態を把握できなかったんだろう・・・
泣きそうな顔をしていたことわかっていたくせに

なんで無理やり哀ちゃんの前から去ってしまったんだろう・・・

私が哀ちゃんに組織のあの方であることを告白した理由は、何も知らないまま私のことを明美さんのような心が清い人と重ね合させて見ていりなんて可哀相だと思ったから・・・

本当の私は明美さんのように真っ白な心の持ち主なんかじゃないから・・・

でも今頃気がついた

哀ちゃんを置き去りにして孤独にさせてしまったことの方が、もっと可哀相なことをしてしまったことに・・・

私はまた罪深い行為を犯してしまった。

今頃哀ちゃんはどんな様子で過ごしているのかしら……………

どんな気持ちで2日間過ごしてきたのかしら……………

蘭は後ろを振り向いて窓に近づいて博士の家まで眺める気持ちでいた

今すぐ哀ちゃんの様子を見に行きたい

でも私は哀ちゃんを裏切ってしまった

あんなに重い別れを告げたのにあっさりと会えるわけがない
哀ちゃんと会ったりしたら気まずくなる

今、頭のことにはいろんな過去が回っている

隣りのガラスのない部屋に隠っている最愛の彼は今どんな思いがめぐっているのだろうか・・・

彼も哀ちゃんのことになるのだろうか・・・

博士の家へ目をやったあと隣りのコナンの部屋へ視線を向ける

新一は可哀相な哀ちゃんのことをどう思っているのかしら...

ー コナンの部屋

コナンは下に視線をやる

まだ気持ちの整理ができないまま

第一蘭があの方って時点で信じられない

それなのに、“金森悠衣”っていう転校生の名前に違和感があったりする

何か蘭との関係があるような気がする

その他にも矛盾点がざっくりとある

いろいろと複雑すぎて気持ちの整頓がまともにできない

それにオレが眠らされた時に蘭は博士の家へ行った

その時に灰原に蘭があの方であることを告白したのかもしれない

当然蘭があの方だと知ったら自分の姉明美さんと重ね合せてしまうから

かなしむに決まっている

灰原は見かけによらず心細い部分があるからなあ……

もしかすると部屋から出ないなんて言い出すかも知れねえ・・・

どうにも灰原の様子が心配だ
今すぐでも博士んちに行きたい

オレはさらに気持ちが複雑になる

蘭のことは一日も早く白い心に戻したい
しかし灰原とも約束した

『ヤバくなつた助ける』って

今は、2人の心境がとても気になる
複雑な思いが重なる2人を助けたい気持ちでいっぱいだ!!

隣りの部屋にいる蘭

そして窓の向こうで近くで暮らしている灰原

今、一体何をしているんだ・・・

今同時に重なった2人の思い

博士の家には、灰原が地下室で仮眠

灰原もそれを通じたかのように突然起き出した。

突然の目覚めに少々驚いた

目をこすりひとりごとを呟いた

「私、いつの間にか眠ってしまったわね……。
疲れが溜まっているのかしら。」

パソコンを開く前に隣りに置いていたお姉ちゃんの写真に目を向ける

お姉ちゃんはどうして組織に殺されてしまったのかしら……
組織……その組織のあの方は蘭さん

蘭さんはどうしてもお姉ちゃんと重なってしまう
雰囲気全てがお姉ちゃんと似ている蘭さん

自分のお姉ちゃんと似ている蘭さんは本当に白い心の持ち主だと思
っていた

でも本当の蘭さんは私が裏切った冷酷な組織のあの方
ボスにあたる人物

そんなこと信じられない

でもそれが真実

もう私全てが信じられなくなってしまいそう……

part - 2 / 29 二重に重なる思い、それぞれに対する思い（後書き）

へへへへへへ、下手度MAXですいません

最近文章に乱れを感じます

あまりにも下手すぎて読みかえすと気が重いです

駄文しか書けなくてすいません

話ごちゃごちゃですいません

私はセリフが書けなくて困っています

下手すぎてすいません

評価、感想等お願いします。（――＊）。

part - 2 / 30 受け止めたくない真実に戸惑い（前書き）

ほとんど灰原視点です

part - 2 / 30 受け止めたくない真実に戸惑い

“もう私全てが信じられなくなってしまいそう”

あれから2日経った

まだ私は“蘭さんが組織のボス”にあたる人だなんて信じていないや、信じたくないし、受け止めれない
悲しい真実から逃げているのだろうか？

こうして蘭さんが自ら“組織のボス”と言わなかったとしても蘭さんがボスであることは変わらないまま
このまま何も知らない方がよかったのかしら？

蘭さんの裏の顔を知らない方がよかったのかしら？
でも、私は知ってしまった……

蘭さん“組織のボスだって事を……
そんな方程式になっていること

そんなのいくら頭をひねっても解るわけないじゃない……
普通の方程式とは違う

考えれば考えるほど、解けなくなる方程式

私は悲しい真実を受け止めなければならないの？
私の全ては“悲しみ”に植え付けられる

受け止めたくない真実ばかりある
特に今回の真実は信じられない……
でもこれも運命だよね……

私と蘭さんの本当の関係はボスと裏切り者だつてことも、その真実を知ること……

工藤君がいつていたわ。

『自分の運命から逃げるんじゃないやねえよ』って私に一言教えてくれたわ……

運命だつたら逃げずに真実を受け止めるべきだよ……

私はすぐ嫌なことから避けようしてしまう
そんな自分にちよつと嫌気がさしてしまう

パソコンを開く気も起こらない

お姉ちゃんの写真を見るたび胸が痛い

何かをする気力がない

ただ開いていないパソコンとにらめっこをしているだけ
何もやらないまま時はだんだん刻まれていく

今、私に何かを求めても何も起こす気はない
この間の短い時間でも、工藤君のために解毒剤の研究をちよつとでも進めることだってできる

解毒剤の研究も中断したまま

一日も早く工藤君を元に戻したい

なぜならば私が工藤君を幼児化させてしまったから……
それなのに私は研究を疎かにして蘭さんの受け止めたくない真実に迷いを抱く。

蘭さんのことばかりが頭によぎる。

「お姉ちゃん、私はこれからどうなるの？」

どうすればいいの・・・？教えて・・・」

また独り言をつぶやいた。

今はもう完全な朝

地下室からだと思えない光が外には限りないほどの光がある

また今日も寝不足

少し目をこすってから洗面所へ向かう

今日もまた学校に行く

少年探偵団のあの子や工藤君と一緒に登校・・・

今の私の心境では彼らの真の明るさを見ることがつらい

私はどうすればいいのだろうか？

なんかまた逃げたいという衝動に己自身を負かしてしまうかもしれない・・・

私は立ち止まった。

自分のこれからを考えると同時に過去も思い出してしまう

「おい、哀君・・・」

どこからか私を呼ぶ博士の声

私は声が聞こえる方へ向かった

「博士、どうしたの？」

「新一が哀君を呼んでいるぞ・・・」

「えっ、工藤君が・・・どうして・・・」

「さあワシはよくわからん。ただ新一が

『灰原を呼んで来い』と言ったもんで今哀君を呼びに行ったんじゃ」

「で、肝心の彼はどこにいるのよ。」

「玄関先で待っているんじやが・・・」

「ふーん。」

それだけ言い残して、玄関先まで小走りで向かった。

玄関に着いたらそこで工藤君が待っていた。

「工藤君、どうして・・・ここに」

こんな朝早くに来る訪問者にあっけにとられた

なぜ、彼がここにいるの？

驚きの表情を隠せなかった

「灰原、どうした？」

寒い風が家の戸を叩く

それとほぼ同時に彼は何気なく一言私に言った。

part - 2 / 30 受け止めたくない真実に戸惑い（後書き）

文章が下手ですいません↑謝りすぎだよ……
なんか話がまとまっていないような気が……

ぜひぜひ評価、感想をお願いします
必ず返信しますから……
ただし荒らしは結構です
では、失礼しました

part - 2 / 3 1 信じられない真実に

「どうした？灰原・・・何驚いているんだ？」

さらりとつぶやく工藤君

何かありそうな予感がするわ…。

「ねえ、工藤君何の用・・・？」

沈黙になりかけた玄関先で小さな声で言った。

「それはお前に聞きたいこと、言いたいことあるから・・・ここに来たんだよ……。」

「工藤君あなた、まだ朝の五時よ。こんな朝早くから一体何しに来たのよ？」

「だから言いたいことがあつて来たんだよ。」

「そんなことはわかってるわ…。」

こんな朝早くから言わなければならない事って何よ？私も忙しいのよ」

コナンはいったん深呼吸をして心の準備をするそして言いたいことを言う決意を固めた

「あのさ、言いづらいけど蘭のことで・・・」
そこで言葉に詰まる

この後なんと言えいいのかわからない

「わかってるわ…。」

蘭さんは組織かれらのボスだってことでしょ？」

「お前どうしてそれを…。」

「（お前どうしてそれを…。）って

あなた蘭さんが彼らのボスだってこと知っていたのね。」

「ああ、まあな…。」

それよりやっぱり灰原も蘭が黒の組織のボスだと知っていたのか？」

「ええ、一応本人から聞いたわ…。」

“私は組織のあの方” だって自ら言っていたわ。」

今の灰原の顔は泣きそうな表情

涙がでるのを必死にこらえて背を向けた

それと同時に工藤君が私の様子に察知したかのように目つきが変わった。

「灰原、なんかお前無理してねえか？」

えっ……………

どういうこと…？

彼から予想していない言葉が発してきた

一体どういうこと？

「工藤君、どういことなの・・・？」

「灰原は蘭のことを今まで明美さんと重ね合わせて見ていたんだろ？
その蘭が灰原が裏切った“組織のボス”だと聞いてお前が平常心を
保てるわけがねえ……」

しかもさっきだって涙があふれるのを我慢していたんだろ？」

図星をつかれたかのように急変した灰原の表情
そこまでコナンは見逃さなかった

「やっぱりな…その表情は今言ったことすべて図星だな？」

ふうつとため息をついた

さっきまでの怯えた表情からちよつと力を抜いた表情に戻った

「やれやれ、あなたにはすべてお見通しなのかしら？
名探偵さん・・・？」

「バーロ・・・お前はオレが何か言い出すとすぐに表情が変わるか
らわかりやすいんだよ…」。

さっき灰原が“蘭は組織のボス”だということをいつている途中に
様子が急変したじゃねえか・・・

それにお前が蘭のことを明美さんに似ているっていつていたから組
織のボスだという真実を受け入れなくなかったんじゃないか？」

さっきの灰原と違って力を少し抜いたような口調に変わった。

「ええ、まあそういうことよ…。
それにお姉ちゃんと同じぐらい白い心を持つ彼女のボスだなんて
想像できないわよ……。」
最後少しか細い声に変わった。

今泣きたいような泣きたくないような複雑な気分

風が強まるたびに迷いがあふれる
どうすればいいのかわからない……

そして風がなびく向こう側で顔を見せずにうつむきながらしゃがみ
こんだ美少女がコナンたちの会話を聞いていたことは知ることな
かった

その少女は蘭のクラスに新しく転校してきた転校生“金森悠衣”

彼女は、一回ため息をついた。
それから前を向いた。
そして2人がいる博士の家に目を向けた。

「何かが始まるみたいね…。」

嵐のような風が吹く中で一言つぶやく
この時、影から様子を見ていた悠衣の存在にコナンたちはまだ気づ
いていなかった

part - 2 / 3 1 信じられない真実に (後書き)

文章は相変わらずです。

最後に金森悠衣を出しました

必ずコメントの返信はしますので評価や感想お願いします

m (— —) m

part - 2 / 3 2 さらなる迷いに今は絶望

灰原は、平常心に戻った。

「で、結局あなたは一体何しに博士んち（ここ）に来たのよ？
何かあるんでしょう？

教えてほしいわ・・・」

何を言われても大丈夫だって感じで前向きに視線をむける。
その裏腹にはもう何を告げられても構わないという覚悟もあった。

「蘭が灰原に“組織のボス”って言ったとき、どんな様子だったんだ？」

この瞬間灰原の脳裏には蘭の姿が焼き付く
頭を抱え込んでしまう

（嫌だ・・・思いだしたくない・・・

確かあのとき蘭さん自身も迷いの心で私にすべてを話した
悩みに悩んだ蘭さんの表情を私はしっかりと覚えている・・・
もうあんなつらいことは思い出したくない・・・。）

「どうした？灰原・・・」

何気なく私に声をかける工藤君

私の気持ちを共感してくれているのかな・・・？

「あのさ、工藤君・・・」
か細い声で覚悟の一心につぶやく

「無理しなくていいんだよ。」
えっ…………

“無理しなくていい”ってまた言ったけどどういうことなの？

私が何か無理しているように見えるの？

私が悲しんでいるように見えるの？

必死に自分の表情を覆い隠しているのに彼には私が悲しんでいることわかるのかしら・・・

「言いたくなきゃ言わなくていいよ・・・」。

お前が蘭のことを明美さんと同じぐらい大切な人だと思っていることはわかってるから・・・。

蘭が組織のボスであることについて話したくないんだろ？」

「ええ、そうだけど・・・」。

安心したんだかしてないんだかわからないような笑みを交わす。
自分のことを誰かに理解してもらえたことを少し喜ぶ。

「悪いな…。灰原

こんな朝早くから家に来ちまってよ…。」

「別にいいわよ…………」。

それにしてももうこんな時間よ…。」

壁に取り付けられている時計を見ながら話す

悲しいんだが悲しくないんだがわからない気持ちを押し殺す。

ちよつと黙っている工藤君

私のことも心配なのかしら・・・

「ああ、そうか・・・

もう学校に行く時間だな・・・

そろそろ探偵事務所に戻らなきゃいけないな・・・

灰原、じゃあな・・・」

言葉と同時に素早く走った。

追いかけてようにも追いつかない速さで走った。

彼は足が速い。

私では追いつかないスピードで蘭さんの住む探偵事務所へと帰っていった。

私は1人取り残された気分だった・・・

近くに博士が立っていることも気づかなかった

私には彼がうらやましくてしょうがなかった

彼は蘭さんが組織のボスだとわかっていてもいつもどおり悩みなんてないようにふるまっていた。

そして人の心配までしてくれた。

今の私は自分の悩み（蘭さんがボスだという真実に追い込まれること）で精一杯なのに彼はこんな自分中心的な私のことも気にかけてくれた。

彼は道を走りつづける

普通は道を走っているだけにしか見えない

しかし私には工藤君が遠い存在に見えてしうがなかった
もう学校の支度をしなければならぬ

私は急いで学校に行く支度をする
そして急いで家を出た。

そして少年探偵団のあの子たちとの待ち合わせ場所まで歩いて向かった。

あともう少しであの子たちにたどり着くつてときに足が止まった。

（工藤君も一緒に登校するんだよね・・・
なんか気まずい気がする）

足が突然のように止まって待ち合わせ場所へ行かなければいけない
と思つても足が思い通りに動かない
迷いの心と葛藤してしまふ

・・・このとき灰原自身も気づいていなかった。

自分のことをあざ笑うかのように影から様子見していた1人の少女
の存在に・・・

part - 2 / 3 2 さらなる迷いに今は絶望（後書き）

今、2回目のスランプ期に突入してしまいました

ほかの方々の小説を読んでいますと余計に自分が情けなくなる気分
でいっぱいです

ほかの方々がうらやましいです

そして上手く書けない自分にはむかつきます

はあ、上手になりたいです

それに最近読者数も少なくなっています

感想や評価してくださる方々には感謝の気持ちでいっぱいです

こんな感じの私に評価・感想お願いします

m (| |) m

そして以前私の小説を荒らした方に言います

荒らしには二度とあいたくありませんから

荒らしは止めてください

あれは結構小説にも響きましたので・・・

年最初から最悪になりそうです

part - 2 / 3 3 想えば想うほど崩れていく

一歩も動かない硬直した足
動かそうにも動かせない

私の周りで楽しそうに登校する人々
周りの笑い声が聞こえる。

誰が見ても普通は楽しそうに会話しているように見える。

しかし私にとっては取り残されそしてみんながあざ笑っているかの
ように感じる

いつまでも1人道路の真ん中に立っている灰原
ずっと道路に立って止まっているのはあまりにも不自然になる

その不自然さを隠すように何らかの仕草をして誤魔化す
それもまた不自然だが人々が通りすぎた時だけ“何も無いよ”っ
て伝えるかのようにかすかに微笑みを見せる。

必死に苦笑いするのもつらい
一歩も進めない自分に腹立たしいような情けなくなるような複雑な
気持ちになる

早くあの子たちのところに行きたい・・・
でも彼、工藤君とも一緒に登校することに恐れている

――なぜならば彼は私を心配しすぎるから・・・
彼が私について心配するたび心が痛む。

それに彼は私と蘭さんのことを心配するから余計につらい
私は蘭さんと無理やり離れてしまった・・・

もう蘭さんのことは考えたくない。

蘭さんとの思い出はなかったことにしたい

もう忘れたい気持ちでいっぱいなの

蘭さんについて何も聞きたくない。

でもさつき工藤君は蘭さんのことばかり話題に持ちかけた。いや、
蘭さん以外のことは聞かなかった・・・

工藤君が蘭さんのことを話したびつらい

あのときの記憶（蘭さんがボスって告白したときのこと）が蘇って
くる。

記憶をさらに植え付けられた気持ちになる。

蘭さんが組織のボスだなんて信じたくない・・・

いや、信じられない。

でも実際は“組織のボス”

カラスのような衣服を纏いながら草場の影から犯罪を犯す罪人たち
のボス

あの真つ白な心を持つ蘭さんがそんな悪人には見えない
ましてやボスだなんて考えられないし、想像もできない。

しかし蘭さんは自ら“組織のボス”だと言った

この耳でしっかりと聞いた。

――でも何かの間違いとでも思いたい

誰かに蘭さんのことについて言われるとつらい・・・

自分の中で悩みを（蘭さんが裏切った組織のボスだということを）

抱え込みたい

誰にもあのときのこと（地下室で“私はボス”だと言ったときのこと）をいわれたくない。

ねえ…工藤君

今私って現実逃避しているよね……。

今決められた“運命”から逃げているよね……

分かっている

自分自身一番現実から逃げていること分かっている

分かっているけど今回だけはどうしても言い訳したい。

だって蘭さんはお姉ちゃんと似ているから……

お姉ちゃんと重なって見えるから黒に包まれたような組織のボスだなんて余計信じられない

お姉ちゃんは本当に真っ白な心の持ち主だった。

そのお姉ちゃんと重なって見える蘭さんが罪人の集まりの組織のしかもボスだなんてありえない……

どんだけ頭をひねっても私が工藤君よりいや、彼の好きなホームズより遥かに賢くても“蘭さんがボスにあたる人物”っていう答えは解せない。

お姉ちゃんと重なる蘭さんが黒い心なんてあるわけがない。

お姉ちゃんと同じ潔白な心を持っているに決まっている。

どう考えてたって蘭さんがボスって“答え”なんてどこにもない

頭をひねってたつて蘭さんがボスだという答えには導かないよ……。

私の中だけでなんとか心の葛藤をおさえたい
誰かに動かされたくない

工藤君も待つている待ち合わせ場所へ行きたくない。
彼と会おうと蘭さんのことをいわれそうで怖い……

さすがに少年探偵団のあの子たちの前で蘭さんのこと（特に組織の
ボスだということ）は言わないだろう
でもいつかいわれそうで怖い……

学校は行かなければいけない
早く行きたい

でも足が思いどおりに進まない
もう完全に硬直されている

後ろから妙な殺気が感じる
凜とした冷たい雰囲気が漂ってくる。

私はすぐに振り返ってみた
少しおそるおそる誰なのか確認した

「哀ちゃん……………」
やや小さい声でつぶやく

なんとそこには吉田さんがいた。

（まさかあの妙な殺気は彼女＞吉田さん＜からのもの・・・でもあの子に限ってそんなこと・・・）

「あつ、吉田さんおはよう...。」

ただ時の流れでなんとなくあいさつする

「うん、おはよう。」

吉田さんは私に向かって満面の笑みで元気よくあいさつしてくれたこの笑顔にはウソは全くみられない。
これは、純粋な笑顔

そう、今感じた殺気は吉田さんとは全然違う
何か別の私たちが体験したことのない新たな殺気を感じる。
殺気の持ち主は誰なのかしら・・・

そして一体何者かしら・・・
未知なる気配を感じる。

何なのこの気配は・・・？

「哀ちゃん、哀ちゃんってば・・・」

「吉田さん・・・何？」

「どうしたの？」

さつきから様子がおかしいよ……。
だって道路の真ん中に立っていたじゃない
そんなところにいたら危ないよ……。
それに顔にしわよせて怖い顔になっていたよ。
なんでそんな怖い顔をしているの？」

「別になんでもないわ。

ちよつと寒くて凍えていただけよ…。

さあもう学校へ行きましょう…。」

「あつ、でもコナン君はどうするの?」

「彼のことはいいわ。

どーせ学校で会えるのだから

それより早く学校へ行かないと遅れるわ

もう行くわよ……。」

私は慌てた口調に変わった。

そして走りだした。

怒り狂ったのだろうか?

自分でもよく感じる

いつもの冷静さが欠けてしまった

私はもう彼と一緒にいる時間がつらい……

学校では会ってしまっけど一緒に行動しなければいい……

彼を避けてしまいそう……

今の自分の行動が恐ろしい

このまま自らを孤独にしていまいそう

自分で自分の首を絞めるような状況になりそう

でも次々と私の周りから人が消えていく

お姉ちゃんはきれいにこの世界から消えた

蘭さんも“自分がボス”であることを告げ、そしてついには工藤君までも私の前から去った

彼らとは気まづくなってしまった・・・

だんだん周りの人々は私の前から去っていきそうな気がする。

もう冷静沈着でいられなくなってしまふ

高鳴る鼓動に押しつぶされてしまふ

“誰か私を止めてほしい”

耐えれなくなってしまうから・・・

もう私は破たんする一方

このまま堕ちていく

もうどうにもならないぐらいに……

その一方でそんな私をあざ笑うかのように冷たい空気を漂わせる人物がいた

――そして私は空気だけを感じながら学校へ向かった

part - 2 / 3 3 想えば想うほど崩れていく（後書き）

はあ、一応ほとぼりはさめていませんが評価欄公開しました
評価が下がっていました

否定的な>多分荒らしに近い・・（コメントもありました（削除済み）

『想えば想うほど崩れていく』

明美さんのことを想えば蘭のことを想ってしまい考えすぎて崩れていくっていう意味です

さらに蘭のことを想えばコナン（新一）のことを想ってしまい考えすぎて崩れていく

簡単に考えすぎて崩れていくっていうことですってわかりにくいことをいってすいませんm（――）m

嗚呼、全然話が進まないです

書きたいことがあってなかなか進まないですね…。

まあこんな感じの小説です

どうか評価お願いします

m（――）m

part - 2 / 3 4 距離はさらに遠く感じる (前書き)

この時点ではマリアちゃんも出てきます

part - 2 / 3 4 距離はさらに遠く感じる

帝丹小学校が大きく見えてきた

走っていたら学校に着いた。

息を切らしながら教室まで向かった。

吉田さんは少々バテ気味

無理に走らせてしまったわね。

キンコーン・カーコン

チャイムが外まで鳴り響く

慌ててまた教室まで全力疾走で走った。

チャイムの音と同時に慌てだして教室まで走ったりしている生徒が多数いる

私たちもみんなに紛れて教室まで走る。

教室に入った。

いつもどおり、同じ生徒がグループで集まって普通に身近な会話でもしている

もうすでに小島君と円谷君は教室にいた

しかしまだ工藤君は教室の中にいなかった。

学校を休んでいる人を除いて工藤君だけがいなかった・・・
彼は一体どうしたのだろうか？

と、気にしながら待っている間に教室のドアを開ける音がした。

『ガラッ』と鈍ったような音でドアを開ける

そこにいたのは江戸川君としての姿の工藤君だった。別に何気なく教室に入ってきたけど、私にとってはまた何かいわれそうな気がしてたまらなかった

「あつ、コナン君

おはよー。」

「コナン遅えじゃん。」

どっかで道草でも食っていたのか？」

「コナン君、どうしたんですか？」

コナンが教室に入った瞬間少年探偵団のみんなが一斉に押しかけで話しかけてきた

灰原はその横で呆然として少年探偵団の集まりの様子見していた

「みんなして何話してんの？」

「あつ、マリアちゃんおはよう！」

「あれ？たくま君はどうしたんですか？」

「さあ、ウチは休みだとか聞いたけど……
実際のところは知らへんわ。」

「ふーん……。」

「アイツ、ずる休みなんじゃねえか・・・？」

元太はひねくれ口調になった

「まさか、元太君じゃありませんからずる休みなんてしていないと思いますよ。」

風邪でもひいたんじゃないやありませんか？

ほら、最近寒くなっているし、風邪も流行っているじゃありませんか？」

「元太君じゃありませんから」ってなんてオレがずる休みなんかするんだよ・・・。」

「えっ、じゃあ元太君って風邪ひくんですか？

元太君は風邪ひかないですよ…。」

「なんでオレは風邪ひかないんだ？」

「よくいうじゃありませんか？ほら、なんとかは風邪ひかないって・・・。」

「なんとか」ってなんだよ？」

「ほら、はじめの言葉が“ば”で最後の言葉が“か”の言葉ですよ…。」

「オイ、光彦・・・それは“バカ”じゃねえだろうな……。」

「そんなこと言っていないですよ…。」

まあ、実際そうですけど・・・」

「なんだと、光彦！！今なんっていった？」

元太は光彦を睨みつける

光彦は少々おどおどする。

「ちょっと2人とも、朝からもめないでよ…。」

歩美は2人の仲介に入ってもめているのを止める。

そのあと歩美は灰原の方に気づいた。

「哀ちゃんはどうしたの？」

さつきからずっと1人でいるけど・・・

何かあったの・・・？」

「別に何でもないわ。

ただちょっと風邪気味なだけよ…。だからうつしたくないからちょっと遠ざかっているだけよ。」

灰原は静かにみんなの前から遠ざかった。

灰原・・・・・・？

その様子に違和感を持ったのはコナンだけだった。

（どうしたんだ？

なんかアイツの様子がおかしい。

アイツは一体どうしたんだ？

蘭のことを相当気にしているのか？）

コナンの疑惑が深まる

少年探偵団のみんなは啞然とする

灰原は、窓ガラス側に行つてしゃがみこんだ。

外からの風が入ってきてさらに寒さを感じる

この空気は、組織の冷酷な心ぐらい冷たさを感じる

一息ついて抱え込んでいたことを整理し直す。

私の周りに余計に謎が深まっている。

あの凜とした空気を漂わせる謎の人物は一体誰なのかわからない・・・

・
あの人のことも引つかかる。

それにしても次は少年探偵団のあの子たちに対する自分の態度が妙な感じがする

次はあの子たち（少年探偵団）とも距離を失ってしまう気がする

私はこうすることしかできなくて正直つらい

“ 蘭さんが組織のボスだってことウソだと思いたいよ……”

なんでみんな私の前から去っていくの？

みんなからの距離が遠く感じる……

このまま私はどうなるの……？

蘭さん、離れる前に“ 組織のボスなんてウソ” だと言って欲しかった
なんでウソっていつてくれなかったの？

教えてよ……蘭さん

part - 2 / 3 4 距離はさらに遠く感じる（後書き）

まあ、なんとかほとぼりは冷めたかな？って感じですが
とりあえずマリアちゃんは一応だしました

たくま君を書かなかったのは作者の気まぐれです
それに書いたら原点からずれる気がするからです

なんか視点がころころ変わる感じわかりにくい気がします
これでいいのでしょうか？

少年探偵団の登場も原点からずれてきている気がします

小学校編は次回で終了します（多分）

次の次＞37話は小学校と同じ時間の行動として高校編（蘭たちについて）です

話数だけ増えますがストーリーの流れ・時間は進まないんです
こんな手段を使うのは力不足ですがいいんでしょうか？

Side 高校編についても入れて評価や感想等お願いしますm（

ー）m

なんでウソっていつてくれなかったの？

教えてよ・・・蘭さん

灰原の気持ちは堕ちた状態

蘭に裏切られたままっていう感がまだ残っている
なんだかため息をつきそうになる

がっかりしているところを見られたくない
落ち込んだ素振りや暗い表情をしないような気をつける

忘れたくても嫌っていう程記憶に残る
いろんな人の影響で自分の中で抱え込みたい“記憶”を植え付けら
れて、蘭さんのことも余計印象が強くなった
今の蘭さんは組織のボスにあたる人物

“蘭さん”組織のボス”

この印象が強いせいか蘭さんについて語って欲しくない

誰にも蘭さんのこといわれたくない・・・
その気持ちでいっぱいだった。

私の周りの少年探偵団のあの子たちはいつものように活気があって
いいわね…………。

今の私とは大違いだわ

そんなことを考えている自分の方がむなしいけど・・・
教室中全体がざわついているわね……。
今の気分じゃみんなの輪の中にはいれないわ
いつもどおりの会話を交わしているわね。
とってもうらやましいわ

『ガラッ』

再び教室のドアが開く音がした
先生が重たい荷物を運んで教壇に置いた。

「席に座って!!」

指示が出されてみんな自分の席に座った
あの子たちの会話は中断された
私もみんなに紛れて席に座った。

先生はみんなが席に着いたのを確認して教壇からみんなに向かって
なにやら話し始めた。

無論、私はいつもの寝不足で話しはまったく聞いていない

他の席に視線を移して様子見すると偶然工藤君も視界に入った。
彼は相変わらず呆れ顔で話を聞いていた。
私も眠いし、退屈だった

ちょうど窓側の席だったためちよつと曇つた景色を眺めていた。
一見誰が見ても曇つた景色を見てため息をついているだけにしか見え
ないが灰原の瞳に映つたのは目の前にある景色とかじゃない。

――ここ（帝丹小学校）からじゃ見えない小さな建物

ちよつと遠く離れた場所に何気なく建てられた建物

その建物には、今思い出すことがつらい人物が人混みに紛れて私と
同じように授業を受けたりしている

窓側からちよつと遠く離れた場所にいる黒い髪をなびかせる天使の
ように全面真っ白な心を持つ少女のことだけを考える。

彼女は一体どうしたのだろうか・・・？

ただそれだけ気になっていた。

自分の中だけで2日前からの黒い髪の彼女と今の少女との変化が知
りたかつた

“今、蘭さんも私と同じような思いをしているのだろうか？”

いくら組織のボス（罪人）になったとはいえ心の奥底にひそむ良心
もあるはず

自分の起こしてしまった行為を痛いぐらいに後悔していると思う

良心なんてものがなければあのときだって悲しそうにしながら“真
実”を伝えることはなかった

――真実を一つ一つ伝えるときの蘭さんの泣きそうなほどの表情
絶対に忘れられない・・・

“その表情は会いたくても会えない工藤君を待つときと同じ”

切ないものが感じ取れた。

だから蘭さんあなたが2日時を刻んだ今、一体何を感じているのか・

・・・

知りたいのよ…。

窓から眺めると遠くからしかみえないちよつとした建物

窓際は太陽の光が眩しいほど入ってくる。

少々邪魔な光を避けながらずっと黒髪の少女ただ1人だけの様子見
するためだけに窓ガラスの透明感まで味わう

おもいはただ一つ

“ 本当の蘭さんを知りたい ”

今の蘭さんの姿が偽りか真なのか真実を要求したい。

蘭さん、あなたはこの透き通った窓ガラスの向こうに広がる街で一
体何をしているの？

いいのか、悪いのかわかりにくいですね…。

次は帝丹高校視点で書きます

時間は、だいたい今回の帝丹小学校の話と同じぐらいです。

同じ時間に蘭たちの感じたことについて書きます

書きたいことは謎以外にもありますね…。

視点変わりすぎてわかりにくかったらすいません

力不足です

もしよろしければ評価や感想などお願いしますm(_____)m

part - 2 / 36 意味深な言動に笑う少女（前書き）

とりあえず最初の出だしです

小学校の話と時間は一緒です

いきなりかけ離れているからわかりにくい場合申し訳ございません

part - 2 / 3 6 意味深な言動に笑う少女

ここは、帝丹高校

小学校と同じく蘭たちも授業中
みんな何気なく授業を受けている
そんな光景が全体的に見られる。

誰が見ても何の変哲もない普通の教室は窓から透き通ったガラスに
水滴のような痕跡が残っていた。
そこに集まった生徒は黒板に深く刻まれたように書かれた文字を鉛
筆のかすれたような音を響かせている。

教室全体にその音は鳴り響く。いつもと変わらぬ21Bの“標識”
が堂々と取り付けられている教室の光景
どっからみても普通の教室

――しかしその裏腹に一つに重ならないそれぞれの想いが密かに
漂っている
何事もないような振りだけをして心の奥底で深い傷を背負う人々が
いた。

人それぞれ微妙に背負っている傷は違^{もの}うが同じ時間にそれぞれ抱い
ている“何か”を客観視していたことは同じ

面には出さない違う想いがゆっくりと溢れ出そうとしている
だんだん鉛筆のかすれた音が小さくなる

――それぞれの想いが強すぎて（そのことに集中しすぎて）鉛筆

が思うように動かない。

鉛筆の動きが制止するのを必死にごまかしている間に、時が徐々に刻んでいる。

そしていつの間にか1時間が過ぎていった。

ノートに書かれた文字一つ一つにはみんながそのときに感じた想いが表れている。

みんなは、授業の終わりを告げるチャイムの合図とともに一つの場所へ固まると集まりを作る

蘭や園子そして、転校生の金森悠衣の3人は、窓側に集まって話題を語りあっている。

「ねえねえ、悠衣!!」

そういえば悠衣ってどこの出身なの？

学校はどこだったの・・・？

どこに住んでいたの？教えて・・・」

好奇心旺盛な園子が唐突に質問をぶつけた。

質問を受けた悠衣は少しも戸惑いを見せず、クスツと笑った。

「そうね……………」

カラスの住む墓場かしらね・・・」

妙な笑みを浮かべたと同時に窓の隙間から入る風のせいで茶髪の髪をなびかせる。

その茶髪を強く印象づけるように風は細かく長い間吹き続けている。
それから再び大人びた雰囲気漂わせる

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・？」

意味が分からなくて首を傾げる。

頭の上にクエスチョン・マークでも浮かんでいるような重い気分

園子は悠衣の発言に疑問符をつけるような感じで何がなんだかわからなかった

蘭はその発言に異様なほど反応して拳にちよつとの力を加え真剣な眼差しへと移り変わった。

――悠衣にさらなる疑惑が発生して少々の焦りが増加した

「ねえ、悠衣・・・

あのさ、えっと・・・その・・・“カラスのような墓場”ってどこという意味？」

不思議で意味深な発言に驚きあたふたしながら再び質問をぶつけた。
園子の発言を聞いた瞬間、悠衣はさらに笑みを浮かばせる

「その解答^{こたえ}蘭がよく知っていると思うよ・・・。」

クスクス笑い続け風に揺られる悠衣

蘭は、発言を聞いた瞬時に反応する

意味深い発言に園子は余計にこんがらがっていく。

「蘭、悠衣の言っていることって一体どういう意味なの？

蘭なら知っているんでしょ？教えて・・・」

必死になって頼む園子

いつもと違って焦りだした。

どうしても“悠衣の発言”について教えてほしいという気持ちがいっぱいだっただ。

「ううん、わからないわ・・・」

ちよつと解答がわかるような気もするけどとりあえずごまかした。

園子には悪いけど悠衣は私たちに関係する“何か”奥深いキーワードを持っているような気がする。

そう、私たちを動かす一つのキーワードにあたる人物

悠衣・・・あなたまさか・・・

蘭の頭の中で悠衣の行動に疑惑が深まった。

蘭が悠衣を見る眼は、不信感を抱いたときの“疑いの眼”に変わっていた。

その真横にいる瑛祐も無言のまま感情を出さず悠衣に不信感を抱いたような眼差しをした

その眼差しに気づいた者は誰もいなかった。

part - 2 / 3 6 意味深な言動に笑う少女（後書き）

えっと、今回の話は多分かけ離れているので一番ワケわからない気がして不安です

文章も相変わらず伝えたいことはなかなか伝わらないもんです
なんとか次の話のテーマは決まりました

今回はこの話は出来事のきっかけです

それと多分視点はいろいろとあります

評価や感想などお願いしますm（　　）m

part - 2 / 3 7 園子の疑惑、そして感情（前書き）

すいません。

なぜか園子中心でおかしくなりました

休み時間がそろそろ終わる。
周りの話し声も小さなった。

どこのグループを見渡してもみんな楽しそうに何事もない様子で会話をしている。

そう、ある一つのグループ以外は．．

朝から吹きわたる寒い風をバックに普通の“日常的なおしゃべり”とは超えた会話をだべっている３人の女子高生がいる。

その中には、先日転校したばかりの“茶髪で三つ編み”をした悪魔のような美少女も巻き込んでいた。その彼女は怪しい匂いをさせて友人にあたる蘭や園子を嘲笑うかのように会話を交わす。

会話の雰囲気は気持ちに今にも堕ちそうなほど下がり気味

258

遠くからだとその重苦しい雰囲気は全く感じない。

――しかし彼女たちに近づけば近くほど“重々しいオーラ”を感じる。

普通では気が遠くなるようなすさまじいオーラを嫌というほど発する

重たい空気の中はやはり居心地が悪い

最初は重々しいオーラを感じなかったものの悠衣の意味深すぎるたった一言で空気が一気に変わった。

「カラスの住む墓場」

普通に聞いたら何のことかよくわからない言葉

彼女はさらりとその言葉をつぶやいた。――しかもそれだけではない

『その言葉の意味は蘭が知っている』
と蘭に向かって言った。

園子には余計に何が何だかわからなくなる

蘭と悠衣は、この妙な言葉の意味を知っているような気がする。
その意味が全くわからない園子は友達として自分だけ置いてきぼりにされた感がある

“自分は最も信頼している親友といっているほどの仲よしの蘭に遠くに引き離されてしまった…”

そんな気持ちがあつてとても辛さを感じる。

園子は迷いの心を見せれずにはいられなかった。

（なんで・・・？なんでなの？

蘭も悠衣も何でも分かつてそう

みんな私の知らないこと何でも知っているかのような態度を振るま
う……

一体何を知っているの？

どうして私には何も教えてくれないの？）

園子は悠衣だけじゃなく蘭まで遠くに離れていったような気を感じ取った。

悪夢でも見ているようだった

一見仲が良いような友達関係だけど深く溝が入った気がする
蘭と悠衣からもなにやら険悪なムードが漂う・・・

普通は感じ取れない“空気”だけど園子にはものすごく痛感する
釘でも打たれたような気分だった。

「はぁ……………」

ついついため息が出てしまう

しかしそのため息は2人（蘭と悠衣）には聞こえていない

いちいち蘭たちのことで気にしている自分に苛立つ

何だか今日の休み時間は長い

どうしても頭によぎってしまう

蘭と悠衣を見ていると何かを思い出しそうになる・・・

なんだったのかな？

思い出そう思い出そうと思えば記憶がかすれていく

自分以上に茶髪の少女（悠衣）に“何か”覚えがある
言葉では、表せないけど何かが引っかかる。

一体何だったの・・・？

私と蘭と悠衣の間には目には見えない境界線がある。

仲の良い友達だけどすぐに遠くにいつてしまいそんな関係
――そこには何も知らない私なんかはいれない領域も隠れている
足を踏み入れることすらできない

キンコンカンコンコン

再びチャイムの音が教室全体に鳴り響いた。

次の授業の合図が響き渡った。

みんな慌ただしくしながらそれぞれ自分の席に着席する

普通は授業の始まりを表す音だと感じるチャイム

――しかし園子にとっては大きなチャイムは私たちの中で“何か”
”が起こる前兆だと感じ取った。

昨日は更新できなくて申し訳ありません

実は昨日くじけてしまい更新していませんでした

評価ランキングには参加したくないという気分なので参加していません

予想はだいたいいました

矛盾だらけっていうのは作者自身もわかっていることです

わかっていなくて全然組み合わせっていない話にしているわけではありません

一応言いたいことだけ前置きしてから謎に入るっていう形では駄目でしょうか？

今は全く違う視点になったりしているので話がごちゃごちゃで矛盾していますけどあとからまとめていろいろと書くっていう形では駄目でしょうか？

作者からの言い訳ですけど聞いて欲しかったです

長々とすいません

評価だけは今後の参考になるので一応開けて置きました

ただし荒らしコメントは結構です

評価や感想なら大歓迎です

失礼ですがもしよろしければ評価や感想お願いします

part - 2 / 38 密かな園子の思い

――今は曇り空

雨までは降っていないが曇り空に包まれて気分的にはもやもやとする。

ブルーな気分に堕ちてしまいそう

そして、今日は早く時間に下校

自分の家に帰ることすら憂うつ気分で校門の外へ出ていく人が複数いる

しみりとした“空気”の中でも下校のおしゃべりタイムでも始まった。

その周りのざわざわとした空気の中にそれぞれの想いを抱く3人の少女が道を歩み始めた。

一見彼女たちは3人そろって下校していて楽しそうにも見えるしかし本当の状況は楽しいどころか沈黙状態に陥った。

誰も一言も話さない。

一番こういうときに話しかける園子でさえ一言もつぶやかなかった

そう・・・悠衣のあの意味深すぎる言葉を聞いてから・・・園子も“下手なことはいわない”ように慎重にして蘭と悠衣の様子を拝見している

“どこかで2人がボ口を出すはず”

自分の中で確信してただひたすら黙ってみた

蘭と悠衣か・・・

なんーか引つかかるんだよね

なんか知らないけど事件の匂いがある

気にしすぎなのかな・・・？

2人とも黙ったまま

何も会話を交わさずに時間だけが過ぎていく

小学生が私たちの方へ向かって歩いている

みんな楽しそうね…。

今の私たちと全然違う・・・

あれから（休み時間）からずっと私たちは一言もしゃべっていない
まま・・・

なんか気分は、ケンカしていないのに絶交したみたい・・・
もやもやするわね…

私たちは、今の天候と同じね…。

曇ったような気分だね…………。

蘭も悠衣も私に話しかけてくれない・・・

2人に“見捨てられた”

どうしてもそんなことを考えてしまう。

私も2人に見捨てられたなんて考えたくない
でも、本当は…………

園子の中で葛藤が始まる。

余計に今までの蘭たちのことがこんがらがっていく

園子は微妙に頭を抱え込んで考える。

顔が少し真っ青になる……。

目の前ではいつもと変わらぬ少年探偵団の3人が騒ぎながら歩いている

園子は自分とは違って楽しそうな少年探偵団が羨ましかった

自分と違って明るい彼ら（少年探偵団）を見ることが辛かった

園子はさらに頭を抱え込む。

「どうしたんですか？ 園子さん……」

声は遠くから聞こえてくる

私はずっと我を忘れたのを思いだし声が聞こえる方へと耳をすませる
声の主が誰か確認しようと四方八方キョロキョロする

すると少年探偵団の三人が目の前に立ちはだかっていた

「園子さん…… どうしたんですか？」

さっきから呼んでも返事がないんですけど一体どうしたんですか？」

「そうよ。園子さん…顔が真っ青になっていたよ。

何か悩み事でもあるの？」

「うっん、なんでもないわ。」

それよりなんで私を呼んだの？」

園子は蘭と悠衣と一緒にいるのを無視して小声で会話をした。

「実は僕たち少年探偵団の中で気になっていたことがあるんです。

灰原さんについてですけど…。

聞いてくれませんか？」

光彦は真剣な眼差しを園子に向けた

part - 2 / 3 8 密かな園子の思い（後書き）

2日間更新していなくて申し訳ないです

いろいろと忙しいし、ちょっと落ち込んでいたので…

えっと文章力は前より落ちたと自覚しています

慌てて書いたので下手になってしまいました
すいませんでした

“ 「聞いてくれませんか？」

”

いつもと違って“どうしても聞いてほしい”と強調している。

それほど重要なことを告げるのだろうか・・・

園子は何をつぶやいてくるのかちよつと知りたくて緊張している
いつもと違う光彦に少々驚く。

光彦は“何か”をいう準備をしている

「園子さん、灰原さんについて何か知っていますか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

どうして哀ちゃんのことを質問するのにこだわるか疑問に思った。

彼は本当に真剣な表情で私に質問している

それはなんとなく伝わってくる

なんでそこまで疑問が強いのか・・・

なぜ彼はそこまでこだわるような口調なのか・・・

なんだか年下のあの子たち（少年探偵団）が自分よりかけ離れてい
る気がして恐ろしかった

いくつも年下のあの子たちの方がなんでも分かっているような気がする

遠く置いてかれた気がして余計寂しく感じる

「一体何があつたの・・・？」

園子は心配そうに尋ねてみた

「今日の灰原さんの様子がおかしいんです。

いつもなら、僕たちと一緒にいるんですけど、今日は……………」

「今日は……………の先に続く言葉は何？」

「今日は、灰原さんずっと僕たちを避けてひとりで寂しそうに窓側で座っていました。

かなり落ち込んだ様子でした。

園子さん、近ごろの灰原さんについて何か知っていますか・・・？」

「えっ、そんなこといわれても私哀ちゃんとはあまり接点がないからわからないんだけど……………」

「そんなこといわないで……………」

お願い！！園子さん

ほんの些細なことでもいいから教えて……………！

哀ちゃんも私たち少年探偵団の仲間だから心配なのよ。」

歩美はものすごく激しく叫んだ。

あまりに落ち込んで大声で叫んだのであっけにとられた

そして、目を丸くして驚いた……………

「みんなお、落ちついて……………」

これ情報って言うていいのかわからないけど……………それに

実はあんまりよくわからないけど二日前博士んちつまり哀ちゃんも一緒に住んでいる家に蘭が訪れたのを見かけたのよ……………」

「えっ、それって普通のことじゃねえのか？
あのねえちゃんか博士んちに來たって不思議なことはねえだろ？
遊びに來ることだってしばしばあるじゃねえか。」

「それだけじゃないわ。」

私は蘭に声をかけようと思ったけどそのときは声かけづらかったのよ…。

理由は博士んちの前に待っている蘭の表情が何かの覚悟を決めたみたいだったから…。

あの蘭に声はかけづらかったわ…。

今までの蘭と違って怖い表情をしていたから…。

長年蘭と親友やっていたけど蘭のあの張り詰めたみたいな表情は初めてみたわ。

私はあのとき正直戸惑ったわ。

どうしようか迷ったわ……………」

園子は悲しみながら説明している

悲しみを隠そうにも話しているうちに悲しくなってしまう…。

だんだん声がか細くなる。

冷たい風はさらに吹きわたる

「悪いわね…。これ以上、話していたら蘭たちに迷惑かかるからこの辺で話を終わらせるわね。

じゃあね…。みんな。」

小声からもとの声に戻り少年探偵団に向かって笑顔を作り手を振った。

園子は平静を装って家へ向かおうとした。

「待ってください!!」

その瞬間光彦は園子を足止めした

園子は一瞬びっくりして後ろを振り返った。

「今度は、どうしたの・・・？」

「園子さん、待ってください。

博士の家に来てください。

さっきのこと詳しく聞かせてください。」

光彦は強い口調へと変わった。

その裏腹で後ろで園子を待つ蘭と悠衣は、少年探偵団の言動に不信感を抱いていたとは気づかなかった

part - 2 / 39 光彦の疑惑（後書き）

うーん。相変わらず文章は下手です
なんか矛盾しているような気がします
嗚呼、手と腕が痛いです

どうか評価お願いします

part - 2 / 40 複雑な思い（前書き）

めちやくちやな文章です

「園子さん、さっきの話詳しく聞きたいので博士の家に絶対に来てください。」

約束ですよ…。」

光彦は厳しい口調で園子に向かって発言した。

彼の口調があまりにも厳しくてなんとも言えなかった。

園子の前に立ちただかる光彦はいつもに増して鋭かった

園子も光彦の前では慌てるのも無理もない
あまりにの鋭さに驚きさえも隠せなかった。

「でも、あとからついていつに博士んちに行けばいいの？
今は、蘭たちがいるからちょっと無理かもしれないんだ。」

「じゃあ、三十分後に博士んちの前に来てください。
約束ですよ…。では、一旦帰りましょうか…。」

「ねえ、そういえば疑問に思ったけどあのガキンちょは一緒じゃないの？
ほらいつも一緒に行動しているじゃない…。」

「あつ、コナン君ね…。」

実はコナン君は先に帰ってしまったの…
どうして先に帰ったかはわからないけど走っていたから…
かなり慌てていたみたいよ…。」

「ふーん…。」

「あつ、園子さん、約束は絶対に守ってくださいね…。」
背を向けていたが振り向いては改まって言い付けておいた。それあとすぐに走ってそれぞれの家へ向かった。

「園子、どうしたの・・・？」

さつきからあの子たちとしゃべっていたけどどうかしたの？」

蘭が急にしゃべり始めた

いきなり話しかけられ園子はびっくりした。

蘭とは一切会話を交じりあわなかったのに話しかけられて嬉しかった。

「ううん、何でもないわよ…。」

適当に“何でもない”と言い誤魔化した

しかし本当は、あのとき（二日前）の蘭に関してあの子たち少年探偵団に教えてしまった。

（黙っておいた方がいいよね…。）

そう思って自分の心の中だけで少年探偵団との会話を抱え込んだ。

「そう……………」

思いこめたみたいにつぶやく

蘭の表情が少し寂しそうに見えた。

（蘭・・・またあなたは悲しんでいるのね…。

どうして蘭がいつも悲しそうなの？

蘭に聞きたいこと聞けるかな…。）

「あのさ、蘭……………」

「何？園子・・・」

「あつ、えつと・・・ううん、なんでもないわ…

あつ、私用事があつたんだ。

先に帰るからね・・・

蘭、悠衣じゃあね」

園子は2人にたいして手を振らず走って家の方へ向かった。
吹き強まる風に逆らいながら2人が視界に入るまで走る

蘭たちの姿が見えなくなったあと自分の家の方向から博士んちへと向かった。

そして立ち止まり、“無理やり蘭との時間をつぶしてしまった”ことを思い出す。

蘭と会話した時間は短かった

蘭の些細な言葉は忘れられない

園子はため息をつけた。

そして再び博士んちへ向かって走った。

博士んちに着いた。

もうすでに少年探偵団の3人は家の待っていた。

「園子さんやつと来ましたね。

じゃあ、立ち話も何だから博士の家の中にも入って話しましょう

か…………。」

「え、ええ……。」

すぐに家のチャイムを鳴らした。

すぐに博士が家から飛び出してきた

「君たちなんでここに来たんじゃ？」

しかも園子君まで…………。」

「ちょっと話したいことがあつて来ました。

家に上がつてもいいでしょうか？」

博士も恐れるような鋭い目つきへと変わる光彦

「じゃあ家に上がつてもいいんじゃないよ……。」

博士はそれだけ言い残して少年探偵団と園子を家にあがらせた

まさか影からその様子を蘭と悠衣が見ているとは知らないで…………

part - 2 / 40 複雑な思い（後書き）

すいません。

今回、また作品を否定的な批評をもらいいらしながら書いていたので文章がおかしくなっていました

まだ荒らしが出没していると思うと気分がもやもやします

他の作者さんの小説もほとんど絵理子さんが荒らしいるのを見るとこちらの気分もムカムカします

すいません。こんな話をしてしまいました

今回、荒らしの絵理子さんのせいでかなり点数下げられました
評価などないただけたら幸いです

part - 2 / 4 1 行方を追うために…

園子と少年探偵団全員博士の家の中へ入った。
張り詰めたような空気が周りに漂ってくる。

玄関先はやはり寒さを感じる。

寒いのをこらえキッチンの方へ向かった。

廊下を歩く。

少々ギシギシする音を無視して一列に並ぶ。

博士はいつもの少年探偵団の3人とは違った雰囲気漂っているような気がして少々不安になった。

博士は妙にうるたえる

みんなの雰囲気がいつものに増して張り詰めたような感じだった。

不自然なほど辺りをキョロキョロとする博士
いきなり止まりだした

「みんな、どうしたんじゃ？」

今日の様子はなんか変じゃよ…。

何があつたんじゃ？

園子君もなんだか様子がおかしいぞ。

一体みんなしてなにがあつたんじゃ？

教えてくれないかのお。」

博士は行き先をふさぎみんなに質問し始めた。

「博士……、哀ちゃんって今家にいるの？」

心配そうに博士に問いかける歩美

博士は少し戸惑って頭を抱え込む

「いや、それがまだ哀君は家に帰って来ないんじゃないよ…。

さつき新……いやコナン君に聞いてみたんじゃないか

『知らない』って言うていたんじゃない。」

「じゃあ、博士……コナン君にも灰原さんのこと聞いたんですか？
それでコナン君とはいつ会いましたか？

コナン君が博士の家に訪問してきたんですか？

詳しく教えてください。」

ズバズバと質問する光彦に博士はあつけにとられ口をポカーンと開ける

「本当についさつきじゃよ…

君たちとすれ違いで新……いやコナン君がワシンちにきたんじゃないよ…。」

「コナン君は何しに博士の家にきたんですか？」

めちやくちや細かく質問する光彦に驚きを隠せずつついっ日汗をかく。

自分のことでないのにまるで自分が追いつめられたような気がする

『はあ』とため息をついたのも光彦は見逃さなかった

「さあ、コナン君は忘れ物があるからって言うて家にきたんじゃないか。」

「本当ですか？」

光彦はさらに疑い出す

博士は自分から吐いたことの重さを感じる。

さりげなくつぶやいた“コナンが家に訪れてきた”という言葉聞き逃さかった

息をぐくりとのみこむ。

後ろに下がるうにも足が硬直したみたいで動かない。

周りをキョロキョロして光彦の鋭い視線から避けようとする

「ほ、本当じゃよ…。」

そんなウソつく必要はなからう・・・。」

博士は光彦の視線をずらして下を向きながらつぶやく
余計怪しいような言動になる。

「いいえ、コナン君のことだから重大なことで博士の家に来たんじゃないありませんか？」

例えば、灰原さんのこととかで来たんじゃないありませんか？
博士は少し動揺する

玄関の前では少し激しい風の音が聞こえる

ただ時間だけが刻んでいく

寒い廊下の前で立ち尽くしてまま何十分かの時間が経つ

「気になったんじゃないが……」

なぜ君たちは哀君のことを聞き出すんじゃない？

みんなしてどうしたんじゃない？」

「それをこれから話そうと思っているんです。
話を聞いてくれませんか……。」

「哀ちゃんのことと博士に協力してほしいんだけど……。
博士に話してもいい？」

「ああ、いいんじゃないか……。」
すっかり動揺がなくなりいつもの博士に戻った。

博士は少年探偵団から何かいわれることを覚悟していた。
そして、深呼吸を一度して話を聞くの準備した。
……後ろでは園子は不審ながら聞き耳をたてた

part - 2 / 4 1 行方を追うために… (後書き)

話がだんだん原点からずれていく気がします
もちろん矛盾のことともわかっていきます
どうか評価お願いします

part - 2 / 4 2 事の始まりから…

「哀君に何があったんじゃ？」

詳しく説明してほしいんじゃが……」

少年探偵団のみんなは次の言葉をいう準備をしていた

「実は今日の哀ちゃんの様子がおかしいんの。

風邪でもひいているんかな？」思ったけどそれとは違う。

なんか……今日の哀ちゃん私たちのこと避けているような気がするんだ。

特にコナン君のことを避けているような気がするの……。

私たちと会ったらすぐに顔を背けるし……。」

歩美は残念そうにか細くつぶやく

「博士なら、灰原と一緒に住んでいるから灰原の様子とかわかるんじゃないのか？」

「いいや、哀君はしばしば一人で地下室でパソコンを打っていることがあるからあまりワシが様子を見ているってわけじゃないんじゃ……。」

じゃが、最近の哀君は地下室から出なくなったんじゃ。

前まではそんなことなかったんじゃがのお……。」

「それで博士、哀ちゃんは何日ぐらい地下室に閉じこまるようになったの？」

ひよとしたら手がかりになるかもしれないから……。」

「哀君が地下室から出なくなったのはつい2、3日前ぐらいからかのお」

（2、3日前……

たしか2日前、蘭が博士んちの前で一人で立っていたような気がするわね…。

――まさか）

園子の脳裏に冷たい眼に変わった蘭が浮かび上がった
蘭の周りの背景は全て黒で埋め尽くされたようなイメージが頭に嫌
というほどよぎる

深く考える園子の前で激しい風が吹く音が聞こえる

そのとき、蘭のことを深く考えていたけど気づいて我を戻す

（考えすぎか………）

ふっと笑い蘭のことを考えるのを止める。

そして博士に確認のために聞き出す。

「その2、3日前に何があったの？」

「2、3日前かのお…えっ、とたしか毛利くんと蘭君がワシの発
明した新作ゲームで遊んでいたんじゃないや…」

園子君、それがどうかしたんかのお…？」

「ううん、別に…何でもないわ
とりあえず参考になったわ…。」

少々焦り口調になる。

心の奥底ではかなり複雑に考えていた。

（やつぱり蘭は、2日前に博士んちに訪問したみたいね
じゃあ、あのとき家の前で待っていた張り詰めた表情をした蘭も夢
じゃないんだ…。

あの怖い表情をした蘭は私が本当に見た蘭なんだ。）

園子の表情は不安定な状態

自分の親友張り詰めた表情を見ると余計に心配になってくる

「みんなに聞くんじゃないが哀君の様子がおかしいのは学校での様子のことじゃろ？」

一体どんな様子だったんじゃない？」

「えっと、ですね…」

なんか張り詰めた表情をしていたんですけど。

何かに追いつめられたような感じでした。

それにコナン君とは、一番顔をあわせたくないって感じでした。」

「しかもなんかいつもより落ち込んでいたぞ…」

元太が光彦につづいて大声で叫ぶ。

後ろで話を聞いている園子は余計にこんがらがつている

（えっ、どういうこと・・・？

たしか2日前に蘭が博士んちに来たこととあの眼鏡のガキンちょが
関係あるんだよね……。

哀ちゃんは、一体一人で何を悩んでいるの？

・・・蘭と悠衣からの冷たい空気が漂うのは一体なんなの？

いろいろと引つかることがあって全然わからない……。）

頭を抱え込んで深く考える

- - -そして、この時点で園子は次にまだ“何か”があるような気がした。

part - 2 / 4 2 事の始まりから… (後書き)

ワケわからない話ですいません
文章もかなりめちゃくちゃです
自覚しております
ではこれからも頑張ります

part - 2 / 4 3 広がりすぎた全然まとまらない思い（前書き）

えっと、まだ博士んちにいるみたいですが
一応まだ前置きです

かなり長い前置きで申し訳ないです

part - 2 / 4 3 広がりすぎた全然まとまらない思い

まだ“何か”あるような気がする。

蘭がなぜあんな張り詰めた表情だったのか・・・
きっと理由^{わけ}があっただろう・・・

あまり情報が入ってこないこの状況
しかも蘭について全然わからないまま

“何か”が頭によぎる。
なんか引つかかる。

気持ちはもやもやする。

「ねえ…園子姉さんどうしたの？
なんか園子姉さんまで哀ちゃんみたいに落ち込んでいるようだけど
大丈夫？」

「もしかして蘭さんのことで落ち込んでいるんですか・・・？」

「……………？」
鋭い光彦に凶星をつかれて驚きを隠せない。

みんな蘭のことで悩んでいるのだと確信した。

「でも、なんでまた蘭姉さんのことで悩んでいるの？」

「えっ……………？」
蘭のことにあんまり触れてほしくないときに思いもよらぬ言葉が返
ってきてますます不安が広がった

「それより今はあの姉ちゃんのことよりも灰原のことを考えるのが先なんじゃのねえか・・・」
なにげに元太が横から話しかける。

「そうよ…。今は蘭姉さんのことじゃなくて哀ちゃんのことを心配しているんだよ・・・」

それに蘭姉さんのことなら何も心配する必要ないと思うよ…。

蘭姉さんはいつも明るくいし優しいから・・・

何も心配することなんてないと思うよ…。」

少年探偵団の3人は、園子に気づかう。

でもどうしても園子は蘭のあの張り詰めた表情に疑念を抱いてしま
う。

灰原や蘭のそれぞれの状態が重なり合い何がなんだかわからなくて
困難になる。

今、目の前に広がる複雑な思い

（今、私は何かに迷っているような気がする……………）。

今、重なり合ういろんな状況や思いに戸惑っているのかもしれない。
・・・

私の周りの人たちはみんな私から遠く距離を離れていく気がする

そして、私を嫌というほど悩ませる

蘭や悠衣も『何も知らないくせに』って感じの視線で私と見ている
ような気がする・・・

私はそれだけで怖いのよ……

それなのにその他にも哀ちゃんの様子が変だとか・・・よくわから
ない状況になるなんて・・・

わけがわからないよ…。

私は一体どうすればいいの？)

園子が頭を抱え込むと同時に風の音が聞こえてくる。

その(風)音は寂しそうに吹いている

「思ったんですけど灰原さんが落ち込んでいる理由って蘭さんに関係あるんじゃないですか・・・？」

光彦は風の音を遮って思った言葉を次々と発する。

博士が一番何もかも感づかれ光彦に焦りを見せる。

「たしか灰原さんは、2、3日前に急に様子がおかしくなったといっていましたよね…。」

「あ、ああ…そうじゃが

2・3日前から哀君は地下室から出ようとしないんじゃないよ。

2日間、学校に帰ったきり地下室にこもっているんじゃないよ…。

学校に行く前に見る哀君の表情は泣きそうなぐらい悲しい顔をしていたんじゃないよ・・・。」

「そして、2日前に蘭さんが博士の家へ訪れたんですよね…。園子さん？」

「……………」

いきなり質問する相手が園子に変わって驚いた。

「え、ええ…実は私見たのよ…。」

蘭が博士んちの前で立ち尽くしている姿を見かけたのよ…。

その時の蘭の様子が……」

園子は目をそらし、蘭の恐ろしい表情を思い出す

それと同時に次にいいたい言葉に詰まる。

次の言葉を言おうと思いつつも声が上手いこと出てこない

驚いたような表情を覆い隠すことができない・・・

風はさらに強さを増して玄関の戸を叩く。

それと同時に周りの置物のかすかに揺れている。

今の蘭や悠衣と灰原それぞれ考え方や思いは全く違っているようにも似たようなことで辛さを感じていることは同じだ

蘭は自分が“冷酷な組織のボス”だという罪悪感に自らを追いつめてしまう

灰原は自分のお姉ちゃんと言葉が重なり合うほど似ている蘭が自分が裏切った組織のボスだということに現実逃避したい気持ちでいっぱいになっている・・・

園子は2人の中間に入っている

（私は追い詰められたようなみんなを見ていても一体どうすればいいの？）

とついつい悩んでしまう

何を信じればいいのかわからない状況に苦悩する

三重に重なるなかなか一つにまとまらない思いに余計に辛くなる

そして、園子はさらにそれぞれの苦しみを与えられたようでパンクしそうになる

今、置かれたこの状況に気が遠くなる。

(私は、これからどうすればいいの?)

この時点で園子の不安は広まる

これからまだいろんなことで辛さを植え付けられると知らないで……

part - 2 / 4 3 広がりすぎた全然まとまらない思い（後書き）

更新遅れて申し訳ないです

話がうまくまとまらなくて更新しませんでした

前置きがかなり長いですが多分次の話で前置き終了だと思います
これから頑張ります

評価欄凍結状態で申し訳ないです

今、忙しくて評価欄を開ける余裕もないです

なるべく早く執筆頑張りますので見捨てないいたら幸いです

part - 2 / 4 4 遙か先に残された真実に向かって…（前書き）

えつと前向きはこれで最後です
まあ博士んちにいます

part - 2 / 4 4 遙か先に残された真実に向かって…

蘭の張り詰めたような表情

哀ちゃんの堕ちたような表情

みんなそれぞれ悲しみを抱いている

なぜかいつの間にかこんなにも不安が増している

ねえ…、なぜみんな悲しそうにしているの？

なぜ落ち込んでいるの？

いつものみんなとは全然雰囲気そのものが違う

なぜみんなは、私だけ置いていくの？

なんでみんなはこうも変わり果てたの・・・？

私だけ何も変わらないまま・・・

この頃蘭の様子には、十分違和感を感じていた・・・

蘭の普段の様子が変だとは感じていた

けどあんなに追い込まれるような怖い表情をするほど蘭が変わり果てていたとは気付かなかった

そして、悠衣がこの帝丹高校に転校してからも蘭の雰囲気はさらに冷たくなった。

いつもの優しい蘭はもうどこかに消えてしまったみたい・・・

親友の私と“一緒に行動した”ときの蘭はきれいさっぱりいなくなってしまった

悠衣から漂う雰囲気も冷たく感じる。

そして、哀ちゃんも前よりも落ち込んでいる。

なぜ私の周りのみんながこんなに悲しみを味わっているの・・・？
一体何が原因で悲劇が遭っているの・・・？
私には、わからないよ……。

園子はいろんな事柄が重なって何がなんだかこんがらがっている。
今、みんなが自分と離れてしまった気がして心細い……

自分よりも10才も年下の少年探偵団の3人も何でもわかってる
ようでなんだか遠くに置いていかれたような気がする
今の自分は“孤独感”を感じる。

不安がだんだん広がっていく……
今がもう何がなんだかわからない……

「なんで園子ねえさんまで落ち込んでいるの……？
蘭ねえさんのことで落ち込んでいるんでしょ？
落ち込まないでよ……。」

歩美は必死になって落ち込む園子をなだめる。
そのあとすぐに園子がぼそっとつぶやく。

「信じたくないの……
哀ちゃん、地下室にこもってしまった原因は蘭にあるかもしれな
いんだから……」
声は次第にか細くなる

「そんなわけじゃないの・・・

蘭ねえさんが哀ちゃんを悲しませたりするわけじゃない・・・
だって、蘭ねえさんは優しいんだよ

優しい蘭ねえさんは人を悲しませたりしないよ・・・。」

やや苦笑いっぽく次から次へと言葉を発する。

園子は一旦深呼吸してから言いたくない言葉をいう準備をした。

「2日前蘭が博士んちに訪れたとき、蘭は張り詰めたような表情をしていた

もうすべての覚悟を決めたような表情をしていた

博士んちの窓を睨みつけながら上を見上げていたわ・・・。

ひょっとして2日前、哀ちゃんに“何か”を告げなければならなかったから博士んちに來たんじゃないのかと思うんだ。

いや、最初から“何か”を告げるつもりだったのかもしれない。

だって2、3日前ぐらいから哀ちゃんの様子がおかしいのならちょうど2日前に博士んちに行った蘭が、何か辛いことでも告げて來た
としか考えようがないんだ…。

博士、蘭は哀ちゃんのいる地下室にでも行つたの？」

「ああ、多分毛利君に新作ゲームをやらせている間に蘭君と哀君は地下室で会話していたと思うんじゃないかか……

何を話していたかは知らんのじゃ…。」

「じゃあ蘭ねえさんは哀ちゃんに辛い言葉を言つたの？」

「博士の証言からして九十パーセント辛いことを言っただけじゃないかなあ…と思うんだ！」

何を告げたのかはわからないけど……

でもこれだけは、わかるんだ！

蘭は哀ちゃんに“何か”を告げたときにどれだけ心底で辛い思いをしていたのか……

きっと測りきれないくらい心の中は重ぐるしかつたんだと思うんだ。

心の奥底でかなり葛藤が続いていたけどこれを言い切るしかないと決めて心を痛めながらうち明けたんじゃないかと思うんだ。

だって……本当の蘭は人を気づかういや、人のことも自分のことのように必死になるようなお人好しだもの。

人を傷つけることを簡単に言えるわけじゃない……

小学生のころから蘭を見ていたけど蘭は平気で傷つけることをいったりしなかったわ…。

いや、いわなかったわ……。

きっと蘭の中で辛いことをいわなければならぬ理由わけや告げるとき
の苦しみとかあったと思うよ…。

蘭は本当に哀ちゃんを傷つけるつもりってわけではないと思うの
それだけはわかってほしいの…。」

疑惑を抱きながらも蘭を気づかう
必死になりすぎて声のトーンがやや高くなる

「蘭が哀ちゃんが傷つけていたなんて単なる推測だけど……
- - -でも哀ちゃんの様子に異変を感じた日と蘭が博士んちに行っ
た日が見事に一致するのよ…。

しかも博士のいうとおり2日前哀ちゃんと蘭が地下室にいたとい
うのならこんな偶然なことはないわ…。

多分そのときに蘭が哀ちゃんに“何か”を告げたのかもしれない・

・

わかることは、蘭と哀ちゃんの間に関係が深い溝があるってこと…
そして、関係性が0ではないこと
現時点で言えることはそれだけよ…。

これからさらに2人の間に溝が深まるかもしれない
今、私たちには2人のことをどうにかできる力があるってわけじゃ
あないわ

でもこの先もしものことがあったらのために一応知っておいてほし
いの…。

それに2人のほかに新しく転校して来た悠衣だって“何か”辛い
ことを隠しているのかもしれないのよ…

・・・そう、私たちの周りにはまだまだ妙な事が起こっているのよ。それとともにみんなも変わっていつているのよ…。

まだ蘭や哀ちゃんたちに何かがあるような気がする。

私たちはとりあえず見守るだけ見守ろう

みんなもその痛い気持ちに一番気づいているのは自分なんだから・
・

少年探偵団のみんなを説得するように一つ一つの言葉をかける

これは新たな始まりだと告げるかのように……

新しい幕開けと同時に今までの明るい園子とは違う気づかう新しい園子を立ちはだかつている

外では、風の妙な音を周りへと響かせる

それは嵐の前兆を表すメッセ・ジ

・・・そう隠されていた私たちの歴史が解き明かされるときがきた。ここからは大きな境界線が分けられている

私は遠くからしか蘭たちのことを見守ることしかできないがみんなのことを必ず信じ抜く
そう境界線を超えた先には、絶望の闇ではなく希望だけの光が来ると信じる

・・・残された事を解決するまで

part - 2 / 4 4 遙か先に残された真実に向かって…（後書き）

えっと心理描写がやたらとくどいような気がしますね…

セリフがやたらと長い

最後辺りめっちゃめっちゃ強引

ケチ付けどころ満載でした

part - 2 / 4 5 始まりの前に残された事（前書き）

かなり焦つての執筆です
すいません

どーも、しょうもないネタを書いているとえらい変わり者の（おかしい）作者です

やつのことでわけがわからん前置き？？が終了しました

ハア……………

言葉が思いどおりに出なくてかなりもどかしいですよ…

言いたいネタがどっさりあって話もいろんな意味でぐちゃぐちゃになってしまいました

最初にこの話を読んで多くの方が『何書いているの？？？』と思われると思います

っていう作者自身、『何書いているんだろウ؟؟？』って感じでした。

かなーり矛盾点があつていや、ありすぎてどうするのか大変ですね…。

しかも作者の気分で勝手にキャラを増やしたりしてなんかいい加減な気がします。

しかも“オリキャラまで出してこいつ、何考えているのやら……………”と思われた方もいたでしょう。

続編の前もそうだけど作者の勝手なイメージで作られた話がほとんどです

ハア…………… 本当に申し訳ございません。（――）。

アホの作者がイメージで書いて作られた小説だからきつといい加減なんですよ。

作者の一人がたりをやたらと目立ちますね…。

本当はもっと自然な感じで書きたいのに自分の文章力で上手く表現ができないもん何です

どえらい長い（一応）前置きを読んでくださって本当に感謝していますm（――）m

じれったい前置きからやつのことで解放されて次はいよいよ《part-1》でも残りっぱなしの疑問点【《part-2》のさまざまな疑惑について】の本題に入ります。

ちよつとは、気が楽になりました

と、いつてもまだ考えていないところもありますけどね……。

矛盾点をざっくりとまとめるのはめちゃくちゃムズイけど頑張ってみます

駄文作家の見苦しい話はここで置いておきます

さてと、今までの復習と残された謎について説明します

【下のとおりのことです】

←←←←←←←←←←

* 蘭の本当の気持ち

（蘭の本当の気持ちって一体何なんだろうか……きつと何かが辛さがあるんだろうね…。）

* 組織とは……

蘭があの方である歴史は前の黒の組織に係るのかもしれませんがね…。

* 蘭があの方である理由

実は続編の前の話でまたしても勝手なイメージ???で考えられたのベルモットの影響で蘭は組織のあの方になった……?というかなー……り強引なネタの謎についてなども説明します

* 蘭が蘇らせた大切な人について

↑ またわけわからんネタだあ - - - -

大切な人がピスコっちゅーいい加減なネタです↑（申し訳ございません）

しかももしかもピスコが博士の兄だなんて設定明確じゃないし……

……

年はでえーら離れているなあ…ハア。

本当にわけわからんネタ&設定に関して申し訳ございません↑くどい

* 転校生、金森悠衣について

一応何かを匂わせているキャラです

作者の文章力では何か怪しい雰囲気は出せませんが……

* 蘭が望んでいるシルバープレートを上回る無敵な力

これは一体なんだろうか？一応考えてあるけど設定がいい加減すぎるような気がする

* あと、コナンに銃撃した怪しい影の人物

- - - っても作者の文章力じゃ上手く表現できないかもしれない・

・

* いろんな人から見た蘭&コナンについてです

まあこんなところです

いい加減な設定&駄文小説ですがこれからも読んでいただければ幸いです

part - 2 / 4 6 人物紹介（前書き）

人物紹介かなり省略しました
一応書きました

part - 2 / 4 6 人物紹介

えつと引き続き人物紹介でもします

どうにもわかりにくいもんで^|^;

なかなか本題にはいれなくて申し訳ございませんm(_ _) m

←←←←←←←←←←(下のとおりです)

■江戸川コナン：今とりあえず組織のメンバーを倒し、あの方(組織のボス)のところまでたどり着いた。

そして、今までの推理(とりあえずその推理はカット)により蘭が組織のボスだと判明した。

そこで蘭〃あの方だとわかった。

とりあえず蘭と一度戦って? ? まだ決着はつかないまま

それから蘭のことを信じて蘭にたいする手がかりを見つける組ために織のアジトに潜り込んだりしてなんやかんやとあった

そしていまだに蘭のことを一応信じているんなことを調べたりんやかんやしている

蘭が組織のボスっていうことに対してはそれなりに気になっている。

ちなみにベルモットにシルバークロートって呼ばれている

■毛利蘭：一応勝手にこの話の中ではコナン(新一)にとって宿敵にあたる組織のボス

一度コナン(新一)と戦った

ちよつとだけ我を忘れコナンを殺そうとしたときもある

でも、そのことに対して悔やんでいることもある

- - - 完全な悪ではないとコナンも思っている??? ?

いろんな人に迷惑をかけたためちやくちや罪悪感を感じている

罪悪感を自分自身で背負いながら一応毎日を過ごす

自分の犯した罪に日々悩む。

そして、その自分の罪に悩みまくって感情が面に出てしまう

そのせいで親友の園子も

『蘭に何かあるんじゃないか・・・』と疑惑を抱く

そして蘭の様子の異変には小五郎のおっちゃんも感づいている

そして心清き灰原の姉の明美さんとすべてに関して重ね合わせてみ
られていることに対して蘭は辛さを感じる

（本当は自分は残酷な組織の一員なのに…心の清い人と同じように
思われているなんて）と悔やむ

そして、その真実を知らない灰原に『私はあなたの裏切った組織の
ボスにあたる』などの一言を告げた・・・。

そして今は自分が告げた“その言葉”によってさらに灰原が傷つい
てしまったことに対して罪悪感を感じる

今、かなりその件に関しては悩んでいる

■灰原哀：元黒の組織のメンバー

お姉さん（明美さん）も組織の末端として所属していた

今は、組織のアジトから逃げて裏切った。

（以下省略）

蘭のことを自分の姉のように重ね合わせている

蘭「心が清い真っ白だと思っている

（もちろん姉宮野明美に関しても心が真っ白だと思っている）

そのお姉ちゃんと重なり合っていねえ蘭は嘘偽りなく本当に心が真
っ白だと思っている

それで蘭が組織のあの方だという事実を蘭自身から聞かされたとき
ものすごくショックを受けた

・・・そしてそのことについて2日間引きずっている

客観的に様子に違和感を抱かれている

■ 少年探偵団：最近の灰原の様子を疑っている
特に光彦がやたらとあらゆる点で疑っている

■ 小五郎＆園子：蘭の様子に違和感を抱いている
見た目より結構深く考えている

園子に関しては悠衣についても考えている
みんなと距離が離れていることを感じている
小五郎に関してはいつもの数倍なんでも知ったような雰囲気漂
わせる

■ 金森悠衣：蘭の高校にとつぜん転校してきた茶髪の三つ編み美少
女転校生

最初に蘭に話しかけてきた悠衣は蘭と仲良くなった
あと園子とも仲良くなった。
いつも怪しい雰囲気漂わせ意味深な発言をする
何かありそうな???人物の一人

■ 毛利探偵事務所を狙った謎の人物：名前はまだ伏せておく
目的不明……

一人だけコナンを狙っている

まだまだ何かある人物

とりあえずまだあるけど今はこの辺で人物紹介終わらせます

part - 2 / 47

始まりのとき、終わりが見えてくる???ときがきた(前書

前置き一応終わりました
本題に入るつもりです

- - - 今まで数々の事件や苦悩があった。

その中には、今のこの状況を大きく変えたりもした。

その中でも最も大きな真実は、組織の“あの方”は蘭だということ

…。

その真実を受け止めるのはどれだけ辛いことがそれは、みんな同じ…。

あの方であるさまざまな行動や言動を起こすで人々には大きく影響している。

完全に“あの方”になりきった蘭を客観的に見る人々は、深く考え込んでしまう・・・

蘭の異様な行動ばかりが目には焼き付く。

蘭の影響で灰原や園子まで変わり果ててしまった。

最近是小五郎もさらに鋭くなってしまった。

灰原まで客観的に様子に異変が見られるようになってしまった……。

少年探偵団のみんなも気にかけている

- - - 前よりも悲しみを植え付けられた灰原

その悲しみはすべて溢れ出しそうになる。

嫌でも心の奥底に隠れている感情が表にでてしまう。

そのせいで周りにいる少年探偵団も“情け”をしてしまう

日々経つことにみんなの明るさがどこかへ消えていく

それに悠衣が帝丹高校に転校してからは蘭の様子に閉じてますます異変を感じる。

悠衣が転校してきたことで周りの雰囲気も一気に変わった。

なにやら怪しいオーラをみんなに引き寄せる

持ち前の愛くるしい表情を表に出して裏では妙な雰囲気ばかりを漂わせる

重苦しい環境にすっかり入り込んでしまった蘭は悠衣のように異様な行為をおこなうようになってしまった・・・

蘭自身自分の犯した行為や悠衣の行動や意味深な言動にも違和感を感じている

ただど分かっているても自分自身を“本当の自分”には戻せないいや、戻したいという気持ちは多少あってもうまいこと“本当の自分”に戻れない

自分をうまく“コントロール”できないもどかしさ関しても苦悩したときもあった。

心の奥底で激しく葛藤が繰り返されるだけ……

帝丹高校所属の二年生の毛利蘭として普通に日々を過ごす自分と黒の組織という日本最大の組織のボスとして影で密かに行動する自分。光と闇のようなが存在することに対して不思議に思う

・・・本当の自分はどつちなのか・・・？

最近の自分に対して違和感を感じるから“本当の自分”が余計にわからなくなる

このままどっちの道を歩むべなのきか迷ってしまう・・・

日々悩まされながら生活することもそれで苦しいし辛い

早くどちらかの道を選んで植え付けられた苦しみから解放されたい早く何も辛いことない平和な日々を取り戻したい

でも『普通の高校生として日々を過ごす道』と『このままコナンを最終決戦でもむかえる』のかどっちを選択するかこれでこれからのすべてが決まってしまう・・・

それに“コナン（新一）と最終決戦をむかえる”っていう選択を選んだからもう後戻りはできない

“普通に日々を過ごす道”を選べば今まで苦労して哀ちゃんに自分の真実（蘭があの方だということ）をいった意味はなかった

・・・つまりその時間は無駄になったまま終わってしまうことになる

あれほど心を痛めたのにその時間が無駄になったら意味がない

・・・時間はもう取り返せない・・・

このまま時間がどう過ぎたって最終決戦は近づいてきているもう逃げられない

時間が経つことをいくら惜しんでもみんなの“何事もなく平和にしたい”という願望を無視して時は少しずつ刻んでいく

時計の途切れたようなむなしい音が聞こえてくるたび“最終決戦はもう目の前に準備されている”と思い涙が溢れそうなほど悲しくなる自分の言動と行動が矛盾していることに余計に苛立つ。

思うがままに感情だけが溢れ出っていて暴走してしまう

2日前に戻りたくても戻れない

時間が経つにつれて焦りも多くなる

今みんなの前で表している自分を保つことに苦難する。

なぜ、時間ときは今現在こうしている間に刻んでいくのだろうか・・・？
なぜ、時間ときには逆らえない流れがあるのだろうか・・・？

この今現在のときを止めたい

こんな苦しみに植え付けられた今を消し去りたい
現実逃避をしてしまう

少しずつ堕ちていく・・・

「蘭！！蘭ーん！！」

えっ……何・・・？園……子……
えっ、一体どうなっているの？

蘭は周りを見渡してみた

「まったくどうしたのよ・・・？
なんだか様子がおかしいよ。」

気づけばさつき博士の家へ行った園子が私の隣りにいた。
影を潜めている悠衣を妙な笑みを浮かばせながら私の反対側の隣りにいる

「別に何もないよ。ちょっと考えことをしていたのよ。」

「それって本当なの？
蘭ねえちゃん……………」

子供っぽい口調で尋ねる偽りの少年もいた
気づけばコナンも目の前に密かに現れた

あまりにも“本当の自分”（工藤新一）とはまったく違いすぎる口

調に違和感がある

その裏には何かを相手を追い詰める言葉を誘っているような感じがして恐ろしい

「蘭ねえちゃん、こっちこっち・・・」

コナンは蘭だけに向かって手招きをする

またしても普段と比べてと差が激しい子供っぽい口調で……

蘭は自分の行動が不自然にならないように慎重にコナンの行ったとおりに進む。

「何・・・？新一・・・」

小声でぼそっとつぶやく

「なあ…例の転校生って蘭や園子と一緒にいるあの女か・・・？

あの人が例の“金森悠衣”なのか・・・？」

コナンは蘭より小声で話しかける。

「うん……そうだけど・・・」

コナンは蘭の言葉を聞いて確認してから悠衣を睨みつけるように見る相手に気づかれぬように慎重に睨みつける。

「新一・・・！！新一・・・！！」

蘭がやや大きな声を出す

それでも一応園子と悠衣には聞こえない程度の声を出す。

「ああ、悪い…

ちよっと引つかかっている部分があつてどうにも違和感を感じるんだ。」

「えっ、何なの？」

引つかかっている部分って……」

「いや、“金森悠衣”なんか見覚えがあるような気がするんだ。どっかで見たことがあるような気がするんだ。」

しかも一昨日に現れた影に潜む怪しいヤツとは違うような気がする・

「昨日の銃撃したヤツとは全然違う空気が漂ってくるんだ。あれほどまで冷たい空気は張っていねえみたいだ。」

「私も悠衣には見覚えがあるのよ。」

でも一体何者なのかわからないわ……」

蘭は微妙にうつむく

風は吹いてくる

その風はただの風ではない

嵐を引き起こすような強い音を響かせる大嵐
雨が降りそうな天候へと変化している

雷がこの地におりてきそう

雲の色が曇ったような色に変色していく

蘭は後ろを振り向いて厳しい表情で何度も悠衣を見る。

そして発する怪しい雰囲気気づく。

……すぐに前を向いて疑惑が深まったかのような顔になる。

そして、蘭は、何かを確信したという自信満々が表情を浮かべた

part - 2 / 47 始まりのとき、終わりが見えてくる???ときがきた(後書

ちよつと大変でした

文章に関しては下手です

ごめんなさい

書きたいことが上手く書けません

感想お願いします

part - 2 / 4 8 悠衣の違和感（前書き）

えつとだいたい悠衣についてです

part - 2 / 48 悠衣の違和感

よくわからないけど悠衣には見覚えがある

どうして見覚えがあるんだろう・・・

なんで悠衣の行動や言動を見ていると不信感を抱いてしまうんだろう・・・

悠衣と日々を過ごせば過ごすほど余計に怪しい感じる

これは気のせいなんかじゃない・・・

たしかに悠衣は転校してきたときから怪しい雰囲気を漂わせていた
いやな空気がじわつと染みる。

雲がさらに曇った状態へと変化する

今の気分は曇った状態に変わり果てた雲と一緒に

少々気分が堕ちている

「あのさ、園子・・・・・・・・」

「えっ、何・・・？」

「ゆ、悠・・・・・・・・（悠衣について何か知っている？

園子は悠衣に見覚えはある？）」

蘭のいいたいことが言葉と心の中ではうまくかみ合わない。

本当のいいたいことがいえず戸惑ってしまう

“このこと（悠衣について見覚えがあるかどうか）をいうときに目

の前で妙な笑みを浮かばせる悠衣に圧倒してついつい口ずさんでしまふ

「えっ・・・・・・・・・・・・・・・・」

蘭、今何っていったの・・・・？

何を言いかけたの・・・・？」

蘭の様子一つ一つに不信感を抱く園子は蘭の言いかけたちよつとの言葉に期待をする

内心は、蘭がボ口を出すかもしれないと思ってドキドキの緊張になる園子は蘭の心の中に深い何かを隠していることに気付く。

あまりの緊張で鼓動は高まる

蘭が言葉を発するその瞬間を楽しみに待つ

「なんでもないわ。」

蘭は微妙に笑いながらちよつとした一言をつぶやいた

その答は期待していなかった。^{こたえ}

せつかくドキドキしていた心が一気に堕ちた。

あれほどまで次の言葉を楽しみにしていたのに答はかえってこなかった。^{こたえ}

もはや答を深く考える必要はなかった。^{こたえ}

自分が感情を込めた言葉に対して単純な答がかえってきてがっかりのほかにもさびしさを感じた

ハア…とため息をつきたいところだけどこんなみんながいる場所のため息などついたら不自然になってしまふという心理が働いて息をつくことさえも拒んでしまふ

みんなに対して疑惑を抱きすぎて不自然な様子が外に出さないように歯を食いしばり慎重に“次の言葉”へと問いかける準備をする

「あのさ、蘭・・・・・・・・」

「ねえ…、園子・・・あの子たちは・・・ほら、少年探偵団の3人は・・・？」

園子の声より大きい蘭の声のせいで次へ続く言葉が遮られてしまった蘭に次へ続く言葉などまったく聞こえていない

コナンだけは園子が“何か”を言い出そうとしている行為がわかっていた。

コナンはこの瞬間に悠衣から蘭に疑惑を抱いてしまったかのような眼で見る。

蘭はひよっとして園子の言葉から恐れを感じてわざと“言葉”を遮ったのだろうか・・・

そういう心理だけが頭の中で働く。

コナンは会話に入り込まずにただ気まずそうな2人を見ている

「少年探偵団のあの子たちなら博士んちで博士が開発した新作ゲームでもやっているよ。」

とても楽しそうに遊んでいるからそのままにしておいたんだ。」

「ふーん・・・・・・・・」

何気なく話しに合わせてうなずく蘭

園子は自分のいいなかった“言葉”をあっけなく遮られたことにさるなる違和感を抱く。

交わした言葉を遮られることに都合が悪いことでもあるのかと思いきや疑惑は一曲線超えて深まる。

一見普通の会話を交わしているだけの光景だけどその“会話の中”を良く探ればさらに険悪な雰囲気を漂う。

その険悪な雰囲気を知るのは普通では無理

でもコナンと悠衣は雰囲気の異変にすんなりと気付く。

言葉を出さず黙ってままで睨みつけるように会話の見続ける。

そのときの表情はまるで怪しい容疑者の様子に注目して深い疑惑を抱くときと同じ

――さらに深まる険悪なムードに入り込むことなど無理

でもコナンはその雰囲気に慣れてしまったかのように横に入る。

空気をよんでいたがこれ以上重々しくしたくないという考えが頭によぎり、すかさず横に入って子供らしさをあらわすために笑った

「ねえ……蘭ねえちゃん、園子ねえちゃんあの人は誰なの……？」

すかさず悠衣の方に指を指して何も知らないような振りをする
そして偽りのいつもの子供っぽい口調でつぶやいた。

――険悪な雰囲気を壊すかのためにわざと自分に強く印象を与えた

悠衣の“何か”を不審そうに見る眼にさらに厳しさが増した。

風に吹かれる彼女はこっそりと自分の存在を怪しく見せる

コナンに自分が“怪しまれていること”は気づいていたがひたすら
余裕の笑みを浮かばせる

――みんなのことも“すべて知り尽くしている”という態度で遠く軽く睨みつけるように見る。

コナンは悠衣の行動を気にしながら蘭と園子の会話の中にとけ込む

ふりをする。

“両方のこと”を意識して一瞬一瞬まったく違う顔をする。

「あの人って…、悠衣のこと…？」

悠衣の痛い視線を感じていた園子がやや小さな声でぼそつという。そのやつといえた一言をいったあと、また悠衣から“痛い視線”が発されていないのかと心配になる

一言一言に何かいうのにかなり戸惑う。

悠衣の近くで話すのは釘が刺されるようは気がして重苦しさを感ずる。平静な状態を保てない今のこの状況に非常に苦難になる。

「うん、あの人って誰なの…？」

一応外見だけでも何も知らないふりをする。

そして、悠衣のことをまったく知らないように口調で話す。

「あの子は昨日転校してきた“金森悠衣”って子よ。昨日コナン君にいった転校生が悠衣なのよ。」

蘭は園子に気付かれないようにうまく話を誤魔化する

「悠衣、このガキンちょがあんたのことをしりたがっていたよ。」

悠衣はハッと目覚めたように視線を前に向ける。

「ふーん……………」

園子の発言にずいぶんと興味深くうなづく。

その言葉の裏にはコナンを軽く笑っているもととられる。

楽しそうにコナンの方に近づく。

コナンは不適な笑みを見せる彼女に対して感情を少し出して睨み返

す。

「あなた、どこかで見たことあるわね……。」

「……………」

悠衣はさらにコナンに対してクスツと笑う

コナンは初対面なのに“自分を知っている”ような発言に驚く

小学生に対して感情を込めて“見たことあるわね”って発言をいったことに驚く。

悠衣のコナンを見る態度は“小学一年生”として見ている眼ではなかった

――まるで自分と対等な感じで見ていた。

それは、問われたコナンが一番痛いほどわかっている

下手すると自分の正体が“工藤新一”だということも知っているかもしれない……

悠衣の言動が何か自分に罨を張っているような気がする。
下手なことは言えないと身に染みて感じる。

「えっ、ちよつと待って……」

ボクは見覚えがないけど……。」

相変わらずの子供口調でとりあえずは誤魔化そうとする。

しかしそのときも不自然に言葉が途切れている

自分の正体はわかっているかもしれないこの状況では驚きが隠せない

またコナンに対してクスツと笑う。

悠衣のちよつとした笑いで周りの空気が一気に重くなる
それと同時に突風が包むように吹きわたる
雷雨になりそうな天候へと変わり果てていく
悠衣は突風に吹かれながらも取り乱さずに冷静を装う。

風が吹きわたったあとは、一瞬だけ沈黙になる

「えっ、今度はなんなの？」

突然の言葉に沈黙は一気に崩れた。

園子は周りの状況の激しい変化にあたふたする

・・・そしてその空気の重さを感じる。

コナンと蘭には悠衣の険悪なオーラがひしひしと伝わっていく
彼女に意味深すぎる発言に余計に気が引き締まる

完全マークして次の悠衣の発言に注目する。

「もう無駄話は止めて帰りましょ……………。でもその前に……」
“その前に……” この次に続く言葉は何なのかまばたきもせず集中し
て聞こうとする

3秒ぐらいの間を開けて悠衣はコナンに集中的に視線をやる

「コナン君にあとでもう一度この場所に来てほしいの……」。

ちょっと話したいことがあるの…
いいかしら・・・。

ねえ、Cool gey・・・？
「

風の中悠衣は何でも知り尽くしたような雰囲気漂わせて一言一言
を告げた

part - 2 / 48 悠衣の違和感（後書き）

展開が早いような気がします
まあ、なんとか書きました
本題も難しいもんですね…
うまくはいれるか心配です

part - 2 / 49 変化する美少女（前書き）

えつと悠衣についての語りです

不敵な笑みを交わす悠衣

なんのためにわざわざ怪しい感じを匂わせるかはわからない

――しかしその裏には重大な何かが隠されている

なんでも知ってそうな彼女にたいして今、このときという言葉は一つもない。

いいたい言葉がまったく表に出てこない

いいたい言葉は威圧感のせいで封じられてしまう……………

蘭と園子は悠衣の“重々しい発言”に注目する

彼女はまた“意味深な発言”を告げた。

――なぜ、日々時を経ていくことと同時に悠衣に異変を感じるのだろうか……………？

余計に悠衣が謎めいて見える

――その言動すべてが限らない怪しさを匂わせる

これから悠衣のところへ（待ち合わせ場所）に行くのか……………？

それとも今悠衣が告げた発言を無視するのか……………？

どちらにすればいいのだろうか……………

――どちらを選べば正解なんだろうか……………

正しいと思える答はどっちなんだろうか……………？

コナンの中で密かに葛藤が繰り返される

待ち合わせ場所に待ち伏せして罠にでもかけるのかもしれない
待ち合わせ場所では悠衣の罠が仕掛けてあるのかもしれない

――しかし待ち合わせ場所に行かなければ悠衣のいいたいこと・
伝えたいことがわからない

たとえ異だとしても何か“重要な真実”が隠されているかもしれない
それに彼女が最後にボソツとつぶやいた言葉に恐ろしいほどの違和
感を感じる。

最後の言葉が一番印象強く深いほど記憶に残る
頭の中では、印象深くて引つかかる

釘をグサツと刺されるように痛い言葉には予想はしなかった。

『Cool gel・・・?』

見た目小学一年生にしか見えないコナンを前にして云う発言とは思
えない

たしかに小学一年生にしては、あの頭脳は絶対に有り得ない
頭腦的という小学生とは普通に思えない

――行動範囲でいうと同じことがいえる

あれほどまで拳動不審な小学一年生も普通はいないと思う

誰がどうみても違和感を感じるだろう・・・

おかしいと思うだろう・・・

『本当に小学生なのか??』と疑いたい気持ちも分からなくはない

――分かっている

それ（小学生らしくない）は、自分が一番自覚していることだから・
・

だからといって彼女の態度が何もかも“すべて”を分かっているような気がして思わず躊躇って（ためらって）しまう

自分の行動が小学生にしてはあまりにもかけ離れているからなんとなく怪しまれる可能性も高い

単純にコナンに『College・・・？』だなんて言葉をいう理^{わけ}由は“そこ”にある

でもこの言葉に関しては深く考えて込んでしまう・・・。

とりあえず今、この場だけでも逃れたい…。

この重苦しい空気はともじやないけど耐えれない

いったんこの場から探偵事務所に“帰りたい”って気持ちでいっぱいになる

ー ー ー なんとかこの重苦しい場から去りたい

彼女が蘭や園子の前でこれ以上意味深な発言をされると2人からの視線が痛くてしょうがない

それに蘭たちに何か追及されるのも堪らないから……………

なんとかごまかしてこの場を去る方法はないだろうかと思い周りを見渡す。

辺りは雷雨がちかづいて曇った天候
いつ雷がおとされるのかわからない

この瞬間コナンの頭の中には“雷が鳴りそう”だともいっておいて

ごまかし“帰ろう”といって帰るっていう計算がたてられていた
コナンは、さっそく“雷がなりそう”っていうことをいおうとした。
まだ痛々しい視線を感じる。

再度自分が怪しまれていないかの確認をとって慎重に2人に話しかける準備をした。

――うまいこと怪しまれない方法が思いつかない
怪しまれないような口調になるように一呼吸を整える。

「あ、あのさ蘭ねえちゃん、園子ねえちゃん……。」
かすかに途切れの入った声
少し迷いがあるような声になっている

「何……？コナン君……。」
いつもの面に表れている蘭の優しい声
まさかこの声の主が冷酷な黒と云われる組織のボスだとは想像もつかないだろう……

「あのさ、雷がなりそうで雨が降るかもしれないからもう家に帰ろう！―」
無邪気な子供みたいな口調になる
それはちよつと不自然な感じがする。

苦笑いにしかなくていない不自然な言葉

なんとか蘭や園子にはこのあとの話を聞かれない
悠衣の存在のせいで痛い視線を浴びるのは嫌だから……

この周りで集団を作っている蘭たちはここからたった一歩踏み出す

ことを躊躇う（ためらう）。

一歩踏み出せばここから何が起るのかわからないから・・・
ほんの一歩踏み出すだけでも“何か”が変化するような気がする

――悠衣の言動や行動に関しては慎重に図らなければならない
一つでも見逃してしまうと“何かの仕草”を見逃してしまうかもしれない

本当は何も起きていない今のこの現象ですら“何か”を意味する重要な“キーワード”が隠されているのかもしれない
その“キーワード”は悠衣に関する手がかりが残されているともいえる

気づかない今、悠衣の真意が表れているのかもしれない

――一歩踏み出すこと

それは、少しずつ次の道へと歩むこと

ここで一歩歩み始めるとそこで何か変動が起こってしまうかもしれない
ない

たかだか下校の帰りに適当な会話を交わし、そのまま家へ直行で帰るにしろそのときに“何か”が変化している・・・

今のほんのちよつとの時間でも悠衣が少しずつ変わっている可能性も充分ある

――例えばどんな些細な仕草でも変化は伴っているはず

彼女にとって微妙な距離感を感じるこの環境に入り込んだ今、何の変化もないのは有り得ない

日々の積み重ねでますます悠衣は怪しい雰囲気を匂わす

昨日よりも今日の方が何かがあると匂わしている

――悠衣の変化の正体を知ってみたい――

そう思うと足が先の道へと歩むことを拒む

悠衣に関してまた新たな変化を伴うことで余計に焦りだしてしまう

一つ一つの行動に着目しすぎてすべての行動を見逃せなくなるこの状況

――たった一歩歩み出すことで“何か”を見逃してしまう気がする。

ついつい足が無意識のうちにすくんでしまう

「ねえ、蘭ねえちゃん、園子ねえちゃん……どうしたの……？」

「――――」。

「――――」。

蘭と園子両者同時に無邪気な声にたいして異様な反応をする

まばたきもせず慎重に重要な点を見つけようとしているときに声をかけられて気持ちが一気に不安定になる。

こんな張りつめた状態で“声”などかけてほしくなかった。

ただでさえ誰かに声などかけられたくないのにいかにもウソっぽい

子供の声で話しかけられたくない
そんな偽りっぽい声を聞くことは、辛い
周りの空気はさらに冷たさを増す

「ねえ、蘭ーとりあえずここはやっぱりに先に家に帰ろー！」
園子は、少々苦笑いを入れながら話しかける。

「うん、じゃあ帰ろうー！園子」
園子と会話しながらもコナンと悠衣から目を離さない
一曲線超えた怒りに近い瞳で2人を見る。

（悠衣、一体あなた新一に何をいうつもりなの・・・？
ひよっとしたら悠衣も新一の存在を知っているかもしれないわね・・・

悠衣、あなたまさか………………。)
蘭の疑惑が深まる。
蘭は厳しい瞳で何かを考え出す。

「蘭、どうしたの・・・？早くしないと行くわよ。」
何気ないように蘭に声をかける。

「――蘭や悠衣にたいする疑惑を抱いていることを面に出さないようにしている
そして普通の下校らしく適当に会話を交わして誤魔化す

園子の他に蘭も密かに気になっていた。

“悠衣がコナンにどんなことを告げるのだろうか・・・”

コナンが例の待ち合わせ場所へ行くことを少し楽しみに待っていた。

――悠衣について知るためにこのままついていこうかどうかと悩んでしまう。

コナンに告げなければならぬこと、そして悠衣の意味深な一言2人は“それ”について注目を注いだ。

そしてコナンはちょっとした悠衣の言葉に着目して、次なる言葉までに好奇心を抱いた。

part - 2 / 49 変化する美少女（後書き）

悠衣はいいたいことをコナンにまだ告げていないです。

悠衣はますます怪しくなっています

評価お願いします

m ((m

part - 2 / 50 裏の顔（前書き）

裏の顔については話を読んでから…

――次に一体何をいうのだろうか・・・
悠衣のいいたい事がとても気になる。

コナンは早歩きで急いで家まで帰る
ランドセルが投げ捨てるかのように下ろしたあと、すぐに玄関から
飛び出した。

そしてさっきの悠衣との待ち合わせ場所へと向かう

“何かがあるような気がする”

その何かを一秒でも早く知りたい

“早く知りたい”という好奇心が溢れでている

コナンは思い切って待ち合わせ場所まで走る。

――もうすぐ雷雨が降ることすら恐れもしないで・・・

天候はさらに曇り空へと変わった。

周りの景色が暗くて見にくい

いろんな自然がぼやけて見える

――必死に待ち合わせ場所まで走りわたる。

やっとのことで“さっきの場所”に着いた

必死に走ったため息がうまいことできない

途切れ途切れに息が切れる

それと同時に動かしていた両足を動きを止める。

足を止めた瞬間やや下向きになっていたところから前へ向いた。

前へ向いたあと“何か”があるかを確かめるためにじっくりと見た一直線な視線で見えたのは、先に待ち合わせ場所で待っていた謎の美少女悠衣だった。

その謎に包まれた悠衣は、近くに転がってある空き缶を足で止めている

――そして彼女はうつむき加減で適当なところでイスがわりにしてしゃがみこんでいる

空き缶を足に硬直させたままうつむいた状態になっている

コナンはまったく“その場”から動かない彼女の様子に着目してじっくり確かめる。

さっきの不敵な笑みを浮かばせていた彼女とは別人といってもいいほどまったく違う表情

――彼女の雰囲気もさっきとはまったく変わっていた

今までは意味深な発言ばかりして怪しさをおわせていた悠衣――

――このほんのちよつとの時間で変わり果てていた

この瞬間、哀しげな彼女を見て直感した

――これが本当に彼女が見せた素顔なのだと・・・

この謎だらけの彼女の真^{しん}の表情は絶対に目の前で拝むことなどないと思っていた

こんな光景は奇跡っていいだろう

そう、コナンは奇跡に近いっていいほどの“幻の光景”に

驚く

（――あれ…？

金森悠衣は一体どうしたんだ？）

コナンは不思議そうに遠くから彼女を見る。

不思議なのは当然だ

彼女は、謎に包まれたかのような雰囲気を漂わせていたのに急に悲しそうな表情に変わっていたから・・・

コナンは彼女の素顔に注目するために一旦その場で足を止める。

遠くでしゃがみこんでいる悠衣は、泣くことだけをこらえて歯を食いしばる。

みんなの前で余裕で涼しげな表情をしていた彼女がおもいつきり歯を食いしばっている

彼女の“新しい一つ”の偽りなしの顔がここに存在していた。

なかなか足が無意識のうちに動かなくなっている

――それは、彼女の様子があまりにも珍しくて見逃せないから・・・

彼女の素顔を見たことで量りきれないほどの気持ちさがこみあがってくる

息を微妙に止めながらこっそりと悠衣の様子を気にかける

「……………」

言葉では何といたらいいのだろうか・・・

悠衣が“何か”があるような気がする。

この悲しみについて重みを感じる。

彼女の哀れみだ姿を見ていたらもう何もいえない・・・
何かをいう言葉など出てこない

彼女の茶色に染まった髪がうつむいているせいか前へ下りている。
――そのせいか悠衣の顔がはつきりと見えない

眼はしっかりと見えないけれど悲しみを痛いほど溢れ出ていることはわかる。

悠衣は相変わらずうつむいたまま――

近くに転がっている空き缶を蹴っ飛ばすかどうか躊躇う（ためらう）暇つぶしに落ちている空き缶を揺らすように動かす。

彼女には今わからないぐらいの迷いが表れている

「蘭・・・・・・・・・・・・・・・・・・そして、ベルモットはなぜ蘭を・・・・。」
ボソツとか細い声でつぶやく。

このときに悠衣の心の中で何が葛藤していたかはわからないけど、今の“この発言”に何かが関連するのは間違えないだろう

彼女はまだ歯を食いしばってあまり力を入れないで空き缶を蹴る。

微妙にかすったような音が近くに響いたあと、しゃがみこんでいた姿勢から立ち上がった。

そして、コナンのいる方向へ視線を向けた。
悠衣は悲しそうにしている表情を覆い隠す。

一旦落ち着いてからその悲しそうな表情から元の表情へと戻る。
―そして、さっきと同じ雰囲気を漂わせる怪しげな彼女に戻っていた

一歩一歩コナンを誘うようにかすった音を鳴らしながら歩く。

もうすでにコナンが近くにいたことに気がついていた。

コナンも彼女が発する気配を感じていた

彼女の気配を感じてすぐに悠衣の前へと現れた。

「やつと来たのね…!!」

周りに響く大きな声

ちよつと怒ったような口調になる。

彼女の怒りが少し見えていた

「ずいぶん遅れたじゃないのよ……。」

あれから数分経ったのよ……。」

さらに怒った口調へと変わる。

“ずいぶん遅れた” って大げさにその言葉の部分を強調する
なぜそこまで怒るのかはわからない……。

一体彼女は何があるのだろうか……

余計怪しく見えて来た

まだまったくわからない彼女の謎にせまっていくなような気がして緊

張っていた。

何が隠されているのだろうか・・・
彼女は一体何者なんだろうか・・・？

いろんなことが気になってしまう
余計に“好奇心”というものが早く何かに関する手がかりとなる情報を知りたいとドキドキしている

「話って一体なんなんだ・・・？」
今、自分の立場は小学一年生ということを忘れて高校生探偵としての地の口調に変わってしまった。

相変わらず悠衣は苦笑いっぽくクスツと笑った。
風で微妙になびく髪をはらいながら次の言葉をいう準備をしていた。

未知なる言葉を告げるために一呼吸した

「ねえ、江戸川コナン君・・・いいえ、間違えたわ…。工藤新一君・・・
一つ質問するけど蘭がある組織のあの方つまりボスにあたる人だと知っていた？」

（えっ・・・・・・）
コナンはあまりにも意外な質問を問われて正直驚いた。
なんでそんな質問をするのだろうか・・・？
ものすごく疑問に思った。

質問に対しての答をどう受け答えればいいのか？
こたえ

どうすればいいのかわからなくてついつい迷ってしまう

もう意外な質問に対して聞きたくない

“この場”から去りたい

何をいえばいいのだろうか・・・？

――少々戸惑う。

「なぜ、そんなにも驚くかしら・・・」

^{こたえ} 答は2つに一つよ・・・。

蘭が組織のボスだってことを知っているか知っていなかったのか？
どっちなのよ・・・」

そうは、いわれてもなかなか言葉として出てこない。

質問に答えることにたいして少々躊躇う（ためらう）

彼女の答を誘うような口調に何か違和感を感じる。
^{こたえ}

なんていえばいいのだろうか・・・。

どうしても迷いがでてしまう。

彼女にたいして何をいえばいいのか

返答する言葉が見つからない

「そ、その前に、こっちからも質問だ！」

「なによ……。いいなさいよ……。」

この時、悠衣の中では冷静さが欠けていた。

「――何のことがよくわからねえけどなんでそんなに蘭のことについて気にかけるんだ・・・？」

なんでそこまで蘭のことを聞きたがるんだ・・・？

その理由わけの方が知りてえ・・・。」

もちろん、悠衣がいった“蘭が組織のボス”だということは知っているがそれだけはあえて口に出さなかった

しかしもう子供を演じるコナンの姿はなかった

「――――――――――」。

言い返す言葉がなくて黙っている

悠衣は自ら失点が増やしてしまい苛立つてくる。

失点をとことん追求していく彼にたいして敵対心を抱いた。

苛立ちが隠せなくて焦りを見せる悠衣

この瞬間、コナンは彼女に勝ち誇ったような表情へと変わった。

――まだこの時点では悠衣の謎はこれだけではないことを知らなかった

これからさらに謎に迫っていくことをコナンは知らなかった

part - 2 / 50 裏の顔（後書き）

本編に入っただけには謎が全く解けていないですね…

悠衣のキャラも決まっていますがこんなしょうもないオチでいいのかと不安があつてわざと話延ばしていました
すいません

あらゆる点でしょうもないので不安が…

まあ、アホが考えたことは所詮こんなもんですよ…

part - 2 / 5 1 お互いの躊躇い（前書き）

コナンと悠衣の様子についてです

まあ、その割には悠衣のセリフ少ないかも・・・

part - 2 / 51 お互いの躊躇い

ー信じられないほど恐ろしいこの状況

コナンのたった一言に苦難になっている悠衣

あの謎に包まれた彼女がこんなに苦々しい表情になるとは思わなかった

素顔を見せずに不敵な笑みを浮かばせる謎めいた悠衣ではなかった。不思議そうな雰囲気満載な悠衣はそこにはもういなかった・・・。

彼女の素に近い顔をさらけ出してコナンは有頂天気分だった。

少しだけ彼女の化けの顔を剥がしたつもりでいた。

ーそう、コナンはこの状況ですでに自分が悠衣に勝った気でいた。コナンは完全に勝ち誇っていた

これから悠衣の逆襲が倍いや、倍以上にかえってくるとは知らないで・・・。

なにげに辺りを見渡してみた。

周りはさっきよりも暗く感じる

なんだか雷でも鳴りそうな危険な天候

風もいやというほど吹きわたりとても寒い

風に耐えながら今この地に立って“内密な会話”を交わしている
強すぎて風はおさまらない

突風が辺りへと吹きわたり今自分の目の前に存在するものがはつきりと見えない

風のせいでつつい手を顔の前にもっていつてしまう

――未知なる雷は雲にためられている

雲から小さく小刻みに音が聞こえてくる

その音はゴロゴロと鈍い音を鳴り響かせる

天候はとてもダークな状態

嵐でも舞い落ちるような突風の辺りを包む

――しかし嵐のような雰囲気は天候だけではない

今のコナンと悠衣お互いに自分の謎を隠し通そうとしている2人の
今現在の重苦しい状況も嵐が訪れる雰囲気へと変わった。

追い込まれた悠衣は歯を食いしばり苛立つ

痛いところをつかれて（蘭のいろんなことについて気にかける理由

>わけく）何も言い返す言葉がない

どうすればいいのだろうか・・・

何か言い返したいがなんとも言えない

雲が二重に重なりさらに曇ってきた

これからこの地に雨が降り注ぎそう

コナンは空を眺めて天候が怪しくなっていることに気づいた。

かすかに雨の雫が落ちてきていることに気がついた

その微量の雫は目の前で奥深く音をひびかせる

「なあ、雨が降っているからよ……………」

まだ話したいことがあるんなら“オレンち”で話の続きを言ってほ

しいんだ」

コナンは、もはや自分が“江戸川コナン”を演じていることなど忘れて正気になり素の“工藤新一”としての口調で話した。

そして“オレンち”って自ら言った。

もう自分が工藤新一だということを悠衣に認識されていることを自覚している。

さつきわざと“工藤新一”だと名前を出した時点で自分の正体はばれていると確信した

なぜ自分の正体が工藤新一だと知っているかはまだわからないけど
………

――もう彼女には自分のことを完全に知り尽くされている気がする
彼女は、オレのことを何もかも知っているって口調で“一つ一つの言葉”を告げる。

――そう、彼女は魔女同然

そんな彼女の前では工藤新一としての態度をとった。

「いいわよ……………」。

じゃああなたの家で話をしましょうね……。」

悠衣は開き直ったような口調に変わる。

さっきの焦りを見せていた彼女を覆い隠すかのよう……………

平然とした態度へと戻る

雨の雫しずくの量が徐々に増え続けている。

ポタポタと悲しげに音をならしながら地上へ雨は降り注ぐ

嵐の前兆を表すようなさびしげな雫しずくが落ちてくる

「――そして、その雫は今の何があるのかわからないという“戸惑いのある心”を表している

やみあがりそうにない雨

それどころが雨の雫がだんだん大粒へと変わっていく

「このままだと雨が激しくなってきたそうね…」

早くあなたの家へ行った方がいいみたいね…」

特に焦りを見せていない口調でさらりとつぶやく。

そして、何気なく辺りを見渡す

「――ああ、そうだな……」

雨が激しくなっているから走ったほうがいいよなあ……」

相変わらず愛想がない“工藤新一”らしい口調で一言いう。

鈍った雨の音が地面に行き渡る。

2人は小刻みにしながら走り出す。

雨の雫でかすかに濡れた地面を派手にたたくような感じで一直線に走る。

2人は雨の雫が飛び跳ねる“派手な音”など気にせずにひたすら前へ……前へと工藤邸に向かって走る。

――それは一刻も早く未知なる情報を掴み取るため

彼女の妙なあの言動には何か深い意味があるはず

一つ一つの言葉をいうとき、彼女にはとても怪しげな雰囲気漂っている

なぜ、あれほどまで怪しい匂いを感じるのだろうか……？
その謎には奥深い

彼女が“何か”を発言すれば彼女の目的や今までの怪しげな言動の原因が少しでも解る（わかる）ような気がする

彼女の情報がほんの少し入ってきただけで謎に包まれている“何か”を知ることが出来る

――その何かを知ることにはたいして心は揺れ動かされる

いつもの好奇心がさらに興味を湧かせる

自分でも信じられないほど心が動かされる

心が揺れ動く中、自分の家（工藤邸）に向かうコナン

悠衣は、コナンに視線を向ける

雨の雫が飛び跳ねる音など無視してコナンに深い疑念を抱いている
ような視線をおくる。

「……………」

そんなコナンの様子を走りながら見ている悠衣は何も言葉は出てこない

コナンの言動や行動が悠衣にとっては感慨深く残る

工藤邸にやっとのことに着いた。

――ついに彼女の意味深すぎる話の続きが聞ける

“今まで残された何かの謎”にせまっていける気がする

たったそれだけのことでおさえきれない好奇心が増加していく

彼女が何気なくゆっくりとドアを開ける。

ドアがひらくときの妙なかすった音だけが響く。

かすったような音が響いたのはほんのわずか数秒間

いや、一瞬だけの何気ないかすれた音

しかし、コナンにとっては嫌というほど音が響きわたる。

久しぶりに入門する自分の家

本来、“そこ”に住んでいるはずだったが組織のせいで置いていつてしまった思い出のある豪邸

久しぶりに入るすさまじいオーラが漂う豪邸にとっても感慨深い

――懐かしさが蘇ってくる

懐かしさのほかにもいままでたどってきた“数々のエピソード”を思い出してしまう

そこには悲しいエピソードもあったことを思い出す

最初に蘭が組織のボスだと解った（わかった）ときの思い出が一気によみがえる。

“蘭と初対決したあの日も工藤邸で対決した”

その思い出も心に痛いほど痛感した。

――懐かしさと苦しみや悲しみが詰まった自分の家に深いほど感情を抱く。

たまに聞こえてくる些細な音ですら深い思いを感じる

「どうしたの……？
中に入らないの……？」

さらりとつぶやく悠衣の声

焦りなどまったくなくてみんなの前で見せた“冷静を装った彼女”
になっていた

ただ不敵な笑みだけは交わしていなかった。

彼女はさりげなくに家の敷地に入った。

――後ろから吹きわたる風を浴びながら……
笑顔もなく、怒りもない普通の彼女の姿で

「ああ、――じゃあオレンちに入ってからお前がいたいことを聞かせてもらおうじゃねえか……」
相変わらず持ち前の好奇心は湧いてくるまま

――けっして渴ききれない好奇心
今にも気持ちすべてが込みあがり溢れ出しそうぐらい――

このおさえきれない情熱に“限界”という文字など一つもない
領域を超えた好奇心を抱きながら自分の家へと入る。
雨の雫で少々濡れたことなど気にも止めないで……

またきしむような音を鳴る豪邸のドア
約半年ほどドアを閉鎖しているだけあって微妙に古びた風情を感じる。

ードアを開けた瞬間何かがあるような気がする。

コナンにはそう直感した

ドアの先には何かの謎についてわかるような気がする

“ 不可解な謎がやつとわかる ”

コナンはその気でいた。

（悠衣ってヤツいったい何を告げるのだろうか……。

この女の謎に近づけるかも知れねえなあ…。

なんで蘭が組織のボスっていうことを彼女は知っているんだ……？
ヤツはいったいなんなんだ？

いったい何者なんだ……？）

自分の豪邸に入った瞬間悠衣をひたすらにマークする。

さまざまな謎を解くことに近づくことに関して心の中では、猛烈に燃えている。

その気持ちはおさえきれない

逆に悠衣がひそやかに揚げ足を取り返すことを考えていることはコナンでさえ気付かない。

悠衣もコナンにたいして集中的にマーク視している。

――お互いにライバル心を密かに抱く。

お互いがライバル心を抱きすぎていったん沈黙になる。

周りは静まりかえる……。

悠衣は反撃するために“ 言葉 ” を告げる準備をし始めた。
しゃべろつと口を開ける。

「ねえ、また質問するけど――――
あなたは蘭について疑っているの………?」

「――――?」

なんといえいいのだろうか……?

なんと答えればいいのだろうか……?

言葉が上手く出てこなくて迷いと焦りがあふれて出していまいそう

彼女は唐突に返答しにくい言葉をつぶやいた。

悠衣のいいたいことがどういことなのかまったく解せない……
・

いったいどういう意味なんだ……?

コナンは返答に迷っている最中に後ろから強い風が近く窓ガラスをたたく

窓ガラスをたたく音はとてつもなく派手

一瞬その派手な音に気をとられた

そして派手な音が鳴り響いたあとは雷がこの地上におちる

――バックには輝かしい光がカーテンへと透き通って2人をうつす。

一瞬の眩い光を浴び、両者ともに驚いた。

衝撃的な光が工藤邸にまで放たれた

2人は、一瞬自分たちが質問していたことを忘れて硬直状態だった
すさまじい雷が放たれたあと、すぐに大雨が降り注ぐ

大雨が降り注いだあとは、空気はしんみりとした状態へ変わる

――そしてコナンは次の言葉をいおうとする

「蘭について疑っている」ってどういう意味なんだ・・・？
蘭の何を疑っているっていうんだ・・・？」

我を完全に忘れたかのように“江戸川コナン”としての口調はどこ
かへ消えてしまった。

――そして、今まで躊躇って（ためらって）なかなか言えなかつた
言葉がやつとのことのでつぶやけた

彼女の言葉にたいして返答を返した。

彼女は謎めいた雰囲気を漂わせくすつと笑った。

「――そのままの意味よ・・・。
あなたは蘭が組織のボスだということを本気で疑ったのか・・・。
？って聞いているのよ・・・。」

「じゃあ、オレからももう一回質問をするから聞いてくれないか・・・？
」

「何なのよ……………」

「なんでお前が蘭が黒の組織のボスだなんて知っているんだ・・・？
そして、質問もう一つ追加する

今まで気になっていただけ……

「お前はいつたい何者なんだ？」

part - 2 / 51 お互いの躊躇い（後書き）

今回は、いつもより長いです

四千文字越えになりました

評価欄はとりあえず開けます

いつまでも凍結ってわけにはいかないので・・・

本編に入るって言うっておきながらなかなか謎が解けないって

ハア、いつになったら解けるのやら

これでもなるべく謎に入ろうとしているのにー

やたらと長いです

評価欄開けますので評価お願いします

m (— —) m

part - 2 / 5 2 何者! ? (前書き)

変なサブタイトルですいません。
悠衣についてさらに深まる？

“ 「お前は一体何者なんだ？」

”

工藤邸に響くコナンの声

――彼はもう“工藤新一”のつもりになっていた

コナンが“言葉”を発したと同時に工藤邸の窓ガラスへと“妙な威圧感”がせまってくる

もう止まることなく――――

激しい輝きが映される光景が見える

暗い部屋の窓ガラスから黄色っぽい光が透き通る

雷が窓ガラス全体に限りなく光らせる

コナンが質問をしたと同時に雷は工藤邸全体に光を浴びさせたそして、まばたきもしないうちに激しい音を響かせていた

無数の光を発射させて激しい音を鳴り響かせたあとは、むなしく地面へと水滴が落ちるような音を発する
ザアザアとむなしく音が中までに響く。

お互いに雷に一瞬だけ気をとられる
ほんの一瞬だけ両者ともにひるむ。

悠衣は再び自分が追い込まれたような“感”を感じた
自分の謎へとせまってくるようなコナンに対して敵対心を抱く。
――彼の好奇心は、剥き出しになっている

“そう、自分の謎について完全マークされている”

コナンが自分に対してせまってくるときの違和感につねに重視する彼の好奇心につい恐ろしさを感じる

何を言い出すのかわからないコナンにただひたすら着目する
再び悠衣がせまったような表情へと変化した。

コナンのいう言葉一つ一つに何かがあるとあらためて実感した。

「なあ、いままで本当に気になっていたんだ……。

あのさ、お前って本当は何者なんだ……？」

「……………」

再びコナンから“自分を怪しんでいる”ような言葉を聞いた。

間違いなく自分の何かを探るような意味深い言葉

自分がいままで保っていた“あやしげな匂い”について暴かれそう

もはや今の彼女に不敵な笑みなど交わす余裕などない

迫りつめた表情でただ自分の秘密を隠しとおすことで精いっぱい

—————いつ痛い言葉を発されるのが少々不安になる

慎重に自分のことを聞くことに対して“そのコナンのせまった言葉を遮らせよう”ということでも頭いっぱいになる。

“自分が何者なのか……………”

なぜそんなことを彼にいわなければならないのだろうか……………

“……………”

悠衣は、自分の“何か”をいわれることに対してつらい

「ねえ、私の正体をあなたに教える必要はあるの……………」
「？」

少々きつめな口調で叫んだ

いちおう、冷静さは装うとしている

隠しとおそうとしているその自分の正体

“なぜそこまで知られたくないような遠まわしな言いぐさでつぶやくんだろうか……？”

よけいに彼女に対して疑惑が増えてきた
彼女はよけいに深い謎を増やしていく

——いまだに彼女についての情報はまったくわからないまま
とつぜんのように帝丹高校へ転校してきた彼女

水無怜奈似の本堂瑛祐以来の転校生
しかもちよつとだけ雰囲気がある本堂瑛祐に似ている

アイツの同じぐらい怪しい匂いがただよう彼女

彼女はきつと何か謎があるはずだ……………
きつと何かの手がかりとなる人物

そこまで隠そうとする“自分の正体”

——彼女の正体についてますます知りたい
コナンの好奇心はさらに湧いてくる

「なぜそこまで正体を隠そうとするんだ・・・？」

どうしても正体を“知りたい”

その気持ちから欲望にまみれた発言へと変わる

――隠しとおそうと必死になる悠衣の化けの皮でもとり剥がしたい
仮面のようにおおわれている本当の彼女の正体を知りたい

“正体を知りたい”の気持ちはだんだん溢れ出てしまう

コナンは、冷静さを欠いてただ目の前に立ちはだかる謎の少女について
の謎だけ“解きたい”っていう気持ちでいっぱいになる

（あの女の正体は一体何者なんだ・・・？）

なぜ彼女はこんなにも怪しい匂いが漂うんだ・・・？）

これから先に残されている不可解な謎のことなどすっかり忘れた状態
で目の前に立ちはだかる一つの大きな謎にはかりきれないほどの
好奇心を抱く

悠衣から返ってくるたった一つの答は何なんだろうか・・・？
謎につつまれた彼女に発する言葉一つ一つに着目する

「悪いけど、言えないわ……………」

世の中には知らなくてもいいこともあるのよ
あなたはなぜそこまで強引に私の正体をしりたがるかしら・・・？
そのほうがこっちにしてみれば疑問だわ？」

鼻笑いまじりで正面に向かってつぶやく。

そして、片足に重心をかけてもう片方の足で軽く床をたたく。

開いている窓の隙間からわずかな風が吹きわたる

風が少しだけ茶髪の髪がなびく

やけに彼女が気高く見える

謎めいた雰囲気がただようような不思議な彼女に戻った。

悠衣はこれから叫ぶかのようにすうと息を吸う

「悪いけど、私の正体についてあなたに言えないわ……………」

世の中には知らなくてもいいこともあるのよ。

なぜそこまで私の正体について知りたがるかしら……………？

そのあなたの言動ははつきりいつて解せないわ…。

そこまでして知りたがるあなたに疑問があるわ……………？

なんでかしらねえ……………。

あなたがどんな手を使ってでも私の正体について知りたがるわけが聞きたいわ…。」

彼女は鼻笑いをまじってつぶやく。

片方の足に深く重心をかけてもう片方の足で床をかるくたたく

彼女はその体勢でコナンに視線を向ける

痛々しく感じる彼女のとがったような視線

あらゆる感情を抱く悠衣の謎について余計に知りたくなる

「なぜそこまでお前の正体について気になるのか……………」

それはな探偵だからだよ・・・。

――探偵はな不可解な謎すべてに挑戦するんだよ…。
気になったことは絶対に突き止める

それが探偵なんだよ…。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

？」

悠衣は驚いたような半面呆れたような顔になる

床をたたいていた片足でさつきよりも強くたたく。

そして、床を叩きながら上の天井を見る。

ちよっとした仕草をして“内心”いろいろと深く考える。

（なんで探偵はそこまで人の粗あらを探るのが好きなんだろうか・・・。
・・・？

そこまでしてなぜすべてを探り得れようとするの・・・？

やっぱり解せないわね…）

いったん心の内でいろいろと考えたあと、深く溜め息をつく

そのあと瞬時に再びコナンにむかってきつく視線を向ける。

コナン自身その痛々しい視線について実感する

悠衣と同じく深く考え込む

あの痛々しい視線を一直線に着目する

――彼女の痛々しく感じるきつい視線

“しかし感じ取れるのはキツイ視線だけじゃない……………。”
どこかさびしげな雰囲気も彼女から漂ってくる。

“さびしげな雰囲気”

その正体はまったくわからないけど、なんだか知っているかもしれない・・・

やけに風情を感じる。

彼女のあの怪しげな匂い

――何かを意味してような気がする。

そして、“何か”と重なって見える
決して気のせいではない

コナン自身実際に感じたような気がする。

この気配は昨夜の謎の人物とはちがう。

昨日の影にひそむ怪しい人物とはまったくちがう気配を感じる。

今感じた重なった“何か”と昨日感じた何かはその“気配自体”が
まったくちがう

――昨日と今日のそれぞれちがう気配を感じる
それぞれの気配は同一人物のものではない

ただ“空氣的”にそれだけはよみとった

今こうしてここに立ちただかるのはすべて蘭が組織のボスだという
真実から始まった。

そして、何らかの謎が余計に深まっている

“ 謎はなかなか解けない ”

そう、それどころか謎は謎をよぶように深まっていく
昨日の人物といい悠衣といいまったく正体が不明な人物

黒の組織との最終決戦

――それは蘭との最終決戦

それまでには数々の経路を歩まなければならない……

まったく謎が解けていないこの状況

数々の経路を乗り越えることがほど遠い

まだ “ 何か ” が残っている

その “ 何か ” すべてが解った（わかった）ときそれは蘭との最終決戦

――この今の状況は最終決戦までに近づく第一歩

最初はここに立ちただかる茶髪の悠衣から始まった……。

お互いに一瞬たりとも見逃さない張り詰めた状況

1分1秒でさえまばたきできない

そう、彼らは今そんな追い込まれた状況におかれた

part - 2 / 52 何者！？（後書き）

結局悠衣が何者が明かしませんでした

これでも頑張って謎に入ろうとしているのに……

読者さまにはぐだぐだ話ばかり読ませてしまい申し訳ないです

■ただ昨日に出没した？怪しい人物と悠衣は別人です

昨日の怪しい人物も何らかの形で関係はあります！

こんな話の読者数は5418でございます

五十話超えたら他の作者さまより読者数少ないですよ。

ハハ、そりゃあおもしろみが欠けているからなあ・・・

まあ、とりあえず頑張ります

今回は猛スピードで早く執筆したからガタガタだなあ

こんなぐだぐだ話ですけど評価お願いしますm（――）m

part - 2 / 53 悠衣の正体へと導かれるとき（前書き）

悠衣の正体微妙にわかるかも？

ネタはない脳を使うっていうぐらいだから本当にしょうもない

part - 2 / 53 悠衣の正体へと導かれるとき

――なぜそこまで正体を隠しとおそうとするのだろうか……

悠衣のその真意はまったくわからない
でも、何か”深いわけがあった

そんなことは前から分かっていた
――でも、それでもその深い理由^{わけ}がしりたかった

ただなんとなく限らない好奇心がおさえきれないから

また外から響いてくるけたたましい雷の音
しかしその雑音すら気にならなかった。

聞き慣れた音をまったく無視して次なる言葉を発する準備をした。

一呼吸ついたあと一つの言葉をいおうとした

「なあ、お前は何故、そこまで正体を隠し通そうとするんだ……。
それに……………」

何故、つらそうにしているんだ？」

「……………」
「！？」

心配もふくまれているようなコナンの口調にはもはや何も言えない
自分が敵対心しているコナンからの心配に少々戸惑ってしまう

“つらそうにしている”

その言葉に対してもやがかった

（彼が心配している・・・？）

なんで私のために…よけいな情けを見せたりするの・・・？

そのあなたにたいしても解せないわ。

あなたのほうこそまったく解せない・・・。）

裏腹で心が痛むほど深く心配をする悠衣

どうしても複雑な感情が面に出てしまう

なるべく“複雑な感情”が面に出ないようにとすぐに怒ったような表情に変わった。

「あなたに私の何が分かるっていうの・・・？

わかったような口をたたかないでよ…。」

絶叫する悠衣

今までの中で一番大声でさげんだ彼女の姿が目の前にあった。

彼女はもう完全に耐えきれない様子

————壁でも蹴ってみたい・・・

波を自分が納得するまでもながしたい

それすらがまんして狂いかけの自分を保ち続けた

自分の気持ちそのまますべてあふれ出てしまうそう

————もうどうにもならない・・・

自分をうまく“保とう”とすることに関して感情を込みあがってくる
自分の本当のすべてを面に出さないようにする・・・。

「――悠衣はさらに怒り狂うような表情になってきた。しわをよせてコナンを睨みつける。」

コナンは、彼女の苦悩を分かっている

「――その彼女、悠衣を“苦悩”から救い出そうとしているそのコナンの真意が納得できなかった。」

何もかも分かったように発言することに少々苛立った。

「分かるさ……………」

「……………」

かえってきた返答があまりにも意外で何も言えなかった。

本当に彼に見抜かれているところがあるのだろうか……？

自分のつらさを本当に分かってくれているのだろうか……？

自分のつらさを分かっているなんてちょっと信じられないけど……！

「つらさを知っているのは“自分だけじゃない”そう思うとホッとしたような気分になった。」

自分の気持ちを分かってしまったコナンにたいして何も言えなかった。

言おうにも何も言葉が出てこない

必死になって次の言葉を言い出そうとする

「……………！！何えらそうなことを言っているのよ……何を根拠に……………」

なんであなたが私のことを知っているのよ……？」「
思ってもいない言葉が面に出てしまう。」

さらなる苛立ちが増してくる。
怒りを増したような口調に変わる。

すべて感情にまかせて本当の自分の素直に思ったことが言えない
コナンに“敵対心”を抱いているせいかついに冷静さが欠けている

“気持ちを落ち着かせたい”
でも、感情が込みあがってくる。

苛立っている彼女にたいしてコナンはさびしげに“何か”を言い出
そうとした。

「実はな、さつき下校道で集まったあの場所でつらそうなに表情を
してしゃがみこんでいたお前の姿を見かけたんだ。

“何か”を躊躇^{ためら}っているようなお前の姿をな……。
いったい何を躊躇^{ためら}っているのかは知らねえけどな……。」
分かっているような口調でつぶやいて“勝ち誇っているのか”、
自分の気持ちを共感してくれているのか”
コナンの気持ちはどちらとも考えられる。

「つつつ……。……。」

悠衣は感情がおさえきれない
周りをキョロキョロと見わたす
そのたびにさらに苛立ちがます

今の悠衣は困惑^{おちい}に陥^{おちい}った。
自分のつらさを抱いたときの感情を彼に見られていた

どうしても敵対心を抱いていたせいかコナンに自分の弱みを握られたくない！！

敵に弱みを握られたような気がして悔しくて自分のことを心配していることについて素直に喜べなかった。
よけいにつらくなってきた。

――もう目の前に存在するものが見られない……………。
一瞬だけ時間^{とき}が止まる。

その一瞬は悠衣にとってはとてつもなく長く時間^{とき}が止まったように感じた。

このまま彼から言い逃れするのか、この感情にまかせて何もかもすべてを話すのか戸惑ってしまう…………

何もかも“すべて”を話せば楽になれる
でも敵対心を抱いている“コナンだから”こそ自分の気持ちになかなか言い出せない。

今この場でみんなの前で見せていた謎めいたような“不敵な笑み”を交わすなんてできない

――無理に笑っても苦笑いっぽくなるだけだ

この場は自分はどんな表情をすればいいのだろうか…………？
つらそうにしている自分も見せたくない

どうすればいいのだろうか…………？
そんなことを戸惑ってしまう…………

（彼に自分の“何か”を話したくない

――でも、自分のすべての感情が嫌というほどあふれ出てしまう…………
・

彼には…………彼には自分の弱さを突き詰められたくない

あの名探偵にはぜつたいに見透かされたくない
でも、自分の感情は自分の予想以上に込みあがってくる。
何かを話さないと苛立ちがおさまらない・・・

私はいつたいどうすれば……………」

あの不敵な笑みを交わす謎めいた悠衣が心の内でひそかに葛藤する
――あまりにも葛藤が激しくなつて苦しさが増加していく

「わ、私は……………」

言い出そうとしても次の言葉が思うように言えない。

“次の言葉を云うこと”――そんなことにつらくなる。

負の感情が心の内で追加される。

「私はね、あなたが長い間戦ってきた組織のことを知っているのよ・
・。」

あなたは彼らを倒してからあらゆる推理で蘭が組織のボスだとい
うことも解^{わか}った

そのことが原因でどれだけかつらい思いをしてきたもんね。

蘭について目的とか組織のボスである理由を知りたがったんだよね・

・・・。

いろいろたどつて組織のアジトに潜入したこともあった。

――それでもまだすべての謎を解けない

蘭を本当に信じてもいいのかさえもわからない

蘭が組織のボスだということについてすべて知りたいのね……………」
悠衣は悲しそうにつばやいた。

まるでコナンの気持ちを分かっているかのように…

「何がいたんだ・・・？」

「いったい何を言っているんだ・・・？」

「あなたが蘭組織のボスだということまでどれだけつらい思いをしているのか

――それを一番私がかかっているのよ……………」

組織のスパイになっていたところからね……………」

まあ元組織に入っていてスパイとして構成員を演じていたのよ……………」

「

(えつ……………。)

予想もしていなかった答が^{こたえ}かえってきて思わず動揺してしまう……

組織に関係していた――だから彼女から怪しげな匂いを感じたのだと少々納得した部分もあった。

「組織のスパイ・・・？」

「じゃあ、最初から組織のことを知り尽くしていたのか・・・？」

でも、それにしても組織との決戦のときにお前はいなかったような気がするんだが……………」

それになぜお前は組織のスパイだったんだ・・・？」

「一つ一つ答えていくわね……………」

まず、私は組織の構成員を演じていたのよ……。

まあ、組織の構成員を偽ってひそかに彼らのことを調べつくしていたわ。」

「だから、蘭が黒の組織ヤツらのボスだとわかったのか・・・？」

「ええ……………」。

そうよ。

いろいろと調べ尽くしている間に組織のボスまでたどり着いたのよ。

そう、蘭が組織のボスだという真実までね…。」

しかも、それだけじゃない・・・

私が組織をスパイしたにもほかの別の理由わけがあるのよ。

それは工藤君、あなたにもまだ話していないわ・・・。

――私が組織のスパイだと理由

それは、組織のあの人から始まった。

part - 2 / 53 悠衣の正体へと導かれるとき（後書き）

悠衣が組織のスパイ微妙だなあ？

悠衣が組織のスパイだった理由から始まりますね

ネタバレに近いけどそこから蘭について関係あるかも？

完全に作者の世界ですね…。

なんていつでも発想が幼稚ですからね……

ちなみに携帯からの執筆です

部活に行く前ですね…

どうかこんなわけわからん話ですけど評価お願いしますm（――）

m

part - 2 / 54 穏やかと優しさそして 悲しみ

――悠衣は組織のスパイだった。

その真実が今判明された

なぜ彼女はヤツらのスパイなんかになったのだろうか・・・？
なぜヤツらを探っていく必要があるのだろうか・・・？

彼女が組織の構成員を演じていた・・・？
ちよつと意外な真実だった。

黒の組織のボスだという蘭のことをよく知り尽くしていた悠衣
彼女は怪しげな雰囲気を漂わせていた。

悠衣がつぶやいた意味深な言葉の数々

彼女はなにげに意味深い発言でつぶやいていた。

――そう、彼女はミステリアスな少女

不敵な笑みを見せていて謎だけに包まれたような茶髪的美少女

――まったく謎の彼女の真実がたった今2つ解き明かされた。

これでわかったこと

…――それは……

“悠衣は元組織に所属していた構成員だったこと”

“悠衣は組織の何かを探り入れるためのスパイとして構成員を演じていたこと”

この2つが悠衣のたった一言で解けた。

怒りと哀しみが一気にあふれ出て“限界を超えてしまった”ような

彼女がそこに立ちすくんでいた。

雷の大きく鳴り響く音は、もう聞こえなくなった。
かすかにむなしく雨の雫が地面へと落ちる音が複雑に響く。
さつきよりも激しく哀しい音色で……………。

自分のすべてでも話して“限界を超えた”悠衣は、『ふう』とひと息ついた。

一瞬、険しい表情になった。

その表情はコナンに殺意を抱いたような恐ろしい表情――
いままでの中で最大限に怒った顔がほんの一瞬だけ目の前で見られた。

怒った表情を覆い隠すようにうつむいて体重をかけていた片足で気付かれないでいどに床を軽くたたく。

――その鈍った音は、激しい雨音で消された。

床を叩いたあと、悠衣はうつむいた顔を真っ直ぐに上げる。

彼女は一直線に視線を向ける。

そして、そのまま視線はコナンにへと向ける。

彼女の表情は、もう怒っていなかった……。

不思議そうな表情もまったく見られなかった。

なんだか少し微笑んで穏やかな状態だった。

彼女の表情は、懐かしいような表情へと変わり果てた。

さつきの怒った表情は一気に消えて“冷静”と“優しそうな雰囲気”が漂ってくる。

今まで、彼女が見せることがなかった新しい別の顔はこの瞬間に見られた

彼女は一瞬目をとじて一言言う準備をした。
目を見開いてから口を開いた。

「工藤君、久しぶりね……………」
穏やかに笑って小さな声で告げた。

「……………」
「？」
コナンにとって彼女の優しい声は不思議でもまんざらでもなかった。
……………」

彼女の本当の笑顔が目にしみるぐらいにうつった。

そこに立ちすくんでいるのが、さっきの怒り狂っていたような不思議な雰囲気を漂わせていた悠衣とはまったく別人のように見える……………」

そして、彼女の新しい素顔というものを改めてわかった。
彼女の別の裏の顔にはコナンはもはや何も言えなかった。

言葉がうまいこと出てこなかった。

「今……………なんつていったんだ……………」
途切れ途切れの言葉になってしまう
彼女からまさかあんな優しくそして穏やかな声が聞こえてくるとは
思いもしなかった。

“
「――久しぶり……………」

”
その優しい一言は、とても深く印象に残る。

――なんだか自分も彼女のことを知っているみたい

「久しぶりっていっただけよ……」。

工藤君のことは前から知っていたのよ……」

「そ、そんなバカな――なぜ、お前のことを……………」

(えっ………………。)

この瞬間に悠衣のことが頭によぎった。

本当に見覚えのあるような気がした。

悠衣の雰囲気が自分の中のどこかで重なって見えた。

それがなんだったのかまだわからない……

でも何かどっかに見覚えがある

彼女に見覚えがあるのはたしかだった。

でもその記憶はしっかりと思い出せない……

――ただ微妙に記憶が、頭によぎってくるだけ……

「工藤君、どうしたのよ……？」

あなたは私を覚えていないの……？」

「……………」
……………」

彼女の発言にたいしてもはや何も言えない。

本当に自分を完全に知り尽くしている彼女に恐ろしさを感じた。

よけいに頭の中でよぎっていた記憶が少しずつ消えていく
途切れ途切れに記憶が蘇ってくる

異様なほどもやがかる。

うつすらとした記憶が蘇っていない・・・

彼女の穏やかな表情をおがむたびに記憶を思いだすことが痛々しく
感じる。

「そう、覚えていないのね……………」

ショックを受けた表情を作り斜めに顔を向けた悠衣

穏やかな雰囲気は漂わせていたが、その表情には寂しさも混じっていた

コナンには彼女の微妙に揺れ動く気持ち痛みほど伝わっていた。

本心痛々しい彼女を見るのもつらかった

――彼女に新たに言葉をかけること……

その行為は、彼女に苦しさを植え付けてしまいそう怖い……

彼女は組織のスパイ

つまり、蘭に関する情報を有り余るほど持っている

蘭に関する情報や彼女に目的やすべての謎について聞きたい

――しかし今の彼女を見ていると何も“言葉”をいうことができない
何か間違つてつぶやいてしまったら“つらさ”や“苦しみ”を植え
付けてしまうかも知れない……

その恐れがあつて彼女に声^{かな}がかけれない。

ただぼう然と立ち尽くして哀^{かな}しげな雰囲気が漂う彼女を上から見る

ことしかできなかった。

ほんの一瞬だけまったく違う表情に変わる悠衣

彼女のまばたきもしないうちに変わっていく素顔一つ一つの顔を一瞬たりとも見のがさなかった

彼女の一つ一つの表情は、痛いほど深く印象に残る。

彼女のはかりきれない複雑な感情が痛いほど伝わってくる。

「私もあなたのようになりたかったわ……。」

とつぜん悔やんでいるような悲しんでいるような雰囲気ですぐ途切れ途切れに言葉をつぶやく。

自分の今まででも振り返っているような感じだった。

「……………」

彼女の言っている発言の意味がまったくわからなかった……。

「ーただ“何か”に悔やんでいることだけは伝わってきた。

彼女のつらさだけは伝わってくるけど、彼女の心の中で隠されたその真意はまったくわからない……。

「オレのようになりたかった……ってーどういうことだ……？」

彼女のその発言を聞いたあと上を見上げた。

悔やんでいるのをおさえようとわざと笑いながら……………。

「あなたのように、何もなかったようにただ平和に日々を過ごしていきなかったわ。」

私はカラスのように真っ黒な組織のスパイなのよ。

いろいろ調べていくうちにかなしい真実ばかりが判明されたのよ。

何も嬉しいことなんて一つもない

笑っていられるときでさえもまったくない。

ただかなしい真実だけしかわからなかった・・・。

その中でも蘭が暗黒化したカラス場みたいな組織のボスだと知ったとき一番悲しかったわ。

彼女は本当に優しい人だから・・・」

語尾が、やや弱々しいような口調になっている。

――蘭のことも前々から知っているような口調

相変わらずなんでも知っているようで不思議な少女

コナンはただ一つ確信した。

――それは、悠衣は悪い人なんかじゃないっていうこと

あんなに悲しそうにそして、つらそうにしている彼女が悪い人のわけがない。

あの彼女の痛々しい表情は本物――

そんなことは、コナンにも伝わってきた。

ひしひしと痛くつたわる彼女の思い

彼女は、“何か”を悔やんでいる

彼女が本気で組織に貢献したわけがない

彼女の真意は、たった一つ

まだその彼女の本当の目的がわからないまま

千の顔を自由に操ることのできる魔女のような少女
彼女は、つらそうな表情、怒ったときの表情、微妙に笑ったときの
表情

そして解き明かされた穏やかな表情
さまざまな表情を持つ悠衣

そんな彼女の目的、組織のスパイである理由^{わけ}
それにはいろんなエピソードから始まった。

――そして、そのエピソードには蘭も深く関係していた。

part - 2 / 5 4 穏やかと優しさそして 悲しみ（後書き）

なんか話はだいぶ延びていますね…。

こりゃあ早くしないとね…

悠衣に詳しく書かないと肝心の蘭についてが書けない！

なんとか評価お願いします

m (— —) m

part - 2 / 55 複数の顔を持つ悠衣（前書き）

いろんな顔を持つ悠衣についてです

今、一番気になったこの最大な事件の重大キーワード

――それは謎めいた美少女悠衣の正体について

彼女はいつたい何者なんだろうか……？

まだ彼女が組織の“スパイ”だということしかわからない・・・。
 なぜ、なんのために組織ヤツらの手下で構成員として行動していたのだろ
 うか・・・？

まだ彼女についてすべてがはつきりとしたわけではない
まだまだ彼女について余韻が残っている。

この引つかかる謎を今、解き明かさなければならぬ……。

しかし、涙ぐんでいる珍しい悠衣を目の前で見ていると何も言葉が
いえない

今、涙を流している光景が目の前でしっかりと映っている

彼女は泣き崩れそうな自分をおさえるために急に言葉を發した。

「いままでさ、……あなたたちを……だましてゴメンね……。」

「か細い声でボソツとつぶやいた。

声は途切れ途切れで重なうて聞こえる。

•
! ?
[

コナンはいきなり話し始めるうえにいきなり謝り出す悠衣にたいしてもはや何もいえない

なぜ………謝っているのだろうか・・・？

彼女の言動に少々戸惑う。

頭の上に複数の疑問符が浮かぶ。

とつぜん謝り出した彼女についてはまったくわからなかった・・・

彼女は、相変わらず謎めいている

複数の感情があらわれていているんな顔を持っている。

「だましていたって………、どういうことだ・・・？」

なにげに哀しみもふくまれた彼女にそつと声をかけてみた。

ただなんとなく彼女がつぶやいた“だましていた”の意味が知りたかった

単なるちよつとした好奇心が湧いてきて質問してきた。

コナンは半分落ち込んだ悠衣の心配をしながら悠衣へと真剣な目線をおくる。

（だましていたってどういうことなんだ・・・？）

さらに大きな疑問符が浮かぶ。

「……いままであなたをだまし続けてそして、組織でいろいろと探り入れていたのよ……」

あなたについても影で勝手に調べていたわ。

あなたについて探ったりしてゴメンね……」

「――――」

彼女の言っている意味が納得したようでちよつとわからない……。

彼女は、申し訳なさそうに小さな声でボソツとつぶやいた。

彼女の言っている“だまし続けた”

「それは、今まで組織の一員として影で行動していたこと
もう1つ――」

コナンのことを密かに調べていたこと

「じゃあ、オレが工藤新一だと知っていることも蘭が黒の組織ヤミウのボスだということもスパイとして密かに探っていてわかったのか・・・
・？」

「ええ……、彼ら組織にバレないでいどに調べさせてもらったわ。」

素直な表情を捨てて思っているわけでないことを軽々しく発言する。
悲しみを面おもてに出さず、いつもの妙に笑う彼女の表情へ戻った。

相変わらず謎だという雰囲気を漂わせている。

無理やりつばく印象ずける不敵な笑みを見せ付ける。

「――じゃあ、聞くけど……どうしてお前はオレについて調べているんだ・・・？」

コナンは、この瞬間に気になった疑問を問いかけた。

そこまで自分は組織に調べられる“不審な要素”を見せた覚えがない
――ただターゲットにされていた。

なぜそこまでオレがヤツらに調べられる対象になったのだろうか
とついつい疑問を抱いてしまう。

（なぜ、（黒の組織）ヤツらに調べられなければならないんだ・・・？）

なぜそこまでオレについて調べるんだ・・・？）

心の内でもさらに彼女にたいして疑念をいだく。

コナンは少々迷っている。

――彼女が次に何を言い出すのかが気になっていた。

その“次の言葉”がこの最大の事件の何かを1つに絞り込む“キーワード”になっていくような気がしたから・・・。

悠衣が組織の構成員として自分を調べている理由わけそれだけのことがこの最大な事件を大きく変える。

――コナンには直感した。

悠衣が“重大な次の言葉”をいう瞬間を待ち続けていた。

微妙に風音が外から聞こえる。

かすったような途切れたような妙な音

雨音と混じって鳴り響いている。

「あなたは、組織にAPTX4869を投与されたくせに、投与されたはずの人間なのに死亡未確認だった。

APTX4869を投与されて死亡未確認っていうデータになったことこれは、珍しいから興味深かったのよ……。

そこで私はあなたに何かがあると踏んでいろいろと調べさせてもらったのよ…。

そうね……主に米花町周辺をこっそりと調べたのよ……」

「そしたら、江戸川コナン」工藤新一っていう答^{こたえ}が導き出されたのか……？」

「ええ……、まあ前に組織が工藤邸に何度が調査員を派遣した。まあそのことについて誰かから聞いたかもしれないわね……」

そのときに私は紛れて組織の構成員としていろいろと調べさせてもらったわ。

そのときには、今は組織を裏切ったシェリーも調査に同行して一緒に工藤邸を調べていたわ。

たしかシェリーは、名前を偽って現在は阿笠家にすっきり在住して“灰原哀”とか名乗っていたよね……？」

悠衣は相変わらず何でも知っているような口調で怪しげな雰囲気を漂わせる

何でも知っているような彼女は軽くクスツと笑う。

彼女は微妙に笑ったと同時に雨音と混じった風音が強く吹きわたるガサガサとけたたましい音が周りへとこだまってくる。

……妙な雑音広がってくる

今、周りにある置かれているものもかすかに揺れ動いている。

ものの配置も微妙にずれている。

まるで彼女が動かしたみたい……。

……コナンは、何でも知っているような彼女に言い返す言葉が見つからない。

とりあえずその場限りでも誤魔化すようにとつさに口を開いた。

「灰原のことまで調べて……いたのか……？」

ちなみに蘭が組織のボスだということも密か調べていたんだよね……

・？」

微妙に声に途切れがある。

いろいろと聞きたいことがあるけどなかなか言い出せない。

コナンは少々戸惑う。

「ええ、蘭についてもいろいろと情報を嗅ぎ集めて調べさせてもらったわ。

そしたら、今自分がスパイとして行動している組織のボスだと判明したのよ……。

まさか、組織のボスだとは想像もしなかったけどね……。」

彼女はさっき涙を流していた自分を捨ててケロツとした態度に変わった。

みんなの前に立ちはだかっていた堂々した様になっていた。
ずうずうしく再び軽く笑った。

コナンは彼女から下目線から見られているような気がしてなんだか動揺してしまう。

彼女が堂々した態度に戻ったことについてちょっとした不審感をいだく。

「……コナンは彼女の言動“に負けまい”と次なる質問を繰り返そうと話し始める。

「あのさ、最大の疑問なんだけどどうして組織ヤツラのスパイとしてオレたちのことを調べているんだ……？」

「……………」
「！？」

この発言にたいして悠衣は何も言い出せない。

軽く笑っていた表情はまた強張こわばったような感じへと変わった。

「……何か自分にとって痛いところをつかれたような気がしてコナンにたいしての“恐れ”をあらためて感じる
再び痛いところを聞き出すコナンにたいして敵対心しては重点的にマークをする。」

何でもちよつとしたことを次から次へと質問してくるコナンにたいして少々苛立った。

片足で床を軽くたたいては、心の内では“何か”を迷っていた。

そして、コナンに“なぜ組織のスパイだったのか”どうして組織のスパイとして情報を得ようとしたのか”それぞれの答を教えることこたえに躊躇ためらった。

こうしている間にもコナンによる逆襲がせまってくる。
「一分かっけていても自分の組織のスパイである理由をすんなり言っわけてしまうことに躊躇ためらいが増してくる。」

思わず言葉に詰まってしまふ。

今の状況ではいまましい強い風音が再び聞こえてくる。
その雑音が家まで鳴り響いてくるたびにむなしさを感じる

妙に時間だけが過ぎていくような気がする。

後ろを振り向いては時計の微妙に動くときの音が印象づけるかのよう
にチクタクと動く。

静まったこの場は時計の音がうるさく感じる

時計は何もない沈黙にむなく音だけを鳴らす
時間に追い込まれたような感じがあった。

彼女は時間を追い込まれたような気がして今度は立ち直ったような
雰囲気をおわせる

立ち直ったような感じでコナンにへと視線を向ける。

「……………じゃあ、あなたに教えてあげるわ。

なぜ、私が組織のスパイなんかやって行動していたのかを……。」

part - 2 / 55 複数の顔を持つ悠衣（後書き）

次に悠衣が組織のスパイである理由がわかります

しかし理由は考えたヤツがアホだから本当にしようもありません。
まあこんなわけわからん話になっているけど評価お願いします

part - 2 / 56 ついでに…… (前書き)

ストーリーの続きではありません
ご了承ください

part - 2 / 56 ついでに……

えっと、このような駄作小説を書いている作者です。
えっとまずこの話についていろいろと疑問がありますよね……。
そりゃあこの話はあくまでも蘭が組織のあの方つまりいわゆるボス
だとしたらという話何ですが、肝心の蘭がぜんぜん出てこない
だからわけわからない話になっています。

作者の一人よがりって思うと思われませんが、言っておきたいことがあるので言わせていただきます。

他の登場人物は蘭のことをまあ心配していたり、蘭のことで深く考えているコナンについても誰かが深く考えている

ちなみに灰原も蘭を心配する

また心配しすぎて近くの少年探偵団のみんなも心配する。

まあそれぞれの思いが複雑になっていて誰かが傷ついている様子を見ればそのまた誰かが心配するっていう感じなんですよ……………。少年探偵団はたぶんもう出すことがないと思つてやっつけてください。本当は作者の中では少年探偵団はタブーなんですけどまあ灰原を心配する役だけで勝手に登場させました。

まあこれも一人で語っているだけです……………。
その辺を理解していただければ嬉しいです

あくまでも蘭が原点ですからね……………。
次はコナンが蘭のことを考えたり蘭のことを異様に気にかける灰原のことを考えたりしていろいろ人がいろいろと複雑に思つて感じのストーリーです

複雑すぎで何書いているの??? と思われたら申し訳ありません。
あくまでも蘭が原点です。

忘れていません！
作者の勝手に言い訳をして申し訳ありません
引き続き読んでいただければ嬉しいです

魔法戦隊三輪野助

part - 2 / 56 ついでに……（後書き）

作者の勝手な一人よがり申し訳ありません
これからも引き続き書きます

――ついに悠衣の謎がこの場で解き明かされる
次なる言葉をいうたびに異様なほど心底では緊張する。

“ 自分の謎全てを解き明かす ”

その少しの時間で語れることがどれだけ重さを感じることか・・・。

――その真実をこれからすべて解禁する悠衣が一番分かっている。

「じゃあ、いままでの組織の事や蘭について説明するわよ。」

何気ない顔をして何かを言おうと準備をする。しかしその顔の表情とは裏腹にすべてを伝えることにさらなる躊躇^{ためら}いをいだく。

あっさりとすべてをいうことに多少の不安を持つ。

いままで背負ってきた“ 自分の真実 ” をそう簡単に言えるわけがない・・・。

ただこの場は自分の吐いたことには“ 責任を持たなければ ” と思いつべてを言おうと自分で決意を固めた。

足が異様なほどすくむ。

自分が思わずつぶやいたことを悔いて軋むように葉を食いしばる。

――自分の言ったことを何もかもなかったことにしてこの場から離れたい。

“ 自分で首を絞めたような苦しみから逃れたい ”

しかも後戻りはできない

一度つぶやいてしまったことは自分で処理しなければならない

悠衣の頭の中で自分の言った言葉の“ 重さ ” そして“ 責任感 ” を何

回も感じた。

覚悟を決めてもう組織についてすべてを語ろうと無理やり思おうとする。

覚悟を決めてから堂々と正面を向く。

コナンと対等な立場の態度で堂々と立ち尽くす。

まさか、何かを躊躇^{ためら}って心底で葛藤していたさっきの悠衣とは思えないぐらいに……。

悠衣は、自分の真実を語ることを決めて次へと新たな言葉を発し始めた。

もうすべてが解き明かされる

――そう、今度本当に謎がすべて明かされる

――コナンは、答^{こたえ}が導かれる瞬間が来るまでまばたきもせず待っていた。

“悠衣が告げる答^{こたえ}は、組織の最終決戦の重要キーワードになる”
確実にそれを意識して悠衣のつぶやきに耳をかたむける。

彼女はいつすべてを話すのだろうか・・・？
すべてを話すその瞬間瞬間を見逃さなかった。

「私が組織のスパイなんかになった理由^{わけ}は組織のメンバーの“あの”人”から始まったのよ…。

ちなみにその人は私の知り合いなのよ…。

実はね…、あの組織には私の知り合いがいるの。

私は、その知り合いのためになぜ組織に入ったかを調べるために組

織のスパイとしてあんな構成員になったのよ…。」

すごい勢いで導入から語る。

そのとき、彼女のおさえきれない感情（その中には憎悪）がこもっている。

彼女の表情が少々焦りが見えてきた。

まだ悠衣に関するキーワード全然はそろわない。

「……ほんのちよつとの手がかりとなる言葉を聞くことを一秒も早く待っている。」

「……彼女のすべてを告げる言葉が発されるときそれは複雑にからまる謎に一步に近づくこと」

彼女の一言一言に集中する。

辺りを見渡して冷静沈着をよそおう。

そして、さっきの言葉と接続される言葉^{キーワード}を待ったためにいったん息を殺す。

「……妙に本だけが並んでいる景色が雨のせいで真っ黒に近い部屋悠衣が次へのキーワードとなる言葉を発そうと瞬間にあまり聞き慣れない雷の音をひびかせる。」

響く雷の音に気をとられてその前に透き通るように見えた“雷の光”というまばゆきにまったく気付かなかった。

一瞬の時間^{とき}が止まるような激しい天空のまばゆきと雑音

一瞬の時間^{とき}に惑わされ言葉に詰まりかけた。

悠衣は言葉に詰まった自分にたいして信じられないぐらいに驚いた。いや、そのときばかりは驚きの表情を隠せずにはいらなかった。

ほんの一瞬だけ取り乱さない程度にびっくりしてしまった。

目を丸くして“違う世界”にでも入り込んだような気分になっていた。

ほんの一瞬という短く感じる時間

しかし悠衣には、“その一瞬の驚き”が長く感じた。

今の彼女はいつもの“得意な不敵な笑み”を交わしているわけでもない……。

“何か”自分にとって痛いところを見事につかれて怒り狂っているわけでもない……。

ただ悠衣の中には、自ら吐いてしまった言葉についての“責任”の二文字の言葉が浮かび上がっているだけ。

「なあ、それで引つかかっていたけど“組織のあの人”って誰のことなんだ？」

元組織のメンバーのことか……？」

逃げずに次なる答を絶対^{こたえ}に語ろうと断固していた。

本当に決意を固めて“次のエピソード”を語りあげようと思ったその瞬間^{とき}コナンが悠衣より先に質問をし始めた。

悠衣が口ずさむスキもまったく与えなかった。

悠衣は、質問されたことにたいして動揺しないようにして堂々と答^{こたえ}を述べようとする。

“ここからが自分が今まで抱え込んできたすべての謎を解禁する”

悠衣は、質問について“答えよう”とする瞬間そのことを強く頭の中にインプットしておいた。

「私の知り合いわね、実は……………」

ベルモットっていうコードネームを名乗っている魔女よ…。

たしか組織の中では“秘密主義”ともいわれていたわね。

それに、彼女はその前にも犯罪者でもあったのよ…。

なぜ、彼女は犯罪者になったのか・・・？それを探るために組織のボスから何まで調べ尽くしていたのよ…。

組織のボス・・・それがまさか、蘭だと予想も想像もしなかったわ。でも、まさかあの蘭に限って完全な悪であるはずがない！！
それも確信していたわ。」

悠衣は何もかも知っているような口調で話を進める。

――自分の精一杯を尽くすように最初からしっかりと語る。コナンの質問にたいして“何か”動揺しないようにとあらかじめ問に対応する準備を整える。

――そして、見せかけだけでも自分の弱いところを付かれないように堂々たる態度で質問へと向かう。

その何かの質問にたいしてだけに気を向かせる。

「じゃあ、ベルモットが組織に入った理由^{わけ}や犯罪者になった理由^{わけ}を探るために他の情報も調べ尽くしたのか…………？

それで、肝心の蘭が組織のボスだという理由^{わけ}やベルモットの犯罪者である動機とかもわかったのか…………？」

また自分にとってキツイ質問が飛び交ってきた。

質問にたいして悠衣は答えられなくて“力不足”ていうものを痛いほど感じ取った

――そして、彼女は言葉に詰まったのが原因で何も言葉が出なかった。

雫^{しずく}による複雑な雑音が、何もいえない自分と同じようにむなしさを感じる。

外から嫌というほど聞こえてくるその妙な雑音はとてもむなしさを感じ何かの前触れを表示しているよう――

自分の今の浮かない今の気分もそのまま表しているみたいに天空から雫が音を鳴らして降りそそぐ。

自分と同じようにこの地に出没する雨の雫

悠衣は、自分とちょっと似ているような感じがして気になった。

そして、雨が降りそそぐこの天候を直と見届ける。

雨を見るたびに心の中でさらなる不安がつのる。

――自分と雨の雫を重ね合わせることによってけいに悲しさがつまれてくる。

彼女の顔は、強張っている。

自分にたいしての“重苦しいつらさ”がよみがえってくる。

彼女の足先が逃げれないように硬直されている。

動こうにも足が思うとおりに動かない。

（やっぱり、すべての真実をいうことを躊躇^{ためら}っている自分がどこかにいるわね……。

なんだか言いたい真実^{まこと}がなかなか上手くいえないわね。）

心の中で、何も言葉に出さないようなもどかしい自分に悔やむ。

真実すべてを話すことについてどこかに躊躇いがあるような気がする。

躊躇いがなかなか消えていかない。

（イヤな……。――予感がする。）

顔にシワを寄せてさらなる不安が増していく。

自分だけに感じ取れた妙な胸騒ぎがすべての真実を解禁することを拒む。

――そう、自分の持つ真実は、組織による最大の事件の切り札
そのキーワードが欠けては、意味がない……。

組織のすべてを壊滅させる使命はコナンに託されている
だから、すべてを終わられるために必要なそれぞれのキーワードを
彼にすべて解禁したい。

しかしそれをいうことをどこかで躊躇ってしまう中途半端な自分が
存在する。

すべてを終わられるために“何か”をコナンに告げようと考えている
自分と何かを告げることを拒む行為を起こす自分が存在していて
矛盾している。

――しかし嫌な予感っていうものが頭の中で駆け巡る。
自分のせいでコナンに危害が加わってしまうかもしれない。

そんなよけいな心配が頭によぎってくる。

なにげに多少コナンを心配する悠衣

――数えきれないほどの不安がいろいろと増していく

「どうしたんだ……？」

蘭のこと知っているんだろう……？教えてくれ……ないか……。

「

最後の部分が微妙に声に途切れが生じる。

――どうしても次へ進むために真実を知りたい

どうしても真実を解禁してほしい……。

その思いが、限界に達するほど強くなる。

最後に突入できないことに苦悩するコナン

その苦悩は、悠衣には痛いほど伝わってくる。

――ここまで苦悩にしていることには気づいていなかった。
“真実を解き明かさないことが逆にコナンを苦しめていた”
たった今そのことに気付かされた。

“真実を伝えなければ……。”

そのことを、頭の中でインプットする。

一刻も早く真実を伝えることを考えていた。

そして、さつきとは、逆の考えへと変わっていった。

悠衣は、真実を告げるために気分を変えようと笑い顔を作る。

「ちなみにベルモットについてだけは、わからなかったわ……。でも、蘭が組織のボスになった理由^{わけ}は、私たちもそしてベルモットから関係するのよ……。あれはたしか十年前の話だったわ……。」

（十年前……………？）

“十年前”という言葉に疑念を抱く。

コナンにはその蘭の真実を知っているような気がした。

浅い記憶のまま封印された十年前の真実

そのエピソードには、悠衣も関係していた。

part - 2 / 57 いろいろと広がる躊躇い（後書き）

ついに来ました

十万文字超えです。

いやあ、少し疲れました。

まだまだとんでもなく続くな…こりや無駄に文章が長い
っていうかいらんルビや当て字の使いすぎだと思います。

次回は謎に入るかなって言いたいところだけどすいませんm（

）m

今回の更新はしばらく経ってからです

遅くても3月1日から開始します

ずいぶんと予定が狂ったけどね…。

ちなみにけっして面倒くさいとかダルイとかそういう理由ではありません。

っていうよりそんな理由だったらこんな文字数は書かなかったでしょうし……

理由は最終回まで考えてあるけどぶれがある

文章が乱れていく

やたらと忙しい。

誤字脱字の修正などなどです

まあとりあえず皆さまの小説をじっくりと読んで考え直さないとダメだなあと思っています。

評価お願いします

m（）m（）m

part - 2 / 58 旅立ちの前に… (前書き)

やっと3月約束通り更新しました。

悠衣は覚悟を決めていた。もう全てを話す気になっていた。

嵐が妙に収まってきた。周りで揺らんでいた木々も微かな音だけで収まった。

――気づかない内に気持ちちが和らいでいた。

様々な葛藤さえも無くなつてやつと” 気持ちは一つに収まった ” という雰囲気を感じた。

” 金森悠衣 ” ――もう彼女を惑わすものは存在していなかった。何かをいう事に躊躇^{ためら}う素振りなど全く無い。あとは言葉にして謎を発するだけ。

真剣な眼差しだけ見せて喋る姿勢を見せた。

「私は、もう逃げも隠れもしないわ。惟、有る事柄を話せば満足だから…。スパイ時代に蘭の様子は嫌と云う程見たからね…。」

悠衣は一旦言葉を切った。ほんの一瞬だけ俯く。

そして、再び話し出す準備をする。

『話す人』の姿へと変わる。

「あれは、十年前…」

何気ない日にベルモットと云うネームを名乗るようになってからの事…。彼女と知り合いだった私は組織に普通に入る事が出来た。――そして私は大きな組織の存在や自分の知り合いで有る彼女の真相を全て究明する為にスパイとして何年間も無理に構成員として

働いた。」

一区切りついた所で一旦の休憩をする。
今、降り注ぐ微かな雨音に耳を傾けてから続きを『話す姿勢』へと変える。

”何も迷いも躊躇いも無い”
堂々とした姿勢を見せつける態度をとる。

「だから、当時の学校に通っていた時も”学校について”も彼女に聞かれたわ。あなたも含めてね…。」
悠衣は語尾を強めてクスツと笑う。
そして、コナンの方へと視線を移す。

何もかも分かっているような面^{つら}をして嘲笑っている感じを表す。

「……………!？」

”何を言いたいのだろうか？”

——悠衣の奥深い心底のせいか何を解禁しようとしているのか掴めない。

まるで”自分の全てを知っています”的な態度を見せつける彼女に余計に意味深に捉えた。

「元帝丹小学校の生徒よ…。あなたが覚えていないのも無理はないわ。所詮、小学一年生の時の話

まだあのベルモットの存在を知っていた小学一年生など帝丹小学校では私以外にいないもの…。

「……当時、ベルモットはね、一つ犯罪を犯したのよ。それで、身近に居る私に相談を持ちかけたのよ。」

寂しげにものを語る悠衣

次へ運ぶ言葉を云う事に躊躇いはなくても”寂しさ”があった。

でも真実を云う事は決めたと自分に言い聞かせて解禁する”何か”を述べようとする。

「ベルモットはこういったわ。今の彼女なら有り得ない表情を浮かべて……」

再び次の言葉を発するために少しの間隔をあける。

区切りをつけるタイミングにそって一つの言葉にへと運ぶ。一旦、深呼吸をする…。

「『あなたのクラスで最も優しい人は誰？』って私に聞いてきたわ。勿論、真面目な眼差しでね…。」

言葉を発する彼女の表情もさらに真面目さが増した。

彼女の周りの空気だけ凜と張った。

コナンは感づいたのか何かをいうような姿勢になる。

「それって……。まさか？」

食いついているような感じで悠衣の語りに入り込んでくる。

それに対して悠衣は動揺を見せない冷静さを装う。

ただ、感情に負けないようにと黙った態度をとる。時間を見計らって軽く言葉を悲しく告げるように発する。

「そう……。それは蘭の事よ。ベルモットに質問された時に答えたのよ。」

『蘭は優しいって……。』ってね……。』

彼女は、久しぶりに不適な笑みを浮かべる。

次の言葉を持っていくように語尾が強く早まる。

風は吹き弱った。

しかし、彼女を包む迫るオーラがやけに強調された。

――まるで彼女をキーワードにするかのように……

part - 2 / 58 旅立ちの前に…（後書き）

昨日でやっと14歳になった非道・邪道作家です

今日のストーリーは短くしました。理由は早くコナンのDVDが観たいからです。↑死ね

短く詰めるのは私にはむずい。ある意味苦労しましただからきつと駄文でしょう。

まあ、復活しました。

宜しく願います

part - 2 / 59 蘭とベルモット（前書き）

殺される覚悟まで書きました

part - 2 / 59 蘭とベルモット

「――蘭が関係する？」

何が何だかわからないコナンは、疑問符を付けて眉をしかめる。

（一体、何がいたいんだ？）

まだ謎に覆われているような悠衣に少々苛々とする。

そして、警戒心を持つ。

「いい？一応聞いて・・・私達は蘭を利用してしまったのかもしれない…。優しいことを鵜呑みにしすぎたと思う。」

コナンが意味深な言動を吐く自分で苛立ちとは、気付かず自分の真実をすべて語ろうとする。

軽々しく自分のすべてを語ろうとする悠衣

コナンの前には、そう思つて不敵な笑みを浮かばせる。

「あのね。ベルモットはね過去に自分で植え付けた苦しみから逃れたかっただけなのよ。自分が、人々を殺してしまったその辛い過去から逃げたかった…。『Angel』に値する人物はいないか？と聞いたの…」

「それで…。」

「――早く真実が知りたい。」

その気持ちが膨らんで言葉を早口で短い切る。

「そのとき私は、『蘭の事?』って思わず言ってしまったの…。そのときに”その言葉を”聞いてしまったベルモットは『そう…』って軽く憫笑してから蘭をとことん探し続けたの…。」

語尾に詰まって言葉に少々途切れが生じる。

それでも自分には、すべてを話さなければならない。その責任感が押し寄せてきて次なる言葉を無理に言おうとする。

「蘭の情報がだいたいわかってからもしばらくベルモットは”蘭の様子”を見ていたわ。――そして蘭の優しさが改めてわかったの…。」
『こんな子に自分の悪を植え付けてはいけない。』とベルモット自身自覚はしていた。

でも、止められなかった。自分の過去に犯した罪の呪縛からは解放されないから…。

半分蘭を巻き込もうとした。」

落ち着いた様子でゆっくりと話す悠衣

何時の間にか不敵な笑みなど消えていた。

それどころか悲しそうな表情に変わっていた。

――震えを増していく。

「疑問に思ったけど何故蘭何だ? 何故そこまで蘭にこだわったんだ?」

苛立ちを加えたような口調で質問を聞く。

まだ情報が掴めない。そんな感じを受ける。

「……………」

突然の怒りが自分に返って来た気がして言葉に詰まる。

――今、なんて言えばいいのか？

自分ですらわからない

でも、最後の言葉を告げなければならない。自分は与えられた義務を果たさなければならぬ。

そのことが頭の中で早く回転する。

はつきりと次の言葉を呟けない自分に苛立ちを増していく。

そして、密かに拳を作る。

しつこく降り注ぐ大粒の雨

悠衣にはその雨から発する雑音すら耳に留まらなかった。

”もうすべてを言うしかない。”

その言葉がしつこく植え付けられる。

次なる言葉を言おうと喉の奥から声を張り上げようとする。

「においを感じたのよ。自分と『何か』似たような匂いを…。

ベルモットは蘭を”あの方”っていう存在に仕立ててそして自分が一番気にいられるようにしたかったのよ。

それに蘭は優しいから…『泥沼化した自分を救うのにも何時でも利用できる』そんな風に捉えていた。

そして、何時でも自分を元の”何もない自分”を取り戻せると思った。でも…」

――再び語尾に詰まる。

何か躊躇^{ためら}ったような仕草を見せる。

一旦は逃げようと足元を確認する。

小刻みに脚を動かして涙腺を僅かに緩ませる。

「コナンはその表情を確認する。

「一応何も言わずに黙っておく。」

悠衣は、すべてを語る。そのことに固定されて喋る姿勢を作ったつもりになる。

「でも…ベルモットは蘭の優しさを頼ってしまったのが原因で悪い部分は直らなかった。」

そして、蘭は普段のベルモットの様子を一番見せられて”悪い道”を植え付けられた。

油断しすぎてお互いに毒化してしまったってとこかな？

転校してきてから蘭の様子をしっかりと見ていたけど不審な点がザクザクと見つかったわ。」

「次々と語る悠衣

自分のすべてを捨てて諦めきったような雰囲気を漂わせる

表情に迷いはない。そんな感じの自分を見せる。

嫌な風が隙間から入って吹きわたる。

「ベルモットは元の自分に戻る”いつか”って甘んじていた…。でもいつかは来なかった。」

ますます”罪人”にへと染まっていくだけ。

そして、その様子を一番見る羽目になった蘭も悪にと染まってきてしまったわ。だいたいこんな所かしら。」

言い切ったみたいな口調になる。

「一瞬だけ”感無量”になった。」

落ち着いた様子で息を吐く。

しかし、コナンの苛々の表情が微かに浮かばれていた。これから嫌なシナリオがある。

そう、コナンは一人直感した。

part - 2 / 59 蘭とベルモット（後書き）

えつといきなり言い訳ですが、最近部活がやたらと長くなったりするわ殆ど毎日が部活だったりするわ。あと塾も忙しいし。小説更新する暇が殆どありませんでした。それにうちの姉きにケータイ&パソコン禁止令が出されていて今、こっそりと更新しております

3月になったら急に部活が増えるとは…予想していなかった。部活なんていつもと同じぐらいだなんて甘んじていた自分がバカでした石を投げられるぐらいの覚悟で書きました。作者でなる私がわけわからんことになっていきます。ではこの辺で長くなると部活に間に合わないの。（家から学校近いからいいけど…）

part - 2 / 60 もう一つの真実

ーお互いに毒化してしまった。こんな事がなければすべて誰も辛い目にはあわなかった…。

その事に深く後悔する。悠衣は頭を軽く抱え込んで青ざめた表情をする。

蒼白な表情を覆い隠すように一旦足元に視線を向ける。

”自分でも毒化されかけのベルモットを止める事が出来るハズ。”
でも行動にうつせなかった自分で慚愧ひんきの気持ちでいっぱいになる。
悲しそうな表情が見せまいと無理に普通の表情を繕うとする。
そして、次なる真実を語ろうと前を向こうとする。

『ーもう、真実を語る事から逃げない。』
心の中でしつこく言い聞かせる。

「でも蘭はね……悪に染まってしまってもずっとみんながよくなる為の方法を考えていた。」

(えっ……?)

コナンは、驚いたような表情に見せる。意外な言葉に珍しそうな感

じを受ける。

「一番、組織に貢献していたあの女の目を盗んで”ある薬”を隠したのも蘭なのよ。」

「えっ？ある薬？？」

眉をしかめて疑問そうに質問する。

一体何なのかと疑問が増していく。

（それにあの女って……。）

コナンは深く考えて込む。少々俯いて『考える姿勢』になる。

「キールよ……。キールは不老不死を企みそして、無限な力を手に入れようとしているのよ。その為の薬を作るのは相当なリスクがかかる。それは、命にも失うぐらいに……。」「

悠衣は語尾を弱めて悲しげな表情を浮かべた。――俯いてその表情を面に出さないとしても顔に表れる。

続きを云いたくない。

でもいう義務が果たせていない。そう思って足元を気に留めた後に次なる言葉を発そうとする。

「そう、そんな物命を失うぐらいリスクが高いのに……。それをわかっていながらキールは宮野厚司に都合のいい薬など開発させようとした。」

死んでもいいからって宮野厚司を使った。それにそんな都合のいい物の開発の成功なんて0.1パーセント程度。そんな物を開発させようとしていたのよ。」

苛立ちと悲しみが込みあがってくる。

足元をまじまじと見ては、次々と真実を語る。

雨のせいか薄暗い景色などは気にも留めずに『ありのままの真実』を伝える事に集中する。

――それは、受け止めたく真実。自分で云いたくない真実で辛さが増していく。

「そして、宮野厚司は死に至った。いや殺されたっていった方がいいわね。どっちみちキールっていう女は開発が成功しても彼を何らかの方法で殺すつもりだったんでしょ。縛り付けていた彼ならいつでも殺しなんて可能だから……」

死因は、その研究による爆死

相当凄い衝撃だったからね……」

雨が『ザアザア』と強い音を響かせて降り注ぐ。

そして、真剣な眼差しを向けて息をぐくりと飲み込む。自分にだけ緊迫感が迫ってくる。そんな感じを受けた。

強まる雨音に少々の焦りが混じる。とりあえずは、深呼吸をする。やたらと靡く茶髪の髪を押しつけて”次の真実”を語ろうとする。

「その研究所は、木っ端微塵。跡形もなく消えたわ。

キールが監禁した時に残した痕跡なんて全く残っていない。灰にまみれた建物のようにだった。まあ、そこにも唯一残っていた物はあったけど……。」

「それは……？」

突然の質問に息を飲み込んで返答する。そして、次なる言葉を発する。

「その都合の良い薬よ。それだけ命の代わりに残っていた。見事にそれだけは…完全に完成してあった。流石にキールもそれには気付かなかった。その時からキールの企てを知っていた蘭は開発された品をこっそり持っていったってとこかな？」

一旦一部を話したことで満足感を覚える。

そして、真剣な表情で次の言葉を言おうとする。

薄暗い部屋に再び雷の光が入り込んでくる。いきなり入り込んできたせいか眩しい。

光のせいで少々目の痛みを感じる。

悠衣の説明がなくなっただけで周りに沈黙状態になる。

しかし、話はこれだけじゃない。真剣はまだ残っている。そんな予感が走った。

「蘭はね、どこからやって来たキールの目を盗んで危険な薬品を遠ざけたのよ。木っ端微塵になった研究所を調べても何もないようにしたのよ。」

命を失ってつていうのに……そんな薬物ができただけだった。虚しいわね。こんな真実……。」

哀れんだ表情を見せて苦笑いをする。

過去の悪であるキールに”利用された”こととたかが薬一つ完全したためにあっさり死に至ってしまったこと
2つの出来事を振り返ると情けなく感じる。

情けなくて虚しいことを語っている

そんな気がして『はあ』と溜め息混じりで呟く。
途切れ途切れに視線をそらそうと足元を眺める。

「それにしても今の現状何がなんだかわからねーよ。一体何なんだ？先日、急にというより夜中に変な銃声が鳴り響くしよ。んでオレが狙っているような影が見えた。どうなっているんだよ。その後には張り付いたような気配いや、殺気はお前だろ？なんか知っているんだろ？」

今まで黙っていたコナンが”怒り”が溜まって抑えきれないーそんな感じで口ずさむ。

「……………」

一瞬にして全て見透かされた感じを味わって何も言葉が出てこない。
――この場は何を言えばいいのか？

それがわからなかった。勝ち誇って見えるコナンに対して『何か』
を述べる気になれない自分に苛立ちを覚える。

――しかし全てを伝える義務が残っている。

脳裏に真実を全ていう事が浮かんできて悠衣は閉ざしていた口を開ける。

喋る前に得意の不敵な笑みを浮かばせる。

「因みに真実をいうのは、あなたを救うため、――言わば的確な情報
を伝えてあなたに貢献するためなんかじゃないわ。

この宙ぶらりんで残っているあの忌々しい過去の事件を0にするため
だわ。

私じゃ最大のボスに当たる蘭をどうにかする事が出来ないわ。一番
蘭の事を知り尽くしている筈のあんたにしか蘭を止めることは出来
ないのよ。わかっている？」

反撃するような口調で言い述べる。彼女が眉をしかめたと同時に遠
くから小さな雷の音が聞こえる。

その音より前に入り込んだ僅かな光が窓ガラスを灯す。
動揺した素振りを見せずに自信に満ちた笑みを交わす。

「んな事お前に言われる前からわかっていたよ……。んで事件に関し

て知っているんなら……教えるよ。これ以上時間をロスしてぐだぐだどだべっている暇なんてねえんだよ。」

半面燃え上がったように半面冷静を保った状態で口ずさむ。

コナンが”怒り”も交えている事など気にもとめず”ポーカーフェイス”を保った感じで次の言葉をいう。

「わかってるわ。でも、ちょっと落ち着いて。」

宥めるように言い付けをする。

そして、軽く笑顔を見せる。

「だから、言っただろ！！もう猶予ある時間などねえって。一秒でもこの事件は早く解きてえんだよ。」

今まで溜めに溜め込んでいた複雑な感情が一気に出されている。

最後のゴールまであと一步でたどり着くのに事件が解き明かされる感じが見られない。

その事に抑えきれない苛立ちが増していく。そう、最大限度まで

――議論している時間がない
その事に深くとらわれる。

「わかったわよ……。あの忌々しい事件の殆どはキールが占めているのよ。あの雪の降り積もっていたあの日、銃撃事件を犯したのもキールよ。最も邪魔者となっているあなたを消し去る為に全て行動を実行したのよ。」

微かな笑みを浮かばせて片方の眉を顰める。

やや、怖さがまじったような表情にする。

窓ガラスの僅かな隙間から嫌な風が吹きわたる。

凜と張り付いた寒気が走る風が通りすぎる。

――あともう少し――あともう少しの情報を入手すればゴールまで行ける。

そうもう少し重要な情報を入手すれば次は最終決戦
最初の対決のようにお互いに傷つけあわないようにしたい。

そして、事件解決してゴールしたい。
その願望が密かに膨らんでいた。

part - 2 / 6 2 後、一步ゴールまで

――あと、もう少し

もうあと一步の所で情報が全て消えてしまうのは、もう御免

――振り返ればいつだって手に入れた情報は消えていくばかり
そんな事もうんざりともいいたげな表情に変わる。

――もう限界も近い。今まで見逃していた部分を全て知りたい。

過去を振り返って、組織との決戦は、『遠い道のり』だったと言い
聞かせる。

”もうゴールは、目の前”

そう思うと待ちきれない。冷静さを欠いてはならないと自覚しても
早く”解決したい”その気持ちが肥大になって落ち着かない。

なんとか『落ち着け』と自分に言い聞かせて悠衣が言葉を発するの
を待っていた。

「で……話の続きは？教えてくれねえか？」

怒りを殺して普通の口調で呟く。

怒鳴りつけた口調にしまいと心掛ける。

それに対して悠衣は、小さく一步を踏み出す。

その後直ぐに、俯いて軽く”不敵な笑み”を浮かばせる。

――しばしの沈黙

その沈黙に対して悠衣は、一瞬だけ笑みを浮かばせる。

『何か』を待っているかのように雨音に耳を傾ける。

途切れ途切れに聞こえる雑音を一瞬だけ聞いて”満足そう”に笑み

を零す。

俯いた顔を上げては、次の言葉を発そうと微妙に口を開ける。

「――あの事件では、私は、キールの後について来て何をするのか見張っていた。だいたい彼女が計画していたことはわかっていた。組織の殆どを打ちのめしたあなたを殺害を企んでいた事も。あなたは、無限大の力を得ようとしていた彼女の計画を止める。だから、邪魔になるから殺しに入ったのよ。どんな手を使っても……」

穏やかな感じで次々と語る悠衣

さっきまで背負っていた”重苦しさ”

それはもう溶けてしまいそう

”重苦しさ”を取り除いた状態で軽々と真実を述べる。躊躇いと迷いに囚まされていた彼女は忽然と消えた。

――もう躊躇いなどない。

そういいたげな表情を向けて堂々たる姿勢を見せる。

――言い負かされたりはしない。

その言葉は心に刻み込んで”自信满满”な態度を取る。

”不敵”ではない笑みを見せる。

少々勝ち誇ったような視線でコナンを見る。

「知っているよね。黒の組織の奴らはどんな手を使っても計画は必ず成功させる奴らだつて事……」

奴らに”卑怯”とかそんなのは、全く関係ないのよ。

ただ計画は、成功すれば満足するだけ……だから、キールは街中だろうと銃撃なんて犯したんでしょね……。」

”何もかもわかってる。”

”全てを知り尽くしている”

そんな事をいったげな表情で呟く。

流石組織のスパイだったといえる程の情報量

”それ”について自慢気な表情で語る。

どこか『勝ち誇った』ような大きい面を見せ付ける。

声に出さずに軽い笑いだけを見せる。

コナンを打ち負かしたつもりの態度を取る。

また次の言葉を繋ぐと”笑み”を歪ませる。

「組織は実に欲望にまみれた愚衆よ。」

小馬鹿にするような口調で呆れ顔を見せる。間の感覚に『やれやれ』と小声で呟く。

そして、まだ『何か』謎めているという雰囲気漂わせる。部屋の薄暗い辺りまで音をひそめて歩く。

「でも、お前もその組織の仲間だったじゃねえかよ。」

半ば怒りを込めた口調で強くいう。

やや語尾が強くて耳に残る。

「ええ、そうね…。」

「……………」

あつさりと自分を”愚かしい”と認める悠衣にどこか解せない気がした。

今までの彼女を見て自分を自分で卑下するような人物には見えない。謎めいた感じが目に付くように表示されている気がして何かの言葉が出て来なかった。

――何を言えはいいのか

とりあえず負けずと密かに言葉を濁らせる。
彼女に圧倒されて怯んでいる姿は見せまい。
それだけを強くインプットする。

「『ええ、そうね…』ってどういう事だ!？」

”とりあえず何か言わなければならぬ”

心理的にそう働いて強めた口調で叫ぶ。

改めて圧倒されているせいか追い込まれている感覚に歯がゆさを感じる。

その一方悠衣は余裕綽々たる態度を取っている事も気付かずに。

ー”愚かしい”

その言葉が強くインプットされる。

自分を見下したような言い方をして妙な”笑み”を浮かばせている事が解せなかった。

この張り詰めた空気

さらに、時間が迫っている今、冷静さを欠かないでいる悠衣に圧倒されそうになる。

今、周りには恐ろしいオーラが引き立っている。

”何か言わなければならない”

それが意識の内にあってもまだ意味深な雰囲気を出している悠衣には言葉が出なかった。

しかし、”怯んではならない。”ここで怯むとこの事件のゴールまでたどり着かない。

組織という存在を壊滅させる事が出来ない。

その心理が自然と働いて『怯える事』『逃げる事』は出来なかった。

悠衣の意味深な匂いに打ち負かされてはならない。『この場』は厳

かさを見せつけなければならぬ。
そう思つて”険しい表情”を作る。少しでも”勝ち誇つた”ような態度で視線を向ける。

「組織はね実に愚かしいわね。ひよつとすると組織のスパイだなんて馬鹿馬鹿しい事を何年も行つていた私も愚かしいのかもしれない…。まあ、それは認めるわ。でも……」
語尾の部分がはつきりとしなくなる。

何かの躊躇^{ためら}いがあるかのように言葉に詰まる。
その次の言葉をいいたくなさそうな様子を見せる。一瞬だけ戸惑いを見せる。
沈黙な状態になつていく。

「でも…これも…どん底に落ちたベルモットの為。いつかはみんなを救おうとしていたのよ。その為に組織については何年も調べていたのよ。」

十年前の幼い私には、ベルモットは嫌な苦しみから逃れようと蘭を利用していただなんて気づきもしなかったからね…。みんなどん底落ちるなんて予測もたたなかったわね。」

少々悲しげな雰囲気を漂わせて次から次へと呟く。

組織の変化の全く気づくことの出来なかった自分に”齒がゆさ”と”罪悪感”を感じる。

はつきりとなつていない途切れ途切れの言葉がやけに印象に残る。
――不敵な笑みを交わす意味深な悠衣のもう一つの表情がうつすらと浮かぶ。

（何なんだ・・・？なんかまだ違和感を感じる。なんか妙なオーラが漂っている。一体何なんだ？）

眉をしかめて今の状態に不信感を抱く。

――まだ物足りない。

今は何もないような気がした。

面には不敵な笑みを浮かばせている悠衣

しかし、裏の顔が切なげに見えた。その事について疑念に抱く。

――頭の中に嫌な直感が走る。微かな冷や汗が頬につたる。

『この場』は、事件を解決する事が優先そう思っ^て自分を覆^つ冷や汗を無視する。

見せ掛けだけでも敵かさを表意する。

「もう全て話したつもりよ。これで満足かしら。因みに蘭の目的はピスコとかいった老いぼれを蘇らせることとキールの企てを壊滅させる事そして、みんなをどん底から救う事。

今は、黒に染まった組織のせいで毒化もされてしまったけど本来の蘭は、優しいのよ。

半面は組織のボスである事にあなたと同じぐらいに苦しんでいるんだから・・・。」

最後の言葉を切なげに呟く。見かけは、彼女らしく軽薄な態度を取っている。

この組織の件を軽々見ているような態度を取る。不敵な笑みを零して足を一歩軽く踏み出す。

何の躊躇^{ためら}い無しに一歩一歩ゆっくりと背を向けて前進する。

「――待て……………」

コナンは怒りをぶつけるように叫ぶ。

しかし、最初の叫びは強めだったが、途中から途切れて弱くなる。

『――待てよ！！オイ』

そういいたかったものの前の零した悠衣の言葉が切なげで哀れんだ感じがして続きの言葉が強く言えなかった。

言葉を弱めた事で一瞬”戸惑い”と迷いが生じた。

『しまった』と思いつつ後戻りは出来ない。ここは、ばれないようにしなければならぬと思つて一旦ポーカフェイスを保つ。

悠衣が足を止めたような気がした。

――『今の声を聞いていたのか』と心配そうな表情にする。

前に視線を向ける悠衣――その度コナンは、痛々しい視線を感じる。

――何を言い出すのか？

次の”運びの言葉”を気に留める。

悠衣は、歪ませていた口元を直して次の言葉を言おうとした。

part - 2 / 63 二重の顔（後書き）

一応一気に四話更新しました。

もうそろそろですかね…。この話終わるのは…自分でもだいたいあと何話で終わるのかわかっているし…。…そんなぐら残りは短いです話薄っぺらい気がする。そして、結構意外だったりする

3月は予想外にもめっちゃくちゃ忙しいので…こんな調子になってしまいました。うーんと多分、8・5割ぐらい語ったと思う。（自分でストーリー忘れる馬鹿なだけに…。）手抜きになっています。文字数少ないし

評価欄は気が向いたら開けます。荒らしとか関係なくではここでおしまいにしておきます

part - 2 / 64 早くすべてを…

”すべての真相を知らなければならない。”

その義務を果たす事に燃えていた。

事件の真実を知りたい。その気持ちははかりきれないほど抑えられない。

部屋中に寒気が、走る。妙な震えが、足から感じる。

雨音がだんだんと静まってい。嫌な空気が晴れていくような淡い希望を勝手に抱く。

雲が明るみを帯びていくように見える。

暗い沈黙が消えていく気がした。

再びのしばしの沈黙

今のところ沈黙はまだ続いたまま

これで、”しばしの沈黙”は何回目だろうか？

沈黙の空間が小さく出来ている。

”早く沈黙から解放されるのだろうか？”

その事を頭に刻み込んで待っていた。

次の言葉の瞬間を……

彼女の”歪み”が消えた今、『すべてわかるだろう』とそう思い込んでいた。

「蘭は、その愚かしい妙な薬を持っている理由はそれだけでは、ないわ…。その他に別の理由があるのよ。」

悠衣は、続きの言葉を運ぼうと一旦深呼吸する。

冷静を装って咳を一回こむ

「何だよ！ーもったいぶっているんじゃないよ…。教えるよ！ー！」
怒鳴りつけたような口調で言い付ける。

もう教えて欲しい気持ちが含まれている。 ” それ ” で気持ちはいっぱいになっていた。

” 冷静にならなければならない ”

ー それをわかっていても最初から ” 置かれていた真実 ” に苛立ちが増したが為に黙ってはいられなかった。握り拳を密かに作って震えていた。

雨音が再び大きくなるような予感がした。バックから嫌な雑音と嫌というほど眩い雷の光が自分たちを覆って来る感じがした。

コナンの言葉がしつかりと刻まれるように響いた。

悠衣は、コナンの言葉を受け止めたかのように口元を歪めた。

冷静な雰囲気を漂わせて次の言葉を吐こうとする。

「蘭の持っている愚かしい薬は、無敵な薬ーつまり、シルバーブレットを越すぐらいの威力よ…。そう、あなたを上回るほどのとてもない威力なのよ。」

悠衣は、一言一言自慢げに語る。

すべて”お見通し”と雰囲気を漂わせて圧倒している感じを作る。勝ち誇ったような態度で上目線でコナンを覗くように見る。

悠衣の嫌な匂いが動揺しそうになる。――しかし、怯んではならない。

と自分に言い聞かせて威圧感を押しつぶそうとする。

「何なんだよ……。シルバーブレットって

ベルモットのやつに勝手に”シルバーブレット”っていわれているけど何なんだよ。”銀の弾丸”がオレと何の関係があるんだよ!？」次々と疑問を打ち付ける。

少々コナンの叫び声が煩くなる。

深々しい謎を知りたい気持ちが強まっている。

限らない大声で叫びたいそんな気持ちに至る。

悠衣は、”怒り”をついた姿を見ても冷静を装っていた。

そして、密かに告げる真実の数を指折り数えていた。

一瞬辺りが殺風景の状態になっていた。

part - 2 / 65 まだ残っていること

ーもう迫って来た。もう全ての真実を解き明かされる。そんな予感が自然と感じた。

悠衣が口ずさんだ”言葉”がやけに印象強く植え付けられる。次、一体何を言いたかったのか？その事を集中的に聞き入れる。

悠衣は、口元を歪めて微かに笑う。不敵な笑みまではいかないけど…何か怪しい雰囲気を感じさせるような笑みを面に浮かばせていた。首をやや斜めに傾いて偉そうなポーズを構える。喉の奥から声を張り上げようと歪んだ口元を直そうとする。微かに聞こえてくる雑音は悠衣は満足感に満ち溢れない。

「シルバートレットね………そんなのただ例えにしてだけの事よ…。そんな気にするほどの大袈裟な事なんかじゃあないわ…。」
険悪な雰囲気を感じさせるコナンに対して開き直ったような口調で言い切る。
入ってくる風は、やや寒々しく感じる。震えがやけに襲ってくる。悠衣は、微かな”震え”を抑えようと足を固定化しようとする。足を動かさないような姿勢を整える。

淡々とした口調で吐く悠衣に対して苛立ちが増してきた。

顔が妙に引きつつている。コナンは、その表情を面に出している事を隠す為に足元に気を留めるふりをする。
下を俯いて表情を覆い隠そうとする。

天候がまだ曇っているせいかこの空間部屋全体が暗く感じる。薄暗く染まっている部分も残っているが全体に黒ずんだような色を帯びた状態になっている。

雨音の雑音は流石に静まり返ったけど、そのせいか寒風から発する音が植え付けられるように響く。

深く”インプット”されるような途切れ途切れの雑音

突然のように窓ガラスの方から途切れた音が強まる。

強まったような音は刻まれるように深く残る。

「なあ、じゃあシルバーブレットって何なんだよ!?このまま答えが浮いてしまったから納得出来ねえんだよ…。この事件を解いて全てを片づけたって納得出来ねえんだよ…」

全ての力を振り絞ったかのようにコナンが苦々しく質問をする。

「――全ては答^{こたえ}と言えるものが知りたい。」明確”と言える正当な事柄を求めている。

その願望があるせいか中途半端な解答を述べる悠衣に対して苛立った。

”苛立ち”を見せまいと保っていても流石に我慢にならない。事件に対する元の好奇心が原因なのか?
抑える限度が越したような感じだ。

悠衣は厳かなコナンに対して軽薄な雰囲気を漂わせる。相変わらず事件の事を何事でもないかのように構えている。

「シルバーブレットはね…ただベルモットがそう言っただけよ…。」

紛れ込んでボソツと呟く。

「ーしかも、少々笑いをまじえて

企てがまだ残っているといいだけな表情をしていた。

「シルバートレットはね…ただベルモットが勝手に呼んでいただけよ…そんなに気に留めるほど深々しい言葉じゃないわ…。そんな大袈裟なものではないわ…。」

突如、途切れ途切れにちょっとした眩きが漏れる。

コナンに聞こえるのかわからないぐらいの声で呟く。

「コナンはその重要となる言葉を聞いたと一応サインを送る。

”早く説明をしろ” その言葉を訴えかけるように視線を悠衣の方に向ける。

半面、苦笑い混じりの半面、怒りが引きつったで睨み付けるような表情で凝視する。

その合図を受け取ったのを知ったのように笑いをまじえて咳をこむ。軽く音をたてて口元を歪めて笑みを浮かべる。

わざとらしくコナンに挑発したような態度を見せる。

苛立ちを増していく哀れな姿を楽しんで見ているように見る。

自分を上目線で見てもコナンに対応する態度をとる。

見た目は、小学生だからか？―それ対応な憎々しい態度を植え付けるように見せつける。

下から見られているような目線に気を留める。その目線を気にか

て僅かに動作が含まれていた足の動きを止める。

「……………!？」

一旦、何も言葉が出なくて黙っておく。何か頭の中に思いついたかのように目の色を変える。

とりあえずは、黙り込む。その姿勢を作る。

”『あの言葉』を待ち望んでいる”って心の中で呟く。

(……………)

自分の心に呟いたそのあと、この状況に対して警戒感を抱く。

「シルバーブレットとは、強者の事を示しているとベルモットは言っていたわ…。

『我々を射抜くぐらいの力を誇る人物の事だつて。それは、銀の弾丸のような……いや、それを”シルバーブレット”っていうのよ。』
って自信満々そうに喜びの笑みを口元から歪めて淡々と吐いたわ…。

「

(えっ……………?)

一瞬だけ油断のせいか驚いて動揺した。

驚きの表情を面に出す。

しかし、直ぐに『ハッ』と気づいて元の険しい表情に戻る。

「……それが、そのシルバーブレットに値するのがあなたなのよ。
あなたは今まで何件か遭った組織関係の事件で全て解き明かして全てに打ち勝っている。そして、殺されずに今も生きているんだよね……
その普通には、ないような”強さ”……それをあなたは誇っている

のよ。」

悠衣は冷静を装って呟く。

小さな埃が辺りに飛び交う。

計り知れないほどの埃が目の前に浮かぶ。

――少し前が見にくい感じがする。

再び軽く咳込んで新たな言葉を告げようとする。

「全てに打ち勝とうとする”強さ”なんてそう持っていない。そんな無謀な事普通なら無理。でも、あなたは自分に無理難題をぶつけて無謀な行為を限界以上に行ってきた。

そのあなたの”強さ”が力を生み出す事が出来る。しかし、蘭は……」

語尾の部分が弱った。最後の言葉を呟くのを躊躇^{ためら}ったような仕草を見せる。

悠衣は続きの言葉を中断して不意に動作のあった腕を止めた。

part - 2 / 66 微妙な部分（後書き）

えつと最近特に忙しくて小説の事を考えている暇がありませんでした
評価欄早く開けようと思ってもなかなか行動にうつせません

手抜き部分ざつくりですみません

まだ学校も終了式終わっていません。うちの学校は始まりが早い
せに終わりが遅くて本当に腹立たしいです

来年受験っていうのもなんか早い気がします

私達をべらべらと語って申し訳ありませんでは、この小説もあと何
話で解決が決まっておりますこの辺で終わらせておきます

なんとか3月の間でも大丈夫ですね

七十は確実にいくけど。

part - 2 / 67 もう終了…

最後の語尾が弱まった。まるで何かに動揺したように……

手の動きも止まった。一体何に躊躇ためらいが、残っていたのだろうか？
悠衣は言葉を呟くことに深い躊躇ためらいと迷いを抱く。

寒風が原因ではない本当の震えが生じてきた。

一旦気を休めて下の床を眺める為に俯いた。

そして、不意に片足に体重をかけて片足で床が軽く叩いていた。

その動作を暫く繰り返した後に『ふうっ』と満足そうな笑みを浮かべると同時にもれた。

「蘭はね……あの愚かしい薬を何年も保管していたには、また別の意味があるのよ。それは、いつか自分が戦う事になるって意識があったの。」

そして、戦う時にあの愚かしい薬を使うつもりなのよ。

そう、”強さ”を力に変える最強なシルバートレットを上回る薬をね……。」

「でも、そんなものを一体どこで何の為に使うつもり何だ？ー使う目的なんてねえじゃねえか……一体何のために……元組織のスパイで何年も組織に在住していたあんたから知っているんだろ？蘭は一体……何を目的にしてそんな下らない物に手を出すんだよ……。」

悠衣に、硬直が早まった。一瞬にして窓ガラスを叩く風音が消えていった。

またしてもしばしの沈黙が部屋全体の空間に漂った。

詰められた空気を改めて覚える。

悠衣は、”責任を果たさなければ、すべてを背負うコナンの為にも自分が先にうたなければならぬ。”

頭の中にまたその言葉が蘇る。

言葉が”蘇る”たびに”責任”の二文字を思い浮かべる。
深く”インプット”するように何度も繰り返し心で呟く。

言葉を刻み込む準備が整った後、事柄を語ろうと封印されたような口を解禁する。

「最終決戦……つまりその愚かしい薬はあなたに対して使うつもりよ……。目的は、あなたを痛めつける為。辛いけど、あなたを落とし入れるために無限大の力を使うことになる。最後に待つのは、悲しいエンディングかしらね……。皮肉なものね……。」
哀れんだ表情を向けて真実を語る。

「まあ、私にはどんなエンディングが待ち受けていても構わないわ……。それが例えハッピーエンドであろうとそれこそバッドエンドであつても関係ないわ……。」

そう、組織さえ壊滅すれば私には関係ないわね……」

憎々しい口を叩く悠衣

本音ではない言葉が零している。

コナンにも彼女の”本音”ではない。

ただの直感だけど本音で言っているとは思えなくて何も反論しなかった。

いや、それよりもすべてを知ったような気分になった。

――組織の奥深さまでが通じたような気がした。

何だかんだ言って組織の細かな部分を色々と語ってくれた。
普段は解禁することのない表情を見せることもあった。意味深さの
他に哀れんだ表情や苛立つた表情が隠されていた。
それが解禁されて満足感を抱く。

あと残るは最終決戦

――そう、それは最も戦いたくない人物との最終決戦

「もう最終決戦の始まりよ…。」

悠衣は、コナンに聞こえない声で呟いた。

part - 2 / 68 最後の一つだけ

ーもう戦いの時…

ついにこの嫌な時が来たと実感した。

一応、すべての謎がとけた。

第一段階は、終了して少しは満足した。

しかし、この対決からは、本当の勝負
もう止める事が出来ない。

そう覚悟の気でいた。

嫌悪感を振り撒く雨が止んだ。

雨音も聞こえなくなつた。

雨が途端に止んだ事で少々違和感があった。

まるで次の最終決戦の為に雨が止んだような気がしたから…。

まだ快晴とはいえない。雲がうつすらとかかった状態になっていた。

「じゃあ、本当にすべてを話したわ。これであなたとはおさらばね
…。すべてあなたに託すわよ…。」

この忌々しい事件の決着をね…。」

相変わらずの不敵な笑みを浮かばせとつとと歩く。

軽い感じで足を運びコナンから遠ざかる。

勝ち誇つたような姿勢で歩く。

「なあ、最後となるけど…二度と会う事がねえから聞いておくれ」

真剣な表情になる。

その瞬間悠衣も反応してゆつくりとコナンに視線を向ける。 ” 不敵な笑み ” から真剣な眼差しへと変える。

” いつでもどうぞ ” っていういたげな表情をする。

「お前は、敵なのか？味方なのか？どっち何だ？」

最後の言葉だと重んじて強めの口調で質問する。

「私？私わね。敵でも味方でもないわね。私の正体はただの元組織のスパイって事以外ないもの。」

組織を ” 敵 ” だと思っていなきや探りなんて入れるわけないでしょう。かといってあなたを私の仲間だなんて思っていないわよ…。そもそも組織の探り方すら違うんだもの…。」

半面笑みを浮かばせてコナンを凝視する。

「—————？」

とりあえず悠衣の言葉に対して黙っておく。まだ何か言い出すのを待っている。

ちよつとの警戒感を持つ。

「私は一匹狼同然ね…。今回の件は組織のボス〃蘭だって知ってしまっただけあなたにしか解決出来ないけど…」

本当は私がすべてを終わらせたかった。」

悲しげな表情を見せつける。

「だからちゃんとこの勝負勝ってね…。絶対に事件解決してね…」ど

んなことがあっても解決の可能性はあなたにしかないから…。」
すべてを託したという気持ちを込めてコナンに視線を向ける。
そして、不敵な笑みではなく切なげな笑みを見せつける。
無言で悔いはなさそうに家から出ようとする。静かに音を立てないで…。

「新一！」

悠衣が居なくなつた瞬間、微かに自分を呼ぶ声が聞こえた。

そう感じてコナンは四方八方キョロキョロとする。

（どこだ！どこから何だ！近くから聞こえるこの声…聞き覚えがある。）

「何？忘れちゃつたの…。私よ…。私」

声の人物はすたすたと前に進んでいた。

前に近付ければ近付く程その人物が見えた。

――忘れるはずがない。

コナンの中で一番知り尽くしている人物

そして、あの方とは思いたくない人物

忘れられない。いや、忘れられるわけがない。

今、肝心の人物は勝ち誇つたような笑みを浮かばせて立ちほだかつた。

堂々とした姿勢で…

いつもとは、違う雰囲気を漂わせて…

（蘭…。）

コナンは目の前の人物に深い感情を持った。

（蘭…。）

目の前に存在する人物が信じられなかった。
なぜ蘭が、目の前に現れているのか理解できなかった。

蘭がボスだと前々からわかっていたもののやはりこうして目の前に立ちただかっている姿はいつもに増して恐ろしさを感じた。
蘭から感じる空気が重く感じる。

微かに『ふっ』と笑みを零して何か言おうとする。

「今まで話はすべて聞かせて貰ったわよ…。新一？」

笑みを浮かばせて『新一』の部分強調しているような口調になる。
語尾を強めて勝ち誇ったような態度をとる。

コナンから”何か”一本取ったつもりになっていた。

「どうしてここに…蘭が。」

「ふっ、新一…甘いわね…。悠衣の事も怪しいとは薄々感じていたのよ…。私を睨んだような視線も飛び交った時もあったしね…。」
まだ自分が”勝ち誇った”ような気になっている。少々曇っている窓ガラスの所に何気なく足を運ぶ。
軽々しくゆっくりと歩む。そうさっきの悠衣と同じ雰囲気を感じさせる。

まるで自分がボスだという事を表示するかのようにな…

『自分を凌駕するものはいない。』といったげな表情をして堂々たる態度をわざとらしく見せる。

そんな威圧的な態度をコナンに植え付けようとする。

「蘭は一体何を…悠衣の正体を調べに来たのか？」

「ええ…。そうよ…。悠衣は新一には対しては何か言うような気がしてあとを追って潜みながら話を聞いていたのよ…。ひよっとすると序でに新一と決戦を交わすことを覚悟にね…。私は一応の準備はしたわ…。」

蘭は即座は拳銃を取り出す。

感情がこもっていない笑顔を浮かばせて銃口をはっきりと見せる。

「どうしたいんだ…蘭は…。」

銃口を向けられても怯まないようにとする。

上っ面を堂々とした姿勢にして僅かに切なげな表情にする。

”怯え”は全くないがらしくない雰囲気押しつぶされる気がした。そのせいか声に途切れが生じる。

「……………」

何も言い返せない。切なげな表情を見てしまったせいか声が出てこない。

「…何か言う気力が失っていく。」

自分まで衰れんでいく気がした。しかし、自分は組織の”ボス”

”最も強くて組織の中で一番偉い人物に値する人物”
その印象を崩さまいと強がりの表情を浮かばせる。

”弱さ”を覆い隠そうとする。

そのせいか拳銃の引き金を握りしめる指に余計な力を込める。もういつでも『撃つぞ』と言いたいという顔にする。無理に両方の眉をしかめて引きつった顔を作ろうとする。

「これで終わりよ…。新―…」

無理にいいたくないセリフをはく。そして瞳を閉じて引き金の部分に最大限の強い力を込める。

その瞬間引き金の部分が緩んだ。

part - 2 / 69 登場（後書き）

ここで終了します

評価欄そろそろ開けます。ちょっと荒らしの心配があつて…それで開けていませんでした

荒らしの感想がざくざくと書いてあつて…とりあえず開けようと思います

もうラストです。もうあとほんのちょっとだけです

引き金が軽く引かれた。

緩んだ指が少しばかり震えたような感じに変わった。一体何をしてしまったのだろうか？

その”何か”を起こした張本人の蘭にさえ一瞬の光景は映らなかった。

――何が起きたのか？いまいち理解出来ないまま一瞬の時間が刻まれる。

目には一瞬の”光景”映らなかった。しかし、目に見えない”何か”が貫かれたような痛さを味わう。

一瞬だけ時空が歪んだ感触があった。

目の前の状況におかれている『何か』が残像として消え散った。

――何もかもが一瞬の時は消えなくなったように反映させた。

ほんの数秒もない一瞬の歪みが消えかける。

はつきりと移る今の状況を凝視する。

――緩んだ指でまだ支持していた拳銃を確認して現実^{いま}の状況に戻る。やや斜め角度に視線を向けて今の状況を把握しようとする。

臉を大きくして映し出される残像を確信出来るように凝視する。

飛び散った弾は、どこに行ったのか？と注目する。

拳銃に装備されているはずの弾の行方が踏めない。何か”嫌な予感”という不確かな空像が頭の中でフル回転でまわる。

気づかない内に冷や汗が頬にまで垂れ流れようとしている。
地に零れ落ちるような位置にまで辿り着こうとしている。

消え散った弾のせいで部屋が煙った。

弾を撃った近くであるせいか目の前に煙った光景が濃く見える。

奥深く目の前の人物がシルエットとして嫌という程映される。

そのたびに見えない不安が揺らぎを増す。

拳銃をしつこく支持する指から力が抜けていく感触がつたる。

煙った光景がだんだんと薄らいでいる。

”何か”心の芯まで貫く痛い気持ちから解放されるのかどうかと緊張感を抱く。

煙が忽然と消え去っていく。シルエットがだんだんと濃い残像に変わり果てていく。

そのたびに不安感と緊張感が揺らぐ。

「――何なの？」

あまりの不安定化のせいか不意に閉ざされていた口元から言葉を零す。

そのたった一言を言い終わった後自分の零した言葉が虚しく残る。

煙が完全に消えて面に待ち望んでいた像が映される。
その光景がはつきりとなった瞬間に顔色が変化する。

「もう、こんな愚かな戦いは終わりにしねえか？ 蘭……この戦いは
埒があかねえとわかってるんだから……。」

「……………」

突然の登場に思いもかけない言葉までも呟いて驚きを隠せない。
不安定に陥った今の状況からさらにどん底に落とされていくような
気がした。

「……心のどこかに『コナンを』撃つ」気があったから指を緩めた
のだろう。

指を緩めた「殺す気があった。

そういうことなら、”このまま感情に流されて次々と撃ちたい”気
分に陥る。

そんな気持ちを押し殺すような躊躇^{ためら}いが込みあがってきて葛藤心が
強まっていく。

はつきりと見えた光景を目の辺りにしてしっかりと凝視した。

そこに映っているコナンはいつも見ているコナンとは違う。――ど
こか痛々しさを感じ取れたコナンが立ちすくんでいた。

part - 2 / 7 0 見えない影（後書き）

更新しました。本当に大変です

こっちもラストですあとちょっとですが最後まで宜しくお願いします

part - 2 / 7 1 不思議な光景

なかなか見せなかった哀れみの表情を見せつけるように映る。

嫌でも頭の隅に哀れみが含まれた表情が浮かぶ。 ” それ ” が、少し鬱陶しく感じる。

隅から隅まで ” インプット ” するような感じが嫌に思う。

不安定化が早まるたびに ” 哀れみの表情 ” を見せつけられる。そんな感を味わう。

拳銃の支持が不安定であるせいか斜め角度に ” 僅かな揺らぎ ” が入ったような感じがした。

――拳銃を所持するのか手放すのか

その二択について頭の中でも真っ白になる。

何か働かせる気力のない頭の中に白紙が浮かぶ。

「 蘭 . . . 戦いなんて . . . もう、おしまいにしてようぜ。戦ったってオメーにも得なんてねえんだからよ。もう無駄にお互いを傷つけあう必要なんてねえだろ . . . ? 」

また哀れみの表情を見せつける。瞳を少し閉ざして語尾の部分を弱めた口調になる。

その珍しい光景に蘭は圧倒させた気分になる。表情まで青ざめた感じに変色する。

一時だけ薄暗い景色に視線をやる。

” 何かが思い立った ” と合図するように口元を尖らせて威圧感を表示する。

コナンに ” 対抗する ” って姿勢に変えてから尖らせた状態で口ずさむ。

「何よ。何全てをわかったような事を言っているのよ。これは、私の仕事なのよ。この戦いは、私は貫き通すって決めたのよ。損得なんて関係ないわ。いつか新一、あんたを葬って後悔する事になってもそれも仕方がない事だと認めるわ。」
声のトーンがだんだんと弱まっていく。

蘭は、一旦息を吸って『何か』新たな事を述べようとする。その時に同時に拳銃を握っている指を僅かな力を注ぐ。

「もう…無駄な事だといっても私には、撃つしか選択肢はないのよ。一々忌々しい何かにとりつかれたくないのよ。悠衣のように私を徹底的に調べつけるのもいるのよ。すべてにおいて迫りかかってくるものから解放されたいのよ。」

もう鬱陶しい重みから解放されたいのよ!!」
最後の語調が強く通る。

何が ” 一番大事 ” なのか? そのような事が頭から消えかかる。

鉛のように重さを増した足を無理に運んで前の方へ前進する。
手を伸ばして拳銃を出して銃口を強調するかのように前にさしめす。

銃口の傷を印象づけようと更に見せつける。

「でも、それにしてもしぶといわね。今更だけど、質問するわね…。なぜ、拳銃の引き金を引いて命中したはずなのに無事なのかしら…
…？有り得ないわね。」

疑問そうに質問する。拳銃を握りしめた状態を保つ。

無事な状況のコナンは『この場』は一応静観する。痛々しそうに目を軽くおさえながら。

part - 2 / 7 1 不思議な光景（後書き）

春休みになってだんだん時間が空いてきました。文字数最近約1000文字程ですね！。まあ、理由は特にはないです。沢山の文字程かく程の時間がないだけですもうそろそろですね。完結も4月の学校始まったら忙しいですよ。完結まで頑張って書きます

part - 2 / 7 2 最後の嵐の前

コナンは落ち着いた様子を見せる。
そして、痛々しそうに片目を抑える。

蘭に向けられた銃口を睨みつけるように凝視する。
わざとらしく落ち着いた雰囲気を漂わせる。悲しげな表情を浮かべる。

「戦う気はないっていうような態度をとる。瞼を深く閉じて哀れんだ表情を表示する。」

腕を寒気が走るぐらいにふるわせて哀れみの様子が強調させる。

「因みに、弾がこっちに迫って来たぜ。まあ、でも無事助かったけどな……。少々危険だけど一発賭けてみて助かったんだよ。」

助かった理由をわからないような言い方をする。
妙な笑みを軽く浮かばせる。

「助かった理由は教えてくれないのね……。敵に塩をまいたりはないわよね……。要するに情報を敵に教えられるわけないものね……。」
続けて苦々しい言葉を吐き捨てる。

手に拳銃を持ちながら僅かな笑みを零す。

「何かわからない」ものを思い浮かべて軽く憫笑をする。

コナンは、悲しげな表情を浮かべてさつきと違う語調で呟きを零す。

「なあ、本当に拳銃を捨ててくれねえか。こんなお互いを傷つけても意味がねえんだよ。マイナスな事はあったけど…一体何が面白いんだよ！こんな事……。傷つくだけじゃねえか！！」

語調を更に強めて叫んだぐらいの大声になる。

何かどこかが傷つけた表情^{かお}を見せつけて頂点に達するぐらいに声を張り上げる。

「……………！？」

突然”言葉”の語調が強まった事で圧倒される。どこか凄まじいオーラを発されているような感じがする。

あまり想像もしなかった悲しげな表情^{かお}に戦いを否定する一言

普段と違うまた別のコナンの姿が映ったように見えた。

光景に対しての驚きが隠せず面に表れる。

その面の表情をしまい込もうとわざと眉を上げる。

「煩いわね……。じゃあ撃つわよ。さっきは命拾いしたみたいだけど…次はそんな簡単にはいかないわよ。」

思ってもいない言葉を吐いて拳銃を突き刺すように向ける。

”偽りの不敵な笑み”を浮かべて挑発的な言葉をとばす。

”植え付けられた”感覚から逃げようとする。人をあっさりと逝かせることに新たな躊躇^{ためら}いが生じる。

死にざまを見まいと半面目を綴じる。目をおさえて光景を見ることが避ける。

「じゃあ撃ってみるよ……。」
挑戦的な態度を示す。『もういつでも来い』って感じの姿勢に整える。

「……………!？」

よく理解出来ない。挑戦的な態度に出るコナンに対して何か自信が残っている気がして手が出なかった。

拳銃の引き金を支える指に滑りが入った汗が滲む

一瞬だけ歪みが生じた。これからの『何か』を意味するかのように

…

part - 2 / 73 最後の決断

何なんだろうか。

この物すごくありえない自信は・・・

流石に組織のボスと名乗る蘭でも怖ろしさを覚えた。いつもと違う雰囲気漂わせるコナンに対して動揺が隠せない・・・

「どうしたんだよー。撃ってみるよ…。撃つんだろ？なら、撃ってみるよ！」

挑発的な態度を見せるコナンに対して余計に驚きが隠せなかった。何もいう言葉が見つからない。――どうするべきなのか？頭の中で”考え”を巡らせていた。

コナンがあっさり撃ってみる…って呟いたこと。――簡単に撃てるわけがない。そんなあっさりとスルーするわけがない。

撃たせることが出来ないはず。そんな思考が交錯する。

その考えが強まっているせいか拳銃で撃とうにも引き金が緩まない。コナンの挑発的な笑みが植え付けられるような感じがした。

「どうした？ずいぶんと慎重だけど、撃つんじゃねえのか？さっきから撃つつもりだったんだろ？
戦いを選んだんだろ・・・？」

強張った口調でものをいう。語調を所々強めた感じで呟く。語尾の辺りを怒りと感情に任せたせいか強まった音になる。

『その言葉』を蘭に深くインプットするように伝えようとする。

”戦いを選んだ”事はどういう事なのか教えつける為に”後悔”の二文字を植え付けようとする。

——蘭はどこかで油断するはず。

その心理が頭の中で働く。

それを狙ってか”撃ってみろ”と挑発的な言葉を強調する。

「—————？」

追いつめられた感が走る。拳銃を支持する指に汗が付着する。

いやな汗が滲んでくる感触がする。

拳銃が床にまで到達しようといやな汗が滑る。

密かに滲み出てくる汗のせいで心地が悪く感じる。

通り風が緩いスピードで蘭の目の前を注ぐ。

ゆったりとしたこの空気が今の自分の立場を邪魔するようで鬱陶しく思えた。

滲み出てくる汗から解放されたい感があつた。

撃つ事を望んでいるコナン

——その考えの裏側には”何か”がある気がした。しかし自分
は組織のボス

この貴重な決戦で”余計な感情”に流されている場合ではない。その言葉を叩きつけるように刻み込んでおく。威厳を見せつけようと堂々たる態度で拳銃を強く握り締める。

腕から指までに有り余った力を含ませて潰すように握る。渾身の一撃でもくらわすかのように精一杯に握り締める。目の色まで変えて視線を引き金に移す。

引き金を支える指に汗が溜まる。

しかし、次の瞬間指の動きに変化を伴った。

滲み出てくる汗を無視してわけのわからない力で引き金を弾いた。

と同時にあたりもなく乾いた音が部屋全体に強く響いた。

part - 2 / 7 4 歪んだ無の世界

部屋全体に乾いた音が響いた。

流れるようなリズムで……。一瞬ものが見えなくなるかと思うほどの大きな音を鳴らして……。

さつきよりも周りに広がる煙

今、気が遠くなる長い時間が続いた。

白く染まった道が目の前に広がった

目に映る光景は今や仄かな煙のみ。目の前の状態がわからない事に気分が不安定になる。

緊張感が走る。今、自分が何を起こしたのか？”その行動”が頭から抜けていく気がする。

——煙だけしか見えない。

たったそれだけの事に心が不安定になる。

自分の行動の怖ろしさが改めて知ったような気がした。

頬に熱い汗がつたっていく。

気づかないうちに一滴ずつ零れ落ちる。

流れ出す妙な汗と共に時が徐々に刻み込んでいく。

刻み込んでいく時の間にも映る光景は、煙だけ。

煙がだんだん薄く変わってきた。——シルエットとして撃った人物が反映させた。

——またはめられたか？

『その言葉』を強く印象付けて額を深く手で支持して心底でがつかりとする。

たまに横を通り抜ける風が煙く感じる。部屋に”歪み”が加わったような感覚がする。

（一体どうなったの・・・？）

眉をひそめてわずかに震え出す。震えが生じたせいか凜と張り付いた空気が頬にまで感じる。

”冷風”と熱い汗が同時に頬に到達する。

煙が消えていく。その瞬間を瞬きをせず凝視する。

シルエットが濃くなりやがて、煙が消えた。そして、そこには堂々たる態度を見せつけてコナンが立ちすくんでいた。

「どうして…。」

あまりの動揺のせいか不意に一言を零す。
不安定化が激しいせいなのか語調がやや弱くなる。
今、奈落の底までに落ちていく気がした。

足元を気に留めては更に不安定化が始まった。

「蘭：何度やっても結果は同じなんだよ。あとは蘭次第だ。蘭がこの戦いに終止符をうてばこの戦いは終わるんだよ。もう、結果は同じなんだよ……。」

いつもとは違う穏やかな雰囲気を保ちだして教えつけるように語る。やや斜めに俯いて一歩ずつ前進する。動きを止めたあと片足で小刻みに床を叩く仕草を行う。

「何をいうかと思ひ切れれば……何分かりきったようなことをいうのよ！！」

だんだん語調が強まったいく。語尾の言葉を印象付けて同時に拳銃を構える姿勢を取る。

「あつ、ちよつ……。」

『あつ、ちよつと』と密かに呟いた言葉を遮って拳銃を発砲する。止める時間もなく隙だけが見える。

またしても派手な音が次々と辺りに鳴り響く。

怒りの強まりのせいか拳銃の扱いが荒々しくなってきた。

普段なら絶対に見ることのない蘭の表情が今ここに一つ存じていた。

——発砲が増えてきた。それと共に弾が鈍った音をならせて下へ転

がり落ちる。

微かに弾が転がり落ちる音が響いた。

煙が薄れていく。またシルエツトが目の前で濃く映る。

蘭は瞼を大きくひらいて目の前の仄かな光景に凝視する。

またしても目の前に狙ったはずの人物が堂々とした態度で笑み一つ浮かべない状態で立ちすくんでいた。

「ど、どうして…どうしてなの…。確実に狙ったはずよ…。どうして当たらないのよ…。」

震えた状態で悲しそうな視線を送り吐き捨てたような口調に変えて不満を零す。

そして、拳銃を叩きつけるように地にへと落とす。

そのあと、怒り狂った様子をなるべく見せないようにと一旦心を休める。

痛々しい視線をまた送りつけるように訴える。

外からも嵐のような強まった風だけが吹きわたる。

散らばっている葉が荒れて窓ガラスにくっつく。

少々の寒気が走る。しかし、”それ”を遮ろうとすべてを絞り込んで声を引き出す。

「前々から博士に開発して貰ったこの…。」

一瞬言葉が途切れた。そして、喉の奥から次の言葉を整えると共に

顔の一部になっている眼鏡に軽く触れる。

「この…硬質なガラスで作られたこの眼鏡のおかげなんだよ…。」
語尾が少々弱めの口調になっている。いつもなら犯人に向かって自信満々に語るものの今回は相手が蘭であるせいか途切れた喋り方になる。

たまに表れるコナンの哀れみの表情が一瞬だけ映っていた。

――今は、仄かな煙に包まれた状態
その中で刻まれていく時間に気に留める。

蘭は窓ガラスのせいで透けて見える外に目線移して虚ろな瞳へと変える。

そして、頭の中で白紙が回る。

「なあ、もう一つ、教えてくれねえか？なぜ、江戸川コナン」工藤新一ってわかったのか？」

「フン、当たり前じゃないの…そんな事…どこの世界に伊達眼鏡かけた小学生がいるのよ…。その時点で例の薬で小さくなったんじゃないかって想像つく…わよ…。」

沢山の汗を頬に流した状態になる。そして、呟きがだんだんと弱ま

った音になって途切れる。

有り余った力が抜けて言葉を繋げる事が困難な状態に陥る。そして、
悲しい笑みをそつと浮かばせた状態でゆっくりと地に落ちていった。

part - 2 / 75 本当の終わりを遂げる時

—— ゆっくりとした時の流れによって地にへと落ちた。

その光景を目の前にいたコナンは見逃さなかった。妙に穏やかな表情をうつすらと消えていった。

さっきまで全く見せる事のなかった緊迫感が引き出てきた。

「あつ、オイ！蘭どうした！蘭！！オイ！！」

突然目の前で起きた状況に対して怒りが込みあがってきた。

うつすらと映る煙を無視して気を失った蘭に視線を向ける。そこで深々と”何か”を考える姿勢を取る。

そして、その後に”何か”を思い立ったかのように急速なスピードで走り出す。

持ち前の足の速さのせいか煙がちよつと薄らいだ頃には、忽然と姿を消していた。

—— 気がまだ確かではない。意識の無いまま時だけが刻まれていく。無気力なままで何かを思い浮かべようとする。目の前の像を確認を通ろうと重々しい瞼を開けようとする。

(誰……………?)

心の中で自分に呟きかける。
目の前に人影を感じた。僅かに映る映像を確認しようと瞼を更に大きく開けようとする。

——自分の同じ雰囲気を保ちだしている人物。そんな感じがした。
その予想が当たっているのかと確認を取る為に前を見上げる。

「……………」

目の前に立ちはだかっていた人物を目にして驚いた表情を見せる。

こんな所にいるわけがない。そんなはずなのに普通に純粋な笑みを表面から見せている人物が目映る。

いつも自分が見せていた”笑み”を浮かばせていた。

「明美さん……ど、どうしてここに？」

この世に存在しないはずの人物がしっかりと存する事に驚きが隠せなかった。目の前で焼きつくように凝視していた。

幻なのか確認するぐらいに怪しさのない素顔をじつくりと堪能していた。

「あの例の小さな探偵さんよ……。彼がすべてに関して終止符を打ってこの事件を終わらせたのよ……。そして、私をこの世に蘇らせたのよ……。」

穏やかな口調で語る。どこも悪い部分はなしで普通に笑みを見せて……。

「小さな探偵さんってコナン君の事？」

「ええ、彼が警察に今までの状況をすべてを伝えたのよ……。」
その瞬間に蘭の表情から寂しさが入った。
何か思い詰めたようにこの上ない辛そうな表情^{かお}に変えた。
濁らせていた口から突き刺さる言葉を零そつと口を開ける。

「じゃあ私は、どうすればいいの……私は、組織のボスとして何人も
の人を殺すように命令とかしてしまったのよ……。私は一体どうなる
のよ……。」

蘭が慌ただしくあたふたとする。抑えきれない感情が一気に溢れ出
てくる。

冷静心が欠けた状態になっていた。

それに対して明美はゆっくりと瞼を綴じて口ずさもうとする。

「大丈夫よ……。警察には、組織のボスは自分で無闇に拳銃を撃って
自殺したといっておいたみたいだから……。でも、焼死体はなかった
みたいだからちょっと危ないけどね。」
安堵させるような口調で話し掛ける。

しかし、まだ不安げな表情を面に出して目を細める。

「それにしても私は一体何をしているだろう？ そうだ！ 明美さん……あれからどうなったんですか？」

——明美は今おかれていた状況を詳しく説明した。

死人は全て生き返った事や、コナンが事件の事を全て教えた事や、組織のアジトに乗り込んで解毒剤のデータを手に入れた事などを

「それよりもこれ……。」

明美は、言葉を途切れたままにしておいてポケットから”何か”を取り出そうとする。

そして、手のひらをゆっくりと広げる。

「これは……。」

「これはね……解毒剤よ……。あの小さな探偵さんを元に戻す事が出来るよ。」

彼は、いつも通り毛利探偵事務所にいるわよ。さあ、その解毒剤を受け取って彼のところに……。」

明美は、その解毒剤をそつと渡した。

何も企てなど無い事を表示するように軽く笑って。

蘭が流れるままに解毒剤を手取る。そして、その解毒剤を目の前で焼き尽くすように見届けて床から立ち上がった。

そして、『何か』を思い立ったかのように無の世界としたこの部屋をあとにした。

明美は口元を緩ませてその場を見届けた。

そして、後ろの窓ガラスから透き通る陽光を目にした。

part - 2 / 75 本当の終わりを遂げる時（後書き）

すみません。これで終了です。コナンは新一に戻ってねーじゃんって感じですけど、それは蘭に任せます。蘭はすでにコナン＝新一ってわかってるからどっちでも別に困る事はない。解毒剤の事に私自身書きたくないっていうか気まぐれでそこらへんが好きに”考えてくれ”みたいになりました。

いや、どっちにしるハッピーエンドのはずです。コナンにとっては蘭が幸せである事。今蘭に選択肢は与えられたのだから蘭に今後の道を選ぶ権利があるっていうのが私の意見で…これでいいかな？と思っています。

えっと、私は春休みを最後に暫くサイトにアクセス出来ません。ちよつとした諸事情で…詳しく話たくないのでこれで…明美さんが最後に窓ガラスに映る景色を見たのはあれから時を経た事を表すためです。何か言い忘れた気がしますすがとりあえずこれで今までありがとうございました

追記ーコナン達はおそらくフツーに過ごしていると思います。あとはご想像にお任せを…（逃オイオイ…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2323b/>

ここから始まったpart - 2

2010年10月8日12時38分発行